

カリキュラムの見直し



# カリキュラム・マネジメントの手引き



手作業って大変だな。

こんなにたくさんお米ができるんだね。



大阪府教育庁市町村教育室  
小中学校課

## <はじめに>

新学習指導要領の確実な実施のためには、各学校においてカリキュラム・マネジメントが適切に実現されていることが欠かせません。そのため、大阪府教育庁として、令和元年度からの2年間で「カリキュラム・マネジメント調査研究事業」として、カリキュラム・マネジメントの実現のために重視すべき観点ごとに項目を立て、調査研究校において実践研究を進めていただきました。

この度、その事例や参考資料等を手引きとしてとりまとめました。教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感しながら、学校全体で組織的に取り組みを進めることができるよう、各校の実態に応じてご活用ください。

## <令和元・2年度 カリキュラム・マネジメント調査研究実践校>

- 摂津市立摂津小学校
- 枚方市立招提小学校
- 枚方市立第一中学校
- 和泉市立北池田小学校
- 和泉市立信太小学校
- 熊取町立西小学校
- 岬町立深日小学校

## 第1章 カリキュラム・マネジメントを知ろう

- カリキュラム・マネジメント Yes/Noチャート
- “カリキュラム・マネジメント”って何だろう？
- カリキュラム・マネジメント Q&A インデックス

## 第2章 カリキュラム・マネジメントの実現に向けた実践事例とその工夫について

### カリキュラム・マネジメントの3つの側面を通して、教育活動の質の向上を図ろう

#### (1)教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく事例

- ・ 主体的に考え、高め合う子どもの育成 ～子ども理解を基盤に、つながりに気づく学びをめざして～ 摂津市立摂津小学校
- ・ 国語科を軸とした教科等横断的な視点でのカリキュラム・マネジメントを通して、子どもたちの言語能力の育成を図る 枚方市立招提小学校
- ・ 総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメント ～生徒の資質・能力の教科等横断的な育成～ 枚方市立第一中学校
- ・ 「食に関する指導」を通じて家庭・地域とつながる西小っ子 熊取町立西小学校

#### (2)教育課程の実施状況を評価してその改善を図る事例（PDCAサイクルの構築）

- ・ 子どもたちの資質・能力の育成をめざしてつながり、深める“チーム北池田”の取組み 和泉市立北池田小学校
- ・ 聴き合い、学び合うことをベースに、資質・能力を育む 和泉市立信太小学校

#### (3)教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保とともにその改善を図る事例

- ・ ひと・まち・つながる教育 岬町立深日小学校

## 第3章 カリキュラム・マネジメントの実現のための参考資料集



# 第1章

## カリキュラム・マネジメントを知ろう

カリキュラム・マネジメントを学校全体で組織的に進めるためには、まず、カリキュラム・マネジメントの根拠や意義を理解しておく必要があります。第1章の「Yes/No チャート」や「Q&A インデックス」を活用しながら、学校やご自身にとって課題となっていること、必要としていることを明確にしてみましょう。下表に示した学習指導要領解説総則編の該当箇所もあわせて読み進めると、より理解が深まります。

学習指導要領 第1章 総則 該当箇所	
第1の4	カリキュラム・マネジメントの充実
第2の1	各学校の教育目標と教育課程の編成
第2の2	教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成
第5の1	教育課程の改善と学習評価等
第5の2	家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携

# カリキュラム・マネジメント Yes/No チャート

この「カリキュラム・マネジメントの手引き」  
を読み進めていくにあたり、あなたが必要な  
情報にいち早くたどり着くためのチャートです。



あなたはどのタイプでしょうか。  
矢印に沿って進んでみましょう！

(凡例) **Y** → …YES

**N** → …NO

©2014 大阪府もずやん

## START

カリキュラム・マネジメントの  
基本的なことから知りたい



第1章  
「“カリキュラム・マネジメント”  
って何だろう？」へ



カリキュラム・マネジメントの実現  
をめざしてはいるものの、具体的に  
何か課題が明確になっていない



第1章  
「カリキュラム・マネジメント  
Q&A インデックス」へ



各校におけるカリキュラム・マネ  
ジメントの実現に向けた学校の  
取組みの様子が知りたい



教科等横断的な学習について  
学校全体で進めていきたい

**Y**

第2章(1)  
「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を  
教科等横断的な視点で組み立てていく事例」へ



PDCAサイクルによって  
教育課程の実施状況を評価  
してその改善を図りたい



第2章(2)  
「教育課程の実施  
状況を評価してその  
改善を図る事例  
(PDCAサイクルの  
構築)」へ



地域人材や資源など  
を活用して  
カリキュラム・マネジメント  
の実現をめざしたい



第2章(3)  
「人的又は物的な  
体制の確保とその  
改善を図る事例」へ



カリキュラム・マネジメントの実現  
に向けて、すぐに使える資料がほしい

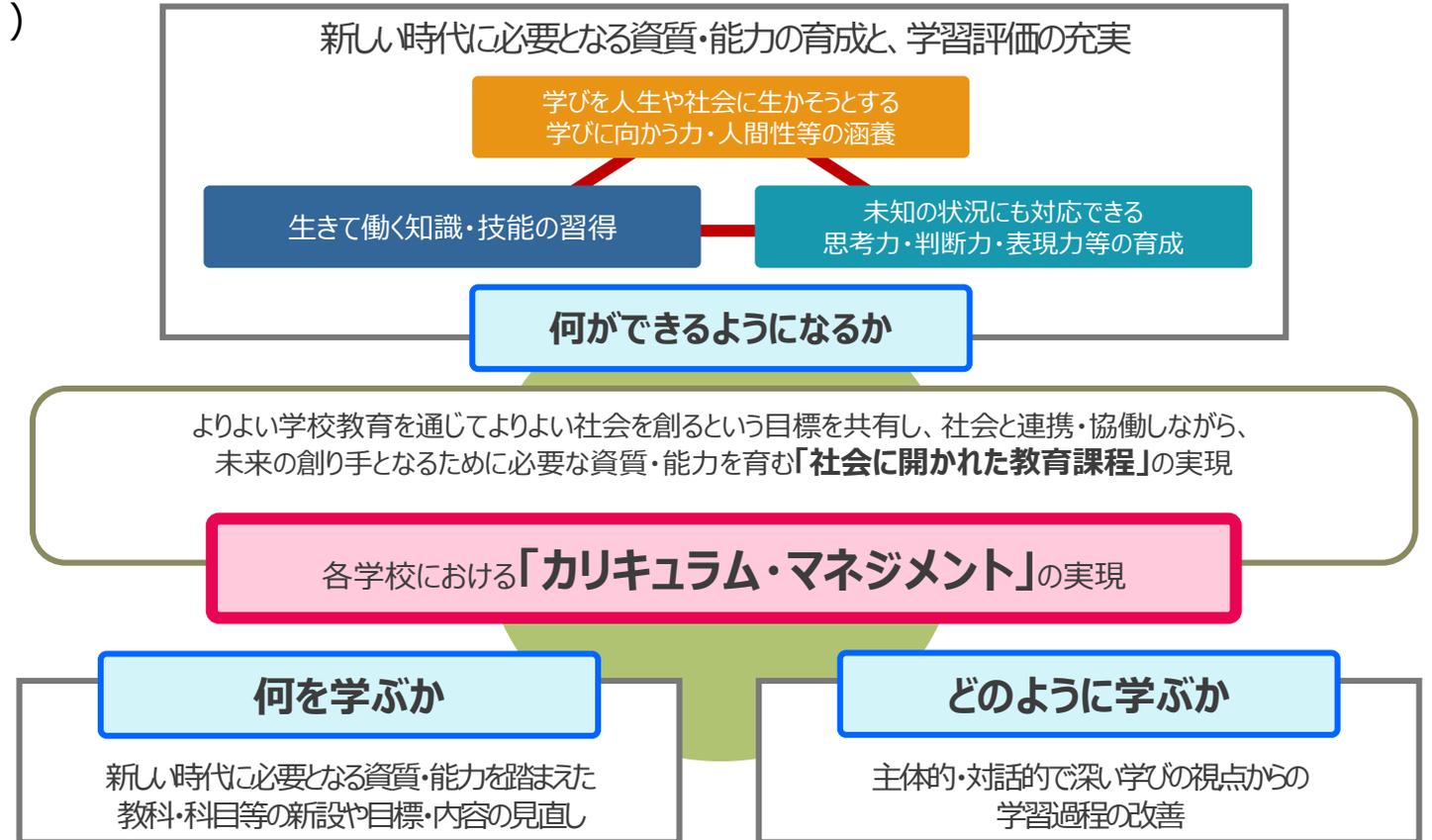


第3章  
「カリキュラム・マネジメントの  
ための参考資料集」へ

# “カリキュラム・マネジメント”って何だろう？

(小学校学習指導要領 第1章 総則 第1の4)

4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。



# 「カリキュラム・マネジメント」の3つの側面

児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握しておくことが大切

- ①教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

これらの「3つの側面」を手だてとしながら、  
**教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことが重要**

## POINT

- (1) 「学校の教育目標」と「教育課程」はつながっているか
- (2) 「教育課程」と「授業」はつながっているか
- (3) 「学校の教育目標」、「教育課程」、「授業」は、児童生徒、地域、学校の実態に応じたものになっているか
  - ・目標や内容等は妥当か
  - ・人的・物的体制に無理はないか



それぞれのつながりを意識して、俯瞰的に捉えることが大切です



©2014  
大阪府もずやん

「木を見て、森を見ず」  
になっていませんか？



“カリキュラム・マネジメント”って何だろう？

# POINT (1) 「学校の教育目標」と「教育課程」はつながっているか ～「学校の教育目標」と「教育課程」をつなぐ～

小学校学習指導要領解説 「各学校の教育目標と教育課程の編成」

…各学校において教育目標を設定する際には、次のような点を踏まえることが重要となる。

- (1) 法律及び学習指導要領に定められた目的や目標を前提とするものであること。
- (2) 教育委員会の規則、方針等に従っていること。
- (3) 学校として育成を目指す資質・能力が明確であること。
- (4) 学校や地域の実態等に即したものであること。
- (5) 教育的価値が高く、継続的な実践が可能なものであること。
- (6) 評価が可能な具体性を有すること。

学校の教育目標と教育課程をつなぐことについては、「各学校の教育目標と教育課程の編成」として学習指導要領解説にこのように示されている。

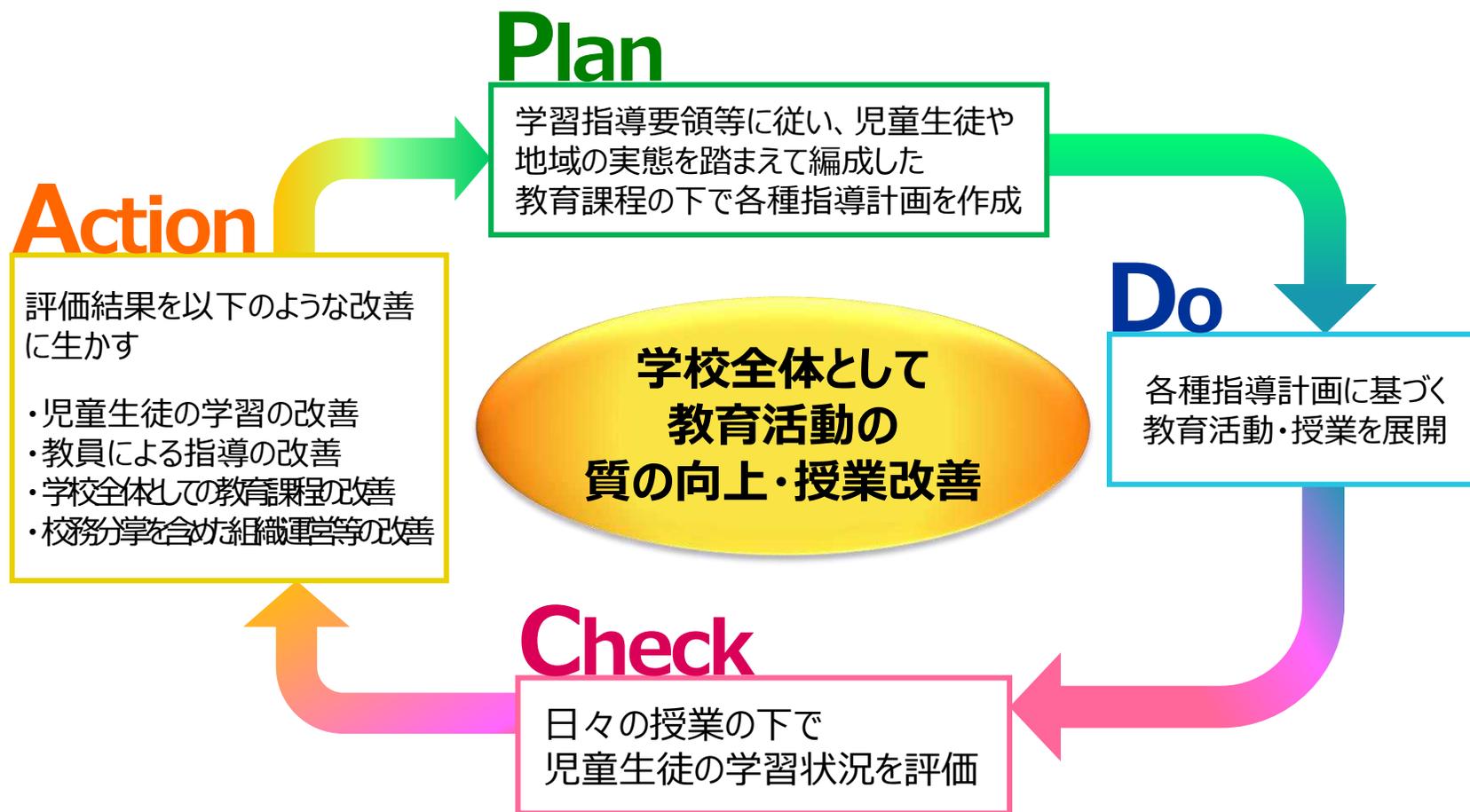
仮に自校の教育目標を問い直す際には、例えば、次のような観点が考えられる。

- ア 自校の児童生徒、地域の実態に即し、自校の児童生徒や教員にとって必要感のある教育的な価値を有するものになっているか
- イ 育成をめざす資質・能力が明確であり、評価可能な具体性を有したものとなっているか
- ウ 学校の教育目標のめざすところや、その実現に向けた手だてが教職員間で共有され継続的に実施できる持続可能性を伴ったものとなっているか

例：学校のランドデザインや学校経営方針、教育課程編成の方針等

令和2年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会 総則部会 配付資料をもとに作成

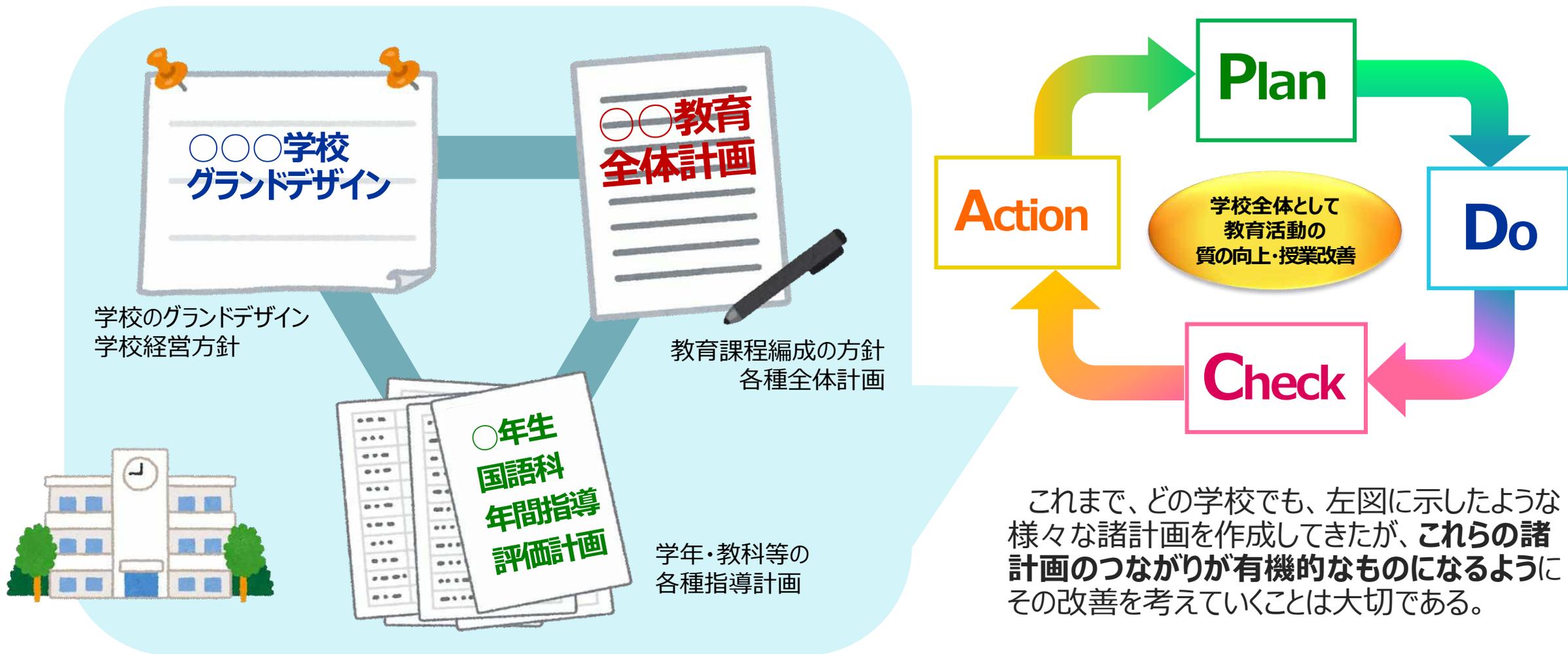
# POINT (2) 「教育課程」と「授業」はつながっているか ～「教育課程」と「教育活動（授業）」をつなぐ～



Actionにある「教員による指導の改善」とは、すなわち、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」のことである。

このことからカリキュラム・マネジメントと主体的・対話的で深い学びはともに重なり合っているといえる。

## POINT (2) 「教育課程」と「授業」はつながっているか ～「諸計画のつながり」を改善する～



# POINT (3) 「学校の教育目標」、「教育課程」、「授業」は、 児童生徒、地域、学校の実態に応じたものになっているか ～学校評価との関連を図り、改善の切り口や重点を精査する～

小学校学習指導要領 第1章 総則

第5 学校運営上の留意事項

1 教育課程の改善と学校評価等

ア ...各学校が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。

小学校学習指導要領 解説 総則編 第3章 第5節 1. ①

カリキュラム・マネジメントは、本解説第3章第1節の4において示すように、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えて組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくものである。

学校教育法

第42条 小学校は、文部科学大臣の定めるところにより当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図るため必要な措置を講じることにより、その教育水準の向上に努めなければならない。

令和2年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会 総則部会 配付資料をもとに作成

# カリキュラム・マネジメント Q&Aインデックス

カリキュラム・マネジメント調査研究校が実践を進めるにあたって、苦労したことや実感したことについて、Q&A形式で質問にお答えします。

それぞれのQ&Aで触られている取り組み内容の詳細については、第2章に示されていますので、該当する学校のページをご覧くださいとより理解が深まると思いますので、是非ご活用ください。



©2014 大阪府もずやん

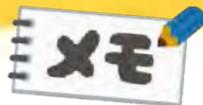


カリキュラム・マネジメントに取り組むにあたって、まず何から始めたらよいのでしょうか？



・本校ではまず、児童の実態を把握し、学校教育目標やめざす子ども像をベースに児童につけたい力を絞り込むことから始めました。つけたい力が決まった後、その力をつけるために、各教科でどんな学習活動を行うか、どの学習をつなげるかを考えながら、年間計画を決定していきました。  
(枚方市立招提小学校)

・まず、児童の様子をみたり、アンケートをとったりすることで児童の現状をつかみました。また、校内研修を行い、KJ法を活用して意見を出し合い、教員全体で、今までの取り組みや児童の課題を共有し、方向性を確認しました。  
(熊取町立西小学校)



単元まとめテスト等を採点・分析したり、児童生徒アンケートの結果から課題を見取ったりして、データに基づいて客観的に実態を把握することから始めてみましょう。



学校全体でカリキュラム・マネジメントの取組みを進めるためにはどうすればよいのでしょうか？

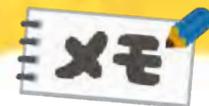


・本校では、まず1つの学年で集中的に取り組むことから始めました。カリキュラム・マネジメントを進め、生徒の学びをコーディネートしたことで、子どもの様子が変わりました。その学びの変容を見取り、校内へ発信したことで、カリキュラム・マネジメントの必要性が学校全体に広がりました。また、学校として生徒がつけるべき力を明確に定めることも有効でした。

(枚方市立第一中学校)

・単元を通じて子どもにつけたい力と、そのための手だてを全教員が参加する事前研で共有するとともに、取組みの成果や課題、現在の取組みのようすを、研修通信を発行して共有することで、方向性や取組みを学校全体に広げました。

(和泉市立信太小学校)



管理職や研究主任だけがマネジメントを進めるのではなく、チーム学校として、学校に関わる全ての人で取り組んでいきましょう。管理職や研究主任のリーダーシップのもと、担任・担任外・支援担・専科教員・事務職員等の区別なく、全ての教職員、スタッフが、めざすべき子どもの姿の実現に向けて、教育活動をマネジメントしていきましょう。



### DO 全職員による事前研の実施

- ねらい
- ・単元の内容を共有する。
  - ・「つけたい力」を共有する。
  - ・「つけたい力」を付けるための手だてを共有する。



「教材の魅力」や「授業を視る視点」の共有



カリマネ表（単元配列表）を作ることのメリットは何ですか？

関連のある内容で単元をつないではいるのですが、成果が感じられないのはなぜでしょうか？



学校の教育計画を俯瞰的に見ることができ、教科の系統性や他教科とのつながり、他学年とのつながりを意識し、学習内容と関連づけて指導できるようになりました。その結果、既習事項を活用したり、他教科の学びとつなげたりしながら、学びを深める子どもたちの姿が見られました。

（熊取町立西小学校）

関連する単元をつなげることだけが目的になってしまっていることも考えられたので、学校教育目標やめざす子ども像に迫るために、教科等の関連を生かすということを改めて確認し合いました。また、取組みの成果を明らかにするために、まずは取組みの評価規準や判断基準を具体化することから始めると効果的でした。

（摂津市立摂津小学校）



年間指導計画表に、教科等の関連を生かした指導の計画や、C評価の子どもへの手だてや改善点を記録し、次年度に引き継いでいくことも大切です。また、前年度の担当者と一緒に計画を立てたり、学期ごとに計画を見直したりするなど、校内研修の持ち方を工夫するとよいでしょう。

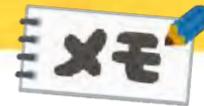


P D C A の C (Check) 機能を向上させるために、  
どんなことを行いましたか？



校内研究授業後の討議会において、ゴールを明確にし、  
授業で見取った子どもたちの姿をもとに討議するようにしました。  
また、つけたい力が子どもたちについてかどうか見取るために、  
単元末アンケートや力だめし問題等を実施し、check（検証）  
を行いました。

(和泉市立北池田小学校)



真に必要な評価項目・指標を精選して設定するなど、  
重点化を図り評価をしていくことも大切です。網羅的で  
項目数の多い指標は、単なる数値の羅列になりがちです。  
“評価のための評価”になっていませんか？

## Check機能の向上のために

## つけたい力を子どもの姿を通して見取る

• 研究授業単元末

アンケートの作成・実施

• 研究授業単元末

評価問題の作成・実施

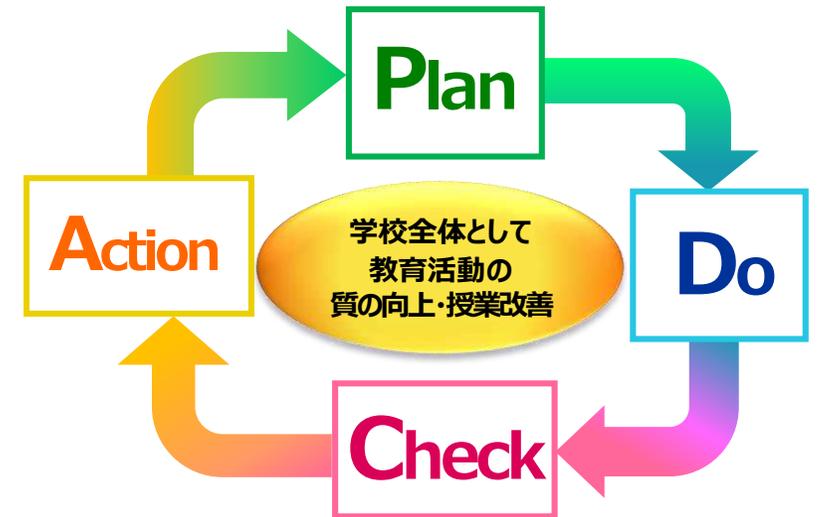
• 市作成力だめし問題の実施

項目	内容	実施状況
1	授業内容の振り返りシートを作成し、授業終了後実施した。	実施済み
2	授業内容の振り返りシートを作成し、授業終了後実施した。	実施済み
3	授業内容の振り返りシートを作成し、授業終了後実施した。	実施済み
4	授業内容の振り返りシートを作成し、授業終了後実施した。	実施済み



項目	内容	実施状況
1	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み
2	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み
3	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み
4	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み

項目	内容	実施状況
1	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み
2	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み
3	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み
4	力だめし問題を作成し、実施した。	実施済み





地域人材を有効に活用するには、どのように連携したらよいのでしょうか？



学習発表会では、地域の方と一緒に、一年間の取組みを劇にして発表しました。

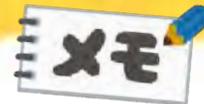


まずは、「地域を知ること」からです。地域の人的・物的資源をどのように捉え、把握し、つながっていくのがカギになります。子どもたちが地域の方々と出会い、自然・文化・環境等にふれ合い、そのために必要な教育の内容等を、教科等横断的な視点で組み立ててきました。

また、地域の方々との普段のお付き合いから新たな発見があります。発見の中から魅力的な取組みが生まれます。地域の方々は「子どもたちのために何かしてあげたい」と思っています。そのためには、学校も地域に情報発信をしていくことが大切です。

大学・企業・行政などにつながるチャンスもあります。日頃から、子どもたちのために学習できる環境はないかとアンテナを張って、積極的に求めていくことが大切です。「子どもたちにこんな力をつけたい！」という思いを共有して、めざす子ども像を一緒に考えて進めていくことで、効果的な連携につながっています。

(岬町立深日小学校)



学校の「思い」が強すぎて、地域・保護者のニーズに合っていない…ということはありませんか？ 地域・保護者の願いをふまえた「めざす子ども像」をみんなで共有しながら、カリキュラム・マネジメントの実現を図ることが大切です。



カリキュラム・マネジメントに取り組んでよかったことは？



つけたい力(資質能力)に着目して、単元間のつながりを見直しました。



・P D C Aサイクルを確立し、校内研究体制の充実を図ることで、教員が子どもたちの姿を通して校内研究の意義や効果を実感できたことです。その結果、全ての学級で授業改善の視点に基づいた授業を積み重ねていくことができるようになりました。

・教職員全体で課題を共有することにより、取り組み等の改善を図るためのコミュニケーションが増え、協力して歩んでいくことができるようになったことです。学習指導においても、他の教科等とのつながりを意識して、効果的に取り組めるようになりました。



相手の意図を捉えて聞く力がまだ弱いね

家庭科でも...

国語と算数のこの単元で取り組んでみようか。



# 第2章 カリキュラム・マネジメントの実現に向けた 実践事例とその工夫について

カリキュラム・マネジメントの3つの側面を通して、  
教育活動の質の向上を図ろう

## 「カリキュラム・マネジメント」の3つの側面

- ①教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

- ①摂津市立摂津小学校／枚方市立招提小学校  
枚方市立第一中学校／熊取町立西小学校
- ②和泉市立北池田小学校／和泉市立信太小学校
- ③岬町立深日小学校

第2章では、上記①～③の側面に沿って実践された取組みを、調査研究校ごとにまとめています。  
各校の実態や課題に合った取組みを参考にして、カリキュラム・マネジメントの実現を図りましょう。

### <留意点>

- 本文中の二次元コードより、各種資料がダウンロードできます。各校の実態に合わせて加工しても構いませんが、学校HPに掲載する等、データの再配布はしないでください。
- 各校において、本章に掲載された資料を活用いただく際に、資料を作成した当該校に問い合わせをしたり、使用許諾を求めたりする必要はありません。

# 主体的に考え、高め合う子どもの育成

～子ども理解を基盤に、つながりに気づく学びをめざして～

摂津市立摂津小学校

## Why

### なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 書く力をさらに高めるために、教科等との関連を生かした指導が必要だと感じていた。
- 全職員でベクトルをそろえ、主体的に高め合いながら研究を進めたかった。
- 各学年の取組みのよさを全体で共有し、活かすことに課題が見られた。

## How

### どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- カリキュラム・マネジメントを支える環境整備
- 「めざす子ども像」の再設定
- 評価規準を児童に分かる言葉で具体化
- 教科等横断的な指導に重点を置いた研修や研究授業、PDCAサイクルによる取組み

## Change

### どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 年間を見通してカリキュラムを編成したり、指導時数を意識して学習計画を立てたりすることができるようになった。
- PDCAサイクルへの意識が高まり、校内研修や日々の学年会の持ち方が変化した。
- 各学年で、既習事項や教科等との関連に目を向け、学習指導要領に立ち戻りながら教材を研究し、創意工夫を凝らした取組みが活発に行われた。
- 授業アンケートで、「新しい学習をするときに、これまでに学習したことや他の教科などで学習したことが役に立った。」と解答する児童が約87%になった。
- 児童が相手意識や目的意識を持って学び、学んだことをアウトプットする力を高めることができた。
- 地域の人的・物的資源を積極的に活用した取組みが進んだ。また、継続的な取組みを進めるために、取組み内容や連絡先等を学年ごとに一覧表に整理することができた。

# 主体的に考え、高め合う子どもの育成～子ども理解を基盤に、つながりに気づく学びをめざして～

摂津市立摂津小学校

## 1. カリキュラム・マネジメントを支えるための環境整備

- (1) 学校体制の見直し
- (2) 指導時数の見直しと学習時間の確保
- (3) カリキュラム表の改訂
- (4) 朝のモジュール授業の実施

## 2. 既習事項や教科等とのつながりを生かした授業デザイン

- (1) めざす子ども像の見直し
- (2) 教科等横断的な指導についての研修
- (3) 「めざす子ども像」に迫るための具体的な手立て
- (4) 学習指導案の見直し
- (5) 評価規準の具体化
- (6) カリキュラムの評価⇒改善⇒次学期のカリキュラムの見直し
- (7) 人・モノの活用

## 3. 既習事項や教科等とのつながりを生かした授業の実践

- (1) 既習事項や体験活動を生かし、書く力を高めるための取組み【第1・3学年】
- (2) 既習の言語活動を生かして、学びを深めるための取組み【第2学年】
- (3) 総合的な学習を柱に、他教科等との関連を生かした取組み【第4・5学年】
- (4) 他教科で学習したことを活用して学びを深める取組み【第2学年】
- (5) 重点目標を設定し、それに迫るための教科等横断的な指導【第6学年】

## 4. カリキュラム・マネジメント研究による成果と課題

- (1) 教師の意識改革
- (2) 教科等とのつながりを意識した授業づくりによる成果
- (3) カリキュラム表の改定、時数の見直しによる成果
- (4) 学年団での研究の活性化（70人力）
- (5) 今後の課題

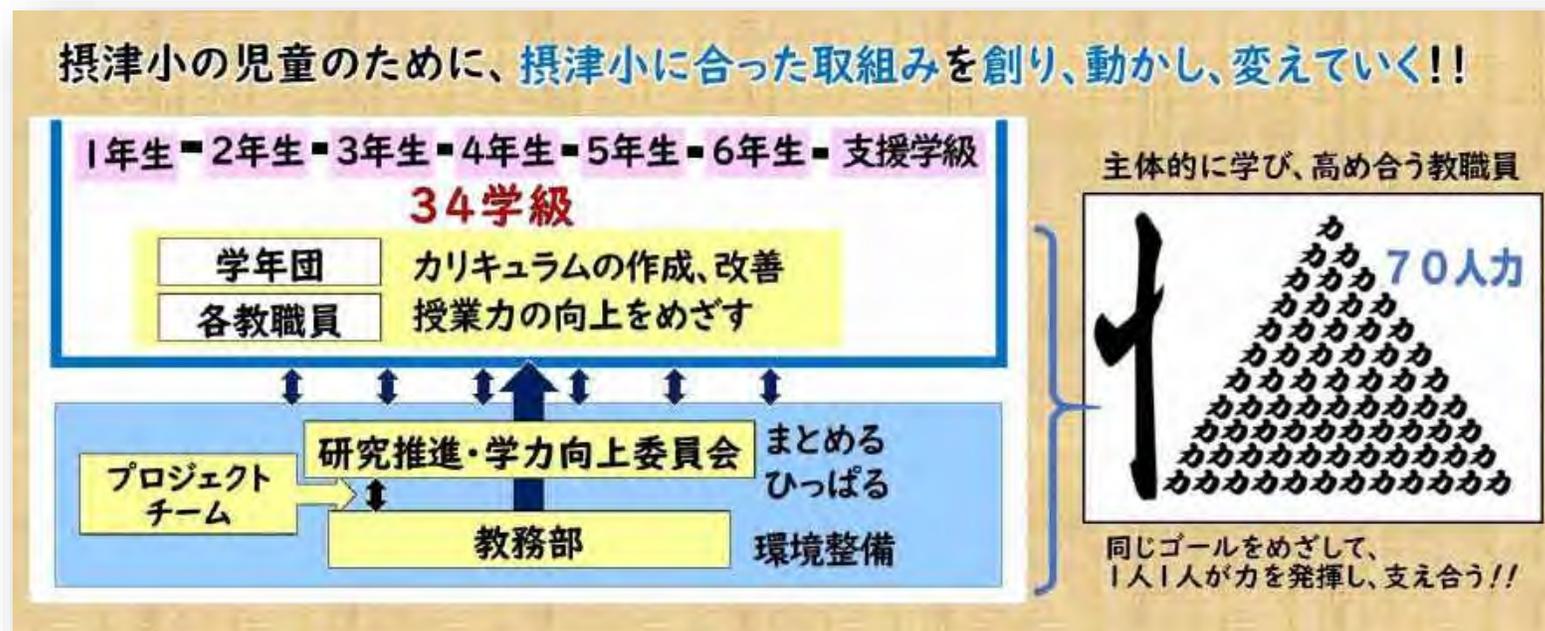
# 1. カリキュラム・マネジメントを支えるための環境整備

## (1) 学校体制の見直し

34学級という大所帯を支えるために、学校体制を見直し、新たに教務部を設けた。教務部は、学校全体に目を向け、1年間のカリキュラムを見通しながら、提案をしたり各学年をつないだりする役割を担った。また、教務部の中に「研究推進・学力向上委員会」を置き、各学級の意見を吸い上げ、機動力を発揮できるようにした。さらに、校内研究の中心となってみんなをひっぱるプロジェクトチームを結成した。

教務部が環境整備をし、研究推進委員会が各学年をまとめ、研究をリードする。学年団では、研究を生かしてカリキュラムを作成し、学級担任などは、それを実践する授業力をつける。このように、それぞれの立場から、カリキュラム・マネジメントを進めた。

そして、まずは私たち自身が研究テーマである「主体的に学び高め合う」教職員集団になろうと、『70人カ』をスローガンに掲げ、子どもたちのために、1人ひとりが力を発揮し、高め合うことをめざした。



## (2) 指導時数の見直しと学習時間の確保

1年間を見通したカリキュラム作成と学習時間の確保のために、まずは本校の年間指導計画や指導時数を見直すことから始めた。これまで、何にどのくらいの時間をかけていたかを洗い出し、1つの表にまとめながら、行事に多くの時間をかけ過ぎていたこと、カット時数が多すぎたことなどを改善していった。そして、各学年の月ごとの指導時数を明らかにし、カリキュラムを作成したり、見直しを持って指導を行ったりすることに役立てた。

また、予定時数と実施時数を比較できるような本校独自の時数集計表を作成し、実施状況を月ごとに全職員に示すことで、各学年が、時数管理をしながら学習計画を見直すことができるようにした。

〔時数集計表〕

月	国語	算数	生活	音楽	図画工作	体育	道徳	特別活動	教科計	特別活動等	総時数
1学期	予定時数	79	31	25	14	20	13	9	18%	6	195
	実施時数	77	40	35	14	19	11	8	11%	1	204
	差	-2	9	10	0	-1	-2	-1	-7%	-5	10
8月	予定時数	13	5	6	3	3	2	2	36%	7	38
	実施時数	17	8	9	3	5	3	0	3%	1	46
	差	4	3	3	0	2	1	-2	-33%	-6	8
合計	予定時数	92	36	31	17	23	15	9	23%	8	243
	実施時数	94	48	39	17	24	14	8	17%	2	308
	差	2	12	8	0	1	-1	-1	-27%	-6	65
9月	予定時数	26	15	10	6	6	5	3	44%	0	65
	実施時数	33	15	11	7	6	8	3	17%	3	80
	差	7	0	1	1	0	3	0	-27%	3	15
合計	予定時数	118	51	41	23	29	21	12	31%	8	318
	実施時数	127	63	50	24	30	22	11	14%	5	388
	差	9	12	9	1	1	1	-1	-17%	-3	70
10月	予定時数	40	20	9	8	9	22	3	57%	7	79
	実施時数	0	0	0	0	0	0	0	0%	0	0
	差	-40	-20	-9	-8	-9	-22	-3	-57%	-7	-79

### (3) カリキュラム表の改訂

教科等横断的な指導に役立てるために、カリキュラム表を改訂した。これまでは、学習内容を大きなまとまりで記していたが、学習内容がわかるような単元名に変更したり、教科書の単元名を全て記したりすることによって、1年間を見通し、他教科との関連を考えることができるようになった。また、学期ごとにカリキュラムを評価し改善するなど、PDCAサイクルでの取り組みに役立てることができた。さらに、単元の配列とともに時数を示すことで、月当たりの授業時数を踏まえながら、学習計画を立て、時数を管理できるようになった。

### (4) 朝のモジュール授業の実施

外国語の導入に伴って週当たりの授業時数を増やすのではなく、モジュール授業によって時数を確保し、これまでと同じ週29コマで行うことに取り組んだ。無理なく計画的に取り組めるように、行事等がなく児童が落ち着いて朝の学習に取り組める週を考え、18週分を年間予定に位置付けた。

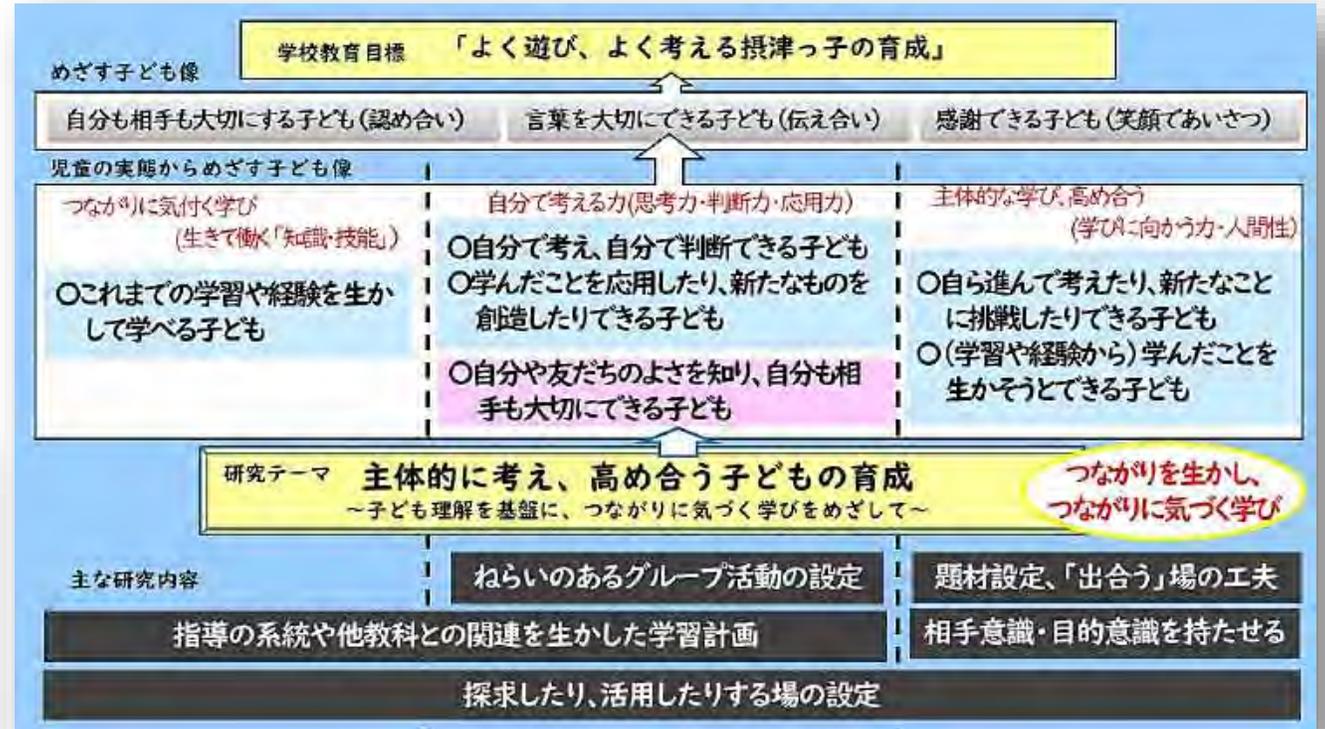
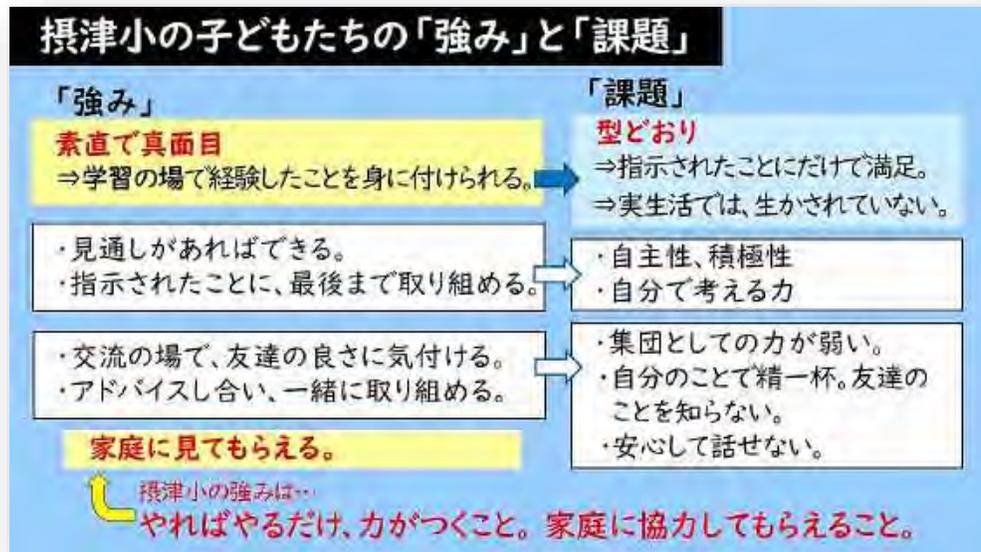


## 2. 既習事項や教科等とのつながりを生かした授業デザイン

### (1) めざす子ども像の見直し

本校の実態に合った取組みを進めていくために、まずは、本校の児童の「強み」と「課題」を全職員で十分に出し合い、新学習指導要領に示された「育成すべき資質・能力の三つの柱」に沿って、『めざす子ども像』を設定し直した。

【実施時期：5月】



## (2) 教科等横断的な指導についての研修

教科等横断的な指導に取り組む中で、既習事項や教科等と「つなげる」ことが目的になってしまう傾向があった。そこで、カリキュラム・マネジメントについて繰り返し研修し、

- 「めざす子ども像」や各教科の目標に迫るために、カリキュラムをデザインすること。
- 児童の実態を踏まえ、授業のゴールイメージやねらいを明確に持ち、それを児童と共有すること。
- 「つながり」を生かした学習計画を立てるだけでなく、それを評価し、改善点を見つけ、授業改善に役立てていくこと。

など、教科等横断的な指導のねらいやカリキュラム・マネジメントの進め方について確認し合いながら、取組みを進めた。  
【実施時期：8月】

### カリマネの進め方の共通理解

#### カリキュラム・マネジメント in 摂津小

「めざす子ども像」に向けて、これまでの子どもの学びを生かし、これからの学びをつくる。子どもの学びを評価しながら、よりよくする。

- めざす子ども像に迫るために、「つながり」を生かす。
- 『子ども理解を基盤』に、ねらいを明確に持つ。
- ゴールイメージを児童と共有する。
- 子どもの学びを評価し、よりよい学びをつくる。

学習効果の**最大化**

国語科  
3時間

生活科  
2時間

⇒5時間分以上の効果

### (3) 「めざす子ども像」に迫るための具体的な手立て

「つながり」を生かした指導の効果を高めるために、その手立てについての研修を行った。

#### 【手立て】

##### ①まずは教師がつながりを意識する

##### ②児童がつながりを意識できるようにする

- ・「見通し」「ふりかえり」の場の設定、改善
- ・ノートを活用

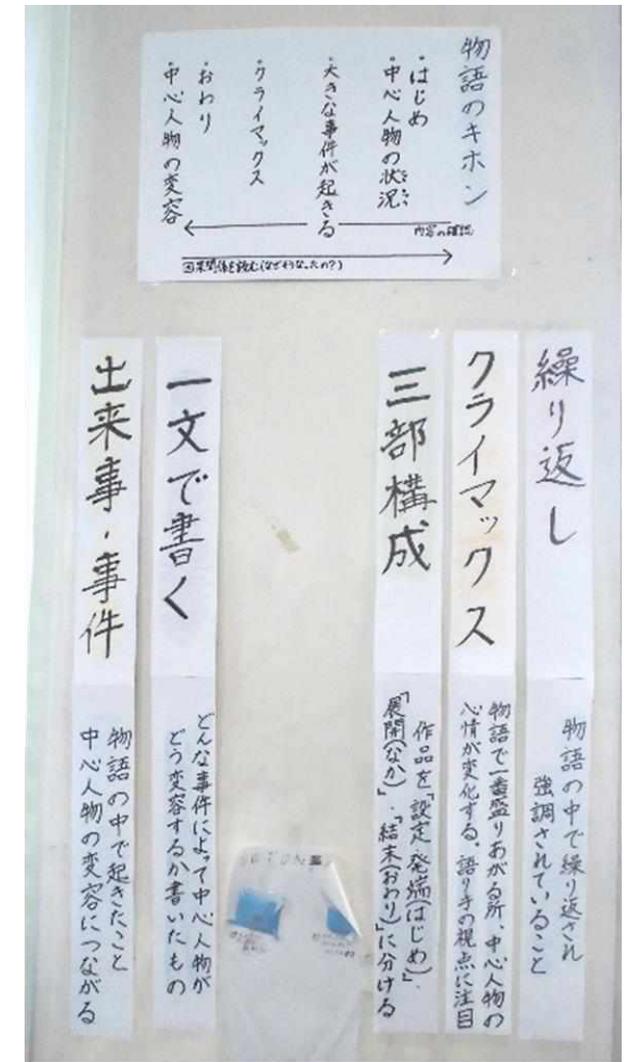
##### ③つながりの「見える化」

- ・学習で使えるツールの掲示
- ・学習計画の掲示
- ・児童の作品やふりかえり等、学習の成果の掲示

##### ④活用する場の設定 ⇒ [次ページへ](#)

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	【学習計画】
紹介文を読み合おう。	すいこうした紹介文をもとに再度、文章を見直して書こう。	相手に応じた言葉を選んで自分の文章をすいこうしよう。	分かりやすく伝わりやすい書き方を知り、自分の文章をすいこうしよう。	紹介文を書こう。	タブレットを使って、紹介文にのせる写真や図、グラフ、表を見つけよう。	自分で伝記や偉人の本を選んで読もう。					今までの自分の生き方や考え方を振り返り、学習の見通しを持つよう。	

(5年生)国語「百年後のふるさとを守る」学習計画の掲示



(4年生)国語「ごんぎつね」  
学び方掲示

## 【手立て】

### ④活用する場の設定

- ・生活に生かす…学習と生活を意図的につなげた学習計画  
生活とのつながり考える場の設定
- ・学習に生かす…他教科や行事等との関連を生かした学習計画  
既習事項や他教科等における学びと関連付ける場の設定  
「見通し」「ふりかえり」の場の工夫
- ・学びのアウトプット…調べたことを実践できる場や環境づくり  
学んだことを伝える相手の設定  
新聞、パンフレット、ポスター等の作成  
他の人に発表する活動の設定  
グループによる学び合い

学んだことのアウトプットを、つながりを生かした指導のゴールに設定することによって、児童が相手意識や目的意識を持って学習に取り組む、「書く」「説明する」「グループで相談する」などの言語活動が活発に行われるようになった。また、下級生に説明するために、子どもたちがアイデアを出し合ったり、何度も練習したりする姿を見て、教員から「これが主体的に取り組むってことなんだと思った」という声が聞かれた。



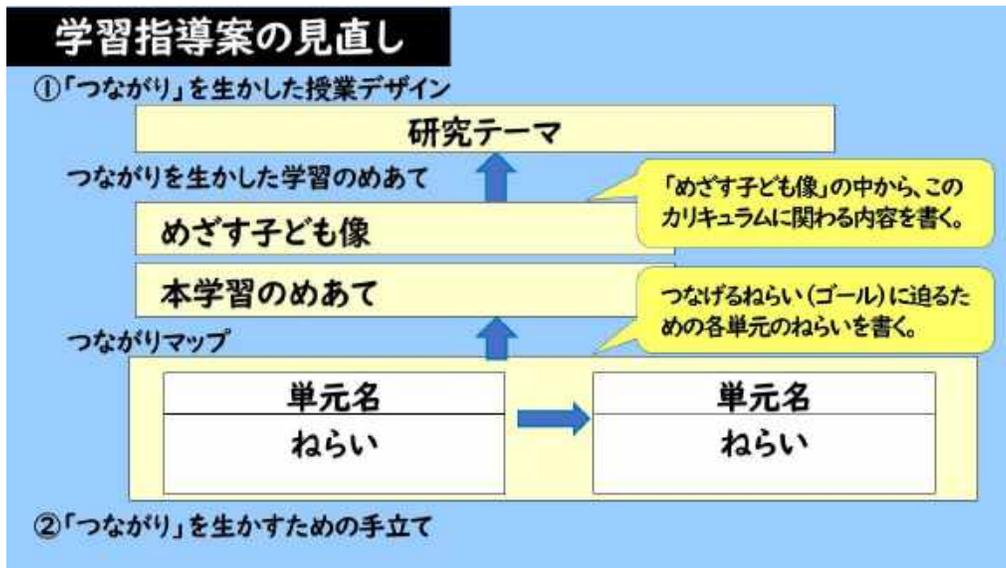
(6年生)国語「ようこそ、私たちの町へ」  
～校区探検に行く3年生に、校区のよさを伝えよう!～



## (4) 学習指導案の見直し

研究テーマや「めざす子ども像」により迫るために、「つながり」を生かした授業デザインを学習指導案に明記することにした。このことにより、何をめざして授業をデザインするのかを意識したり、このデザインをもとに成果や課題を評価し合ったりできるようになった。

【実施時期：7月】



年生 つながりを生かした指導のゴール 記入日： 年 月 日

教科・単元名	知識・技能	思考力・判断力・応用力	学びに向かう人間性
単元目標			
評価規準			
学習活動に即した具体的評価規準			

授業デザイン計画シート



## (5) 評価規準の具体化

「めざす子ども像」や各教科の目標に迫るために、評価規準を児童に分かる言葉で具体化することに取り組んだ。この取り組みにより、教員自身が、児童の実態や各単元の目標、指導の系統などを踏まえたゴールイメージを明確に持つことをめざした。また、児童とめざすゴールを共有することにより、児童が主体的に学習に取り組む、自らの学びをふりかえったり、評価したりすることに役立てられるようにした。【研修時期：8月】

- ・教員自身が、単元目標や指導の系統をより具体的に捉えることができた。
- ・児童の実態を評価規準に取り入れることができた。
- ・既習事項や他教科との関連を踏まえて目標を設定することができた。
- ・児童とめざすゴールを共有することができ、学習への意欲を高めることにつながった。

### 2. 子どもの学びに役立つ「評価規準」をつくってみよう

**STEP1** ○「学習計画」から「単元目標」をめざした「学習計画」へ「単元目標」と「評価規準」を明らかにしよう。

**STEP2** ○まずは教師が「めざすゴール」をしっかりと持つ。  
⇒「評価規準」を児童に分かる言葉で具体化しよう。



めざす子ども像  
めざすゴール  
評価規準

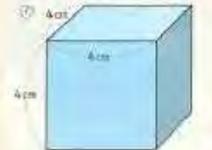
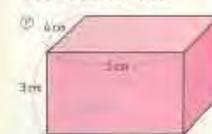
#### 【評価規準】

	イ 読む能力	ウ 書く能力
評価規準	○事柄の順序を考えながら内容の大体を読み取っている。※ ○楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読んでいる。	○自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている。
具体的評価基準	※何と何(「しごと」と「つくり」)が書かれているかわかる。 ※文章の中から必要な部分(「しごと」と「つくり」)を書き抜くことができる。	○「そのために」を使って「しごと」と「つくり」を関連させて書いている。

### STEP3 1時間ごとのゴールイメージを持つ。

#### 5年算数 体積

どちらの大きさが大きいかな。



#### 【評価規準(GOAL)】

- ・直方体と立方体の大きさを表す方法を、長さや面積の学習と関連付けながら考えることができています。(長さや面積との違い、普遍単位)
- ・1cm<sup>3</sup>という単位がわかる。

#### 【めあて】

- ・これまでに学習したことを使って、大きさを比べる方法を考えよう。

#### 【評価規準(GOAL)】

- ・手際よく1cm<sup>3</sup>の数を数える方法として、公式があることがわかる。

#### 【めあて】

- ・体積の「かわいい」求め方を考えよう。

かんたんで  
わかりやすく  
いつでも使える  
いい考え

- ・ゴールにより迫るために、まずは教師がゴールイメージを持つ!
- ・児童がめざしたいと思えるような、「めあて」の内容、提示のタイミングを考える!

## (6) カリキュラムの評価⇒改善⇒次学期のカリキュラムの見直し



学期ごとに、児童の姿から「つながりを生かした取組み（カリキュラム）」を振り返り、「ここがよかった」「こうすりゃよかった」と意見を出し合いながら「成果と課題」を明らかにした。

また、前年度の学年担任とともに次学期のカリキュラムの見直しを行い、各単元の学習内容をイメージしたり、前年度の成果を生かしたりできるようにした。  
【実施時期：毎学期末】

### どのように取り組んだ？

(1) 1学期の取組みを子どもの学びとつながり方（カリキュラム）から評価しよう

子どもの学び	
何ができるようになった	← ここがよかった
何がまだできないか	← こうすりゃよかった

- カリキュラム表に色や矢印を記入
- 「ここがよかった」「こうすりゃよかった」をワークシートにまとめる

年生	評価者：_	記入日： 年 月 日
実践のねらい・この実践を行った理由		
↓		
つながりマップ		
実施時期	必要な人・モノ	
必要な時間		
ここがよかった！こうすりゃよかった！		

研修で使用したワークシート



## (7) 人・モノの活用

児童の「主体的で深い学び」のために、体験活動や外部講師による授業などを積極的に取り入れた。

また、これまでに活用していた地域の人的・物的資源について、学年ごとに、「学習の実施時期」「単元や学習内容」「地域の資源」「協力を依頼する窓口」などを整理し、一覧表にまとめることで、さらに積極的に活用できるようにした。

### 【第4学年】

学期	教科等	単元名等・主な内容	人的・物的資源(窓口)
1	社会	ごみのゆくえ (環境センター社会見学事前授業)	摂津市環境センター
2	総合	ノーマライゼーション(当事者による講話)	講師 〇〇さん
2	総合	ノーマライゼーション(ワークショップ)	人間科学大学 学生 (窓口)人科大キャリアセンター課
3	総合	国際理解	摂津市在日外国人教育研究協議会
3	総合	国際理解(コリアタウン見学) ---フィールドワーク・伝統遊び体験	NGOセンター講師3~4人 (窓口)コリアNGOセンター

### 【第5学年】

学期	教科等	単元名等・主な内容	人的・物的資源(窓口)
1-2	総合	『田植え』『稲刈り』…体験	摂津市農業委員 (窓口)産業振興課
1	総合	『非行防止研修』…出前授業	大阪府警察
2	総合	『大阪の農業と私たちの暮らし』 …出前授業	北大阪農業協同組合(JA)
2	家庭科	『わくわくマシン』…マシン操作の補助	摂津小サポーターズ
3	総合	『キャリア教育』…講話	摂津市青少年指導員 〇〇様(地域の方)
3	総合	『キャリア教育』…講話	せつ幼稚園 若狭園長
3	総合	『キャリア教育』…講話	人間科学大学 学生(3名) (窓口)人科大キャリアセンター課
3	総合	『キャリア教育』…講話	摂津市民図書館 担当:〇〇様 (窓口)市役所生涯学習課



【第4学年】ノーマライゼーション(当事者による講話)



【第5学年】稲刈り体験(地域の農業委員さん)



【第1学年】阪急電車 出前授業



【第3学年】スーパー見学(摂津小サポーターズ)

# 3. 既習事項や教科等とのつながりを生かした授業の実践

## (1) 既習事項や体験活動を生かし、書く力を高めるための取組み【第1・3学年】

### 【第1学年】既習事項や体験活動を生かし、書く力を高める

#### 【第1学年】国語科『うみのかくれんぼ』—特別活動『秋の遠足』

##### ① 「つながり」を生かした授業デザイン

- 【めざす子ども像】①自ら進んで考えたり、新たなことに挑戦したりできる子ども  
②これまでの学習や経験を生かして学べる子ども

##### 【本学習のめあて(ゴールイメージ)】

- ・学習内容と実際に会う生き物を繋げて考えることで、説明文を進んで読んだり、図鑑や科学読み物で調べたりする意欲を高めることができる。
- ・事柄の順序や文章構成上の順序を考えながら読み、さらに「なにが・どこに・どのように」を入れて書くことができる。

##### 特別活動「秋の遠足(ニフレル)」(10月)

ねらい 様々な生き物に触れる中で、いきものそれぞれの特徴や暮らし方の違いに気づくことができる。

##### 国語科「くちばし」(6月)

ねらい 説明の順序や内容を考えながら、「問い」に対する「答え」という構成の文章を読むことができる。

##### 国語科「うみのかくれんぼ」(11月)

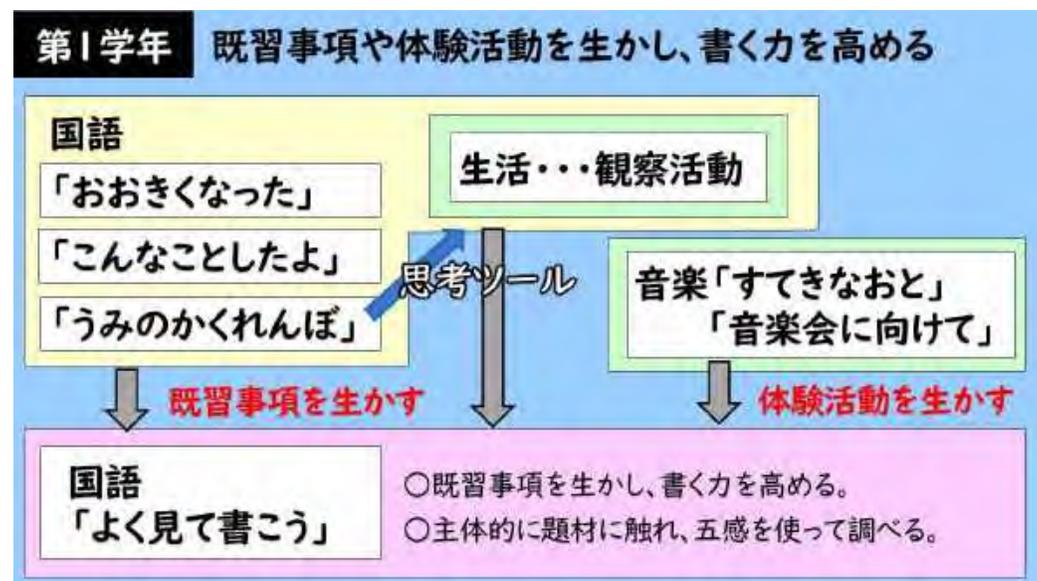
ねらい 事柄の順序や文章構成上の順序を考えながら読み、ニフレルにいる生き物について調べたことを「なにが・どこに・どのように」を入れて、「かくれんぼじてん」に書くことができる。

国語科「うみのかくれんぼ」は、「問い-答え」を繰り返す説明形式を学び、生き物について調べたことを事柄の順序等に気をつけながら、文を書く力を高めることを目標としている。児童が主体的に学習に取り組むことをめざして、この学習に特別活動「秋の遠足」を関連付け、水族館で出会った生き物について調べて生き物図鑑をつくることを学習のゴールに設定した。

また、国語科「くちばし」(説明文)で「問い-答え」の形式を学習したことを生かせるように、既習事項を想起しながら学習を展開したり、ワークシートを工夫したりするなどの手立てを講じた。



国語科「よく見て書こう」では、音楽科「すてきな音」、特別活動「音楽会」との関連を図り、身近な楽器の音のおもしろさを感じながら、知らせたいものに対する愛着を書く意欲につなげることをめざした。また、5つの観点で書く材料を集め、整理しながら文章を書く学習を、生活科の観察活動に生かし、同じ形式のワークシートを活用しながら、5つの観点で題材をよく観察することに繰り返し取り組んだ。これらの学習の積み重ねと系統的な指導により、書く題材を詳しく調べて文章を書く力を高めることをめざした。



**1年生 国語 「よく見て書こう」**

音楽科「すてきな音」「音楽会」  
体験活動「楽器調べ」  
作文のたね短冊の活用

【体験活動を生かした学び】  
 音楽会で使ったり、見たりした楽器を  
実際に使うことで…  
 ○詳しく調べたいという意欲を持って、五感を使  
って書く材料を集めることができた。  
 ○楽器は、児童の興味・関心に合った題材で  
あるとともに、何度も触り、詳しく調べられる。  
 ○カタカナをたくさん使用することができた。

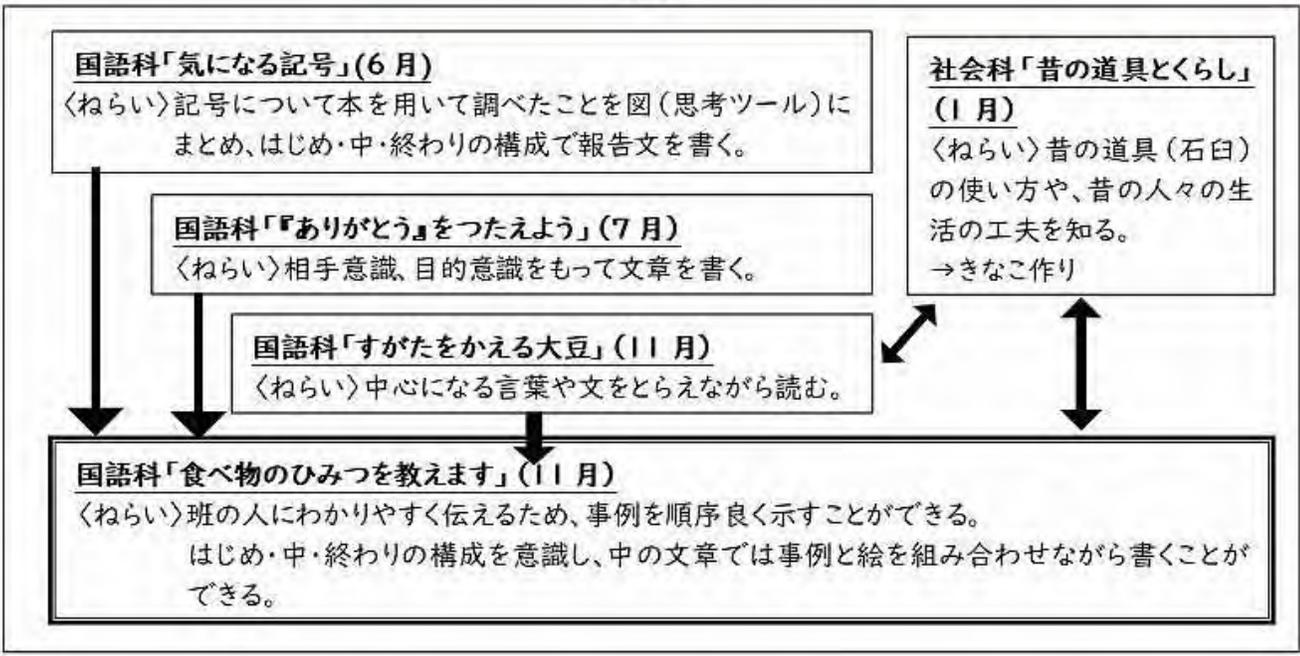
**【第3学年】既習事項や体験活動を生かし、書く力を高める**

**【第3学年】国語科『食べ物のひみつを教えます』-社会科『昔の道具とくらし』**

① 「つながり」を生かした授業デザイン

【めざす子ども像】 ①これまでの学習や経験を生かして学べる子ども  
 ②(学習や経験から)学んだことを生かそうとできる子ども

【本学習のめあて(ゴールイメージ)】  
 ○既習の文章の組み立て方の学習を生かし、事例をあげながら説明する文章を書くことができる。  
 ○実際に食材を加工する経験をもとに、同じ食材でも様々な食品が生まれていることに興味を持つことができる。  
 ○調べたことを友だちに伝えるという相手意識を持つことで、自分の学びを友だちの学びにしたいという意欲を高めることができる。



国語科「食べ物のひみつを教えます」は、題材として選択した食材がどのように「すがたをかえる」のかという、変化の仕方（おいしく食べる工夫）と変化の広がり（食品の種類）を説明する文章を書くことをねらいつている。児童が、食品が加工されている様子を想像することは容易ではないため、社会科「昔の道具とくらし」と関連付け、大豆からきなこになる過程を実際に体験した。このことにより、「食材」「おいしく食べる工夫」「食品」という観点をより理解し、すがたを変えていく様子を思考ツールに分類することに役立てることができた。

また、国語科「気になる記号」（書くこと）との系統的な指導により、前学年から使用していた「作文のたねカード」（書く題材を集める観点を示したカード）を継続的に活用するとともに、それを整理・分類するための新たな思考ツールについて学習し、自分の考えをまとめる力を高めることをめざした。

**3年生 国語**  
**「食べ物のひみつを教えます」**

社会科「むかしの道具とくらし」  
体験活動「きなこづくり」

思考ツールの活用

**【体験活動を生かした学び】**  
 きなこ作りを実際に体験したことで…  
 ○「すがたをかえる食べ物」を調べようという意欲が高まった！  
 ○「材料」と「食品」、「おいしく食べる工夫」という3つの観点を、全ての児童が理解して情報を集めることができた。

## (2) 既習の言語活動を生かして、学びを深めるための取組み【第2学年】

### 【第2学年】 既習の言語活動を生かして、学びを深めるための取組み

【第1学年】 生活科『せつつ子どもゆうびんきょくをひらこう』—国語科『あったらいいな、こんなもの』

① 「つながり」を生かした授業デザイン

【めざす子ども像】①自ら進んで考え、友だちとの関わりから学ぶことができる子ども  
②これまでの学習や経験を生かして学べる子ども

【本学習のめあて(ゴールイメージ)】

- ・既習の言語活動を生かして、経験したことを振り返ったり、交流・共有したりすることにより、気づきを確かなものにすることができる。
- ・既習の言語活動を生かし、気づいたことや心に残ったことを工夫して適切に表現する。

国語科「あったらいいな、こんなもの」(9月)

ねらい 考えたものを相手にわかるように説明したり、それを聞いて感想をいったりできる。(話す・聞く・話し合う)

国語科「動物園のじゅうい」(9月)

ねらい 手紙を書く楽しさを知り、物語の登場人物に伝えたいことを、時間や順序に気をつけて、**初め**—**中**—**終わり**の構成で手紙に書くことができる。

生活科「せつつ子どもゆうびんきょくをひらこう」(10月)

ねらい 「せつつ子どもゆうびんきょく」での気づいたことや心に残ったことを交流・共有することにより、自分の中で気づきを確かなものにしたり、新たな気づきが生まれたり、様々な気づきに関連付けられたりする。

生活科「せつつ子どもゆうびんきょくをひらこう」では、郵便局見学を生かし、実際に郵便局員になって働くことにより、身近な社会等を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考えたり表現したりすることをめざした。

そこで、国語科の5つの観点で書く題材を集め、「はじめ・中・終わり」の構成で文章をまとめる学習を生かし、気づきカードやふりかえり文を書きながら、気づいたことを自覚するための取組みを重視した。





## (3) 総合的な学習を柱に、他教科等との関連を生かした取組み【第4・5学年】

### 【第4学年】総合的な学習を柱に、他教科等との関連を生かした取組み

【第4学年】総合的な学習『ノーマライゼーション』-国語科『だれもが関わり合えるように』-社会科『安全なくらしとまちづくり』

#### ① 「つながり」を生かした授業デザイン

【めざす子ども像】①自ら進んで考えたり、新たなことに挑戦したりできる子ども  
②これまでの学習や経験を生かして学べる子ども

【本学習のめあて(ゴールイメージ)】

- ・体験活動を行う中で自分が興味・関心をもったことを調べようとする意欲をもつことができる。
- ・既習事項から身近にあるものを多様な観点でとらえ、自分の考えを発信することができる。

#### 総合的な学習「ノーマライゼーション」(11月)

ねらい 違いを認め合える集団作りを方針に様々な人が生活していることを知ることや受け入れることをめざし、体験活動を行う中で自分たちの生活に活かせるようにする。

#### 国語科「だれもが関わり合えるように」(11月)

ねらい  
・ノーマライゼーションの学習から関心のあることを選び、必要なことを調べて要点をまとめることができる。  
・理由や事例を挙げながら、筋道を立てて話すことができる。

#### 社会科「安全なくらしとまちづくり」(11月)

ねらい 自分たちの身の回りにある安全を守るための工夫についてノーマライゼーションの観点からまとめることができる。

総合的な学習「ノーマライゼーション」では、点字や車椅子、アイマスクの体験活動を生かし、自分で課題を決めて調べ学習を行ったり、国語科や社会科で学習したことを相互に関連付けながら、自分の考えを持ち、他の人に発信したりする学習を行った。社会科「安全なくらしとまちづくり」では、ノーマライゼーションの観点からまちづくりの工夫を考え、自分の考えを深めたり広げたりできるようにした。また、国語科「だれもが関わり合えるように」では、理由や事例を挙げながら筋道を立てて説明する方法を学び、自分の考えの発信に役立った。



## 【第5学年】総合的な学習を柱に、他教科等との関連を生かすための取組み

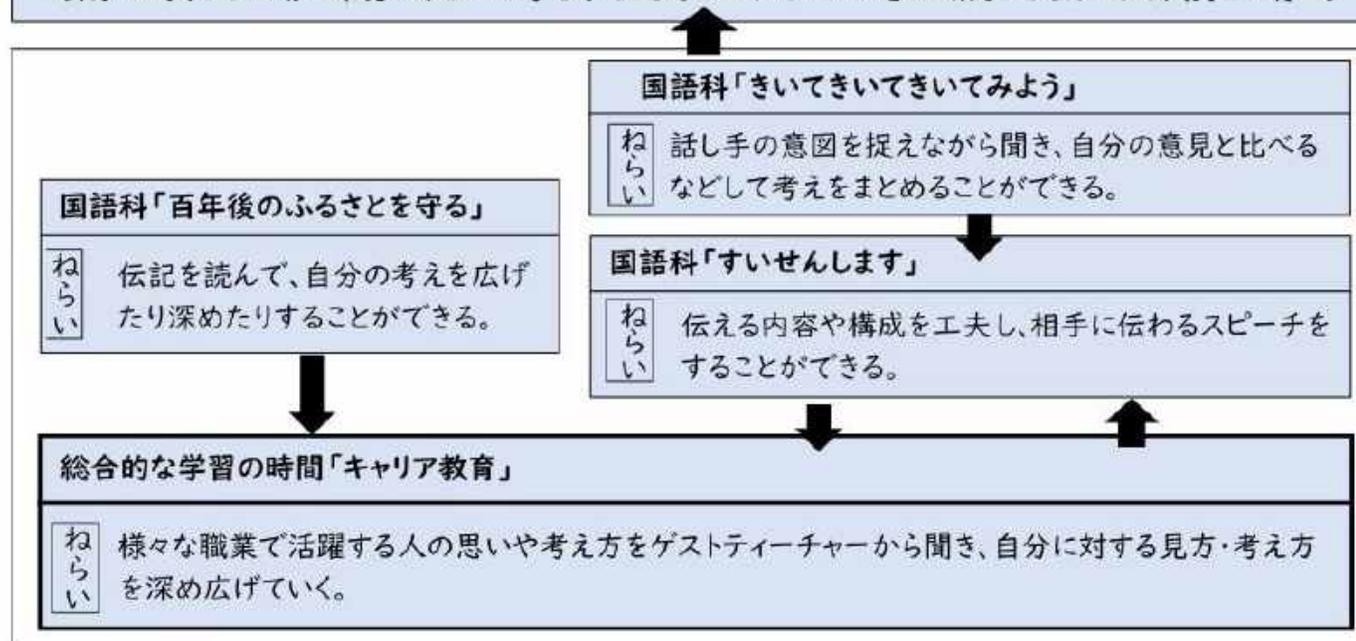
【第5学年】総合的な学習『キャリア教育』-国語科『百年後のふるさとを守る』-国語科『すいせんします』

① 「つながり」を生かした授業デザイン

【めざす子ども像】①自分や友だちの良さを知り、自分も相手も大切にできる子ども  
②これまでの学習や経験を生かして学べる子ども

【本学習のめあて(ゴールイメージ)】

・自分とは異なる立場や環境にある人の考え方・生き方にふれることを通して相手を大切にすることを育む。



総合的な学習「キャリア教育」では、自分で課題を決め、ゲストティーチャーからの講話をもとに収集した知識や情報から自分の考えを持ち、相手に伝わるスピーチをすることをゴールに設定した。

そこで、国語科と総合的な学習の時間のスパイラル学習により、相手の意図を捉えたり、箇条書きでメモしたりしながら話を聞き、事実と感想、意見とを区別しながら話の構成を考えることを通して、自分の考えを確かなものにしたり、他の人のスピーチから考えを深めたりできるようにした。



## 【第5学年】総合的な活動を柱に、他教科等との関連を生かした取組み

【第5学年】総合的な学習『米作り』-社会科『米作りのさかんな地域』-家庭科『食べて元気に』

① 「つながり」を生かした授業デザイン

【めざす子ども像】①自ら進んで考えたり、新たなことに挑戦したりできる子ども

②これまでの学習や経験を生かして学べる子ども

【本学習のめあて(ゴールイメージ)】

- ・社会科で学んだことを田植え体験に生かし、田植え体験で経験したことも取り入れてお米新聞を作ることができる。
- ・米作りに関わる農業委員から直接話を聞くことで、自分自身の考えを深めることができる。

社会科「米作りのさかんな地域」(5月)

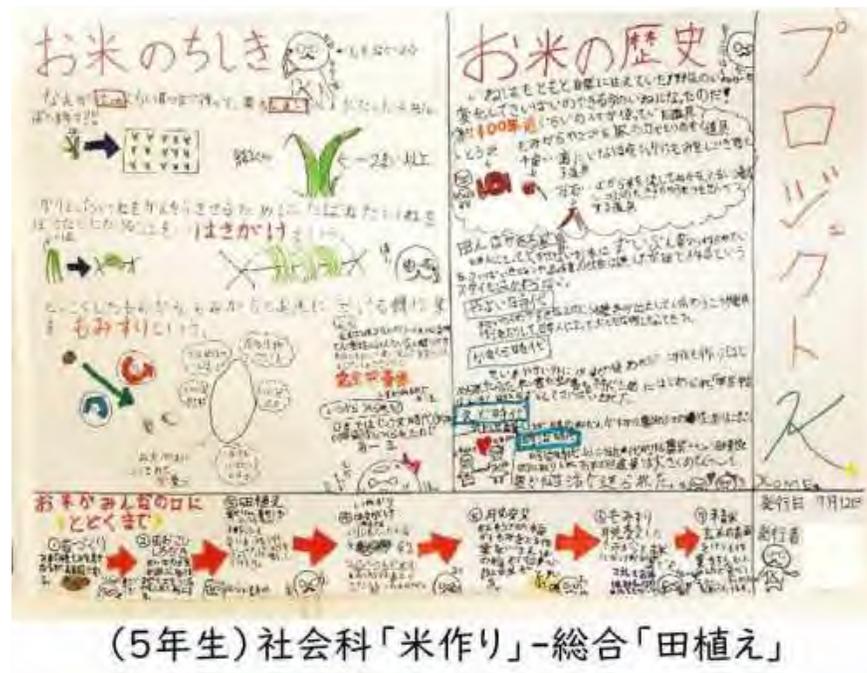
ねらい  
米作りに関わる人々の思いや工夫を知り、実際に体験してみたいことを考えることができる。

家庭科「食べて元気に」(6月・11月)

ねらい  
林間学校に向けて、米作りの調理方法を知ることができる。  
自分たちで収穫したお米の炊きあがる様子を観察し、おいしく作ることができる。

総合的な学習の時間「プロジェクトK～米作り～」(5月)

ねらい  
・他の人に自分の学んだことを分かりやすく伝えようという意欲を持ち、社会科で学んだことや田植え体験から必要な題材を選び、新聞にまとめることができる。  
・国語科の「新聞を読もう」で学んだことを生かし、写真や絵、図、表を用いて新聞を書くことができる。  
・社会科の学習や田植え体験を通して、お米のことをよく知ることができる。



(5年生)社会科「米作り」-総合「田植え」



(5年生)総合「田植え」…5月



(5年生)総合「稲刈り」…10月

## 【第5学年】総合的な学習を柱に、他教科等との関連を生かした取組み

### 【第5学年】総合的な学習『防災教育』-理科『流れる水のはたらき』-国語科『百年後のふるさとを守る』

#### ① 「つながり」を生かした授業デザイン

【めざす子ども像】①自ら進んで考えたり、新たなことに挑戦したりできる子ども  
②これまでの学習や経験を生かして学べる子ども

#### 【本学習のめあて(ゴールイメージ)】

- ・地震や津波、洪水から身を守る方法について、主体的に自分で調べる内容を決め、調べたりまとめたりする活動を通して伝えたいという意欲を高めることができる。
- ・調べたことを相手意識や目的意識をもち、グループのメンバーと協力してわかりやすくまとめ、発表することができる。

#### 理科「流れる水のはたらき」(11月)

ねらい 川の水の量が増えると土地の様子はどのように変わるのか調べ、災害を防ぐためにどんな工夫をしているのかを知る。

#### 国語科「百年後のふるさとを守る」(11月)

ねらい 事実の説明や筆者の考えが書かれている部分を区別しながら伝記を読む。

#### ③総合的な学習の時間「JTK～自分たちからのトランスミッション(発信)」(11月)

ねらい 地震や津波、洪水から身を守る方法について、調べたりまとめたりする活動を通して3年生にまとめて伝えるという相手意識や目的意識をもち、発信することができる。

#### 【児童の声】

- ・理科で学習した災害をくわしく調べて、被害を防ぐ方法があることがわかった。
- ・調べたことを低学年に伝えるために、伝える内容や新聞の書き方を工夫できた。



(5年生) 総合「防災についての調べ学習」-理科-国語  
～摂津小の下級生に、学んだことを伝えよう!～

## (4) 他教科で学習したことを活用して学びを深める取組み【第2学年】

(2年生) 国語「観察名人」—生活「トマトの観察」—算数「長さ」



生活科「ミニトマトの観察」



高学年が調理で使った野菜調べ



算数「長さ」…野菜の長さ調べ

国語科の5つの観点で書く材料を集める学習を生活科の観察活動に生かすために、同じワークシートを使用するなどの手立てを講じ、学んだことを活用していることに児童自身が気付けるようにした。また、算数「長さ」の学習を生かし、ミニトマトの成長をものさしで長さを計って調べることに取り組み、学んだことを生かせる楽しさを味わえるようにした。

国語科「スイミー」における場面の様子や登場人物の気持ちを読み取る学習を生かし、想像力を働かせながら海の中の世界を絵に表現することに取り組んだ。国語科「スイミー」の学習と並行して図画工作科の作品づくりに取り組んだことで、読みの深まりとともに海の生き物がどんどん増えていき、教室に「スイミーの世界」が広がっていった。



(2年生) 図工『スイミーの世界』—国語『スイミー』

## (5) 重点目標を設定し、それに迫るための教科等横断的な指導【第6学年】

Action!

もし、1人のとき災害がおこったら

<p>災害が起きたときの連らくのしかた</p> <p>→ (東日本大震災) (おぼれ)</p> <p>災害時に相手に通うことができる確率は、(62%)と半分以上です。なので、伝言メモが役立ちます。</p> <p>避難をする際に伝言メモを渡します。</p> <p>指定避難所の伝言板を使用する。</p> <p>→ 伝言メモを書いたりするとはぐれている相手などに伝わるかもしれません。</p>	<p>～高れい者が1人である時の問題～</p> <p>Q 1人暮らしの高れい者</p> <p>女性 男性</p> <p>1980年・約175人 約69万人</p> <p>2010年・約189人 約71万人</p> <p>2025年・約236人 約79万人</p> <p>年々増えている</p> <p>今のくらしに満足している高れい者が2割(1)たよれる家族や知り合いがない</p> <p>家族といふと変な話</p> <p>高れい者や障害者はふつうの人より死なざるのが難しい人もある。ふつうの人より死に率が高い(災害時)</p> <p>1人で食事するから(おもしろくない)なりがた</p> <p>→ 1人だと食事の準備に気がつかなくなる (おなかがすいても)</p>
<p>伝言メモの使い方</p> <p>伝言メモの書き方</p> <p>伝言メモの渡し方</p> <p>伝言メモの回収</p>	<p>家族のかわりに相手をする</p> <p>Action!</p> <p>地震が来たとき1人のときどうする?</p> <p>1人のとき近所の大人と一緒にひたひたする。</p> <p>→ 1人では心細いから</p> <p>大地震が来たとき速攻が来ると思て高い場所へひたひたする。</p> <p>地震が来たときは、家具がたおれると考える。</p> <p>→ 机の下にかくれる。</p> <p>→ まず自分が家族を守る。(自助次に地域の人を守る。(互助))</p> <p>自分だけのことを守るのではなく(周り)のことも考えて行動する。</p>
<p>1人暮らしの時災害に(困る)こと</p> <p>・スーパーに行くにあ、てほしい。</p> <p>→ 近くにあると楽だから。</p> <p>・ストックが少なすぎる(トイレ、トイレットペーパーが足らぬ)</p> <p>・「トイレ」が汚れるから。</p> <p>・いんげん、アスパラガスが、かりとれない。</p> <p>→ 野菜が(あま)ないから。</p>	<p>ストックの料を揃やす。</p> <p>日ごるからあいうえおをしよう。</p>

(6年生)総合『防災教育』～様々な視点から防災を考えよう～

第6学年の児童のよさや課題から、様々な立場や視点から物事を多面的・多角的に見たり、考えたりしながら、自分にできることを行動に移す力を高めることを学年の目標とし、「視点にこだわりを持って!」「Action!」の2つを合い言葉に、年間のカリキュラムを作成した。

総合的な学習「マイクロアグレッション」では、社会科「憲法とわたしたちの暮らし」と関連付け、外国の人々の視点に立つて、日本の選挙制度や暮らしを考える学習に取り組んだ。

また、総合的な学習「防災教育」では、社会科「災害からわたしたちを守る政治」や総合的な学習「マイクロアグレッション」との関連を図り、どのような立場の人々の視点に立つて考

えるかを明らかにし、身近な災害や防災についての調べ学習を行った。

また、考えをまとめ、ワールド・カフェの形式で意見交換をし、自分の視野を広げたり考えを深めたりすることに役立てた。



(6年生)総合『防災教育』ワールド・カフェ



(6年生)総合『キャリア教育』Actionボード  
~学校のためにみんなでAction!~



(6年生)総合『キャリア教育』Reactionボード  
~「6年生ありがとう」下級生や先生からのReaction~

国語科「私たちにできること」では、新型コロナウイルス感染対策のために行事が中止となったり、行動が制限されたりする中で、自分たちにできることを考え、学校への提案書を書くことに取り組んだ。

総合的な学習では、「Action!」をテーマに、国語科で作成した提案書を他の学年に発信した。また、提案書が役立っていたのかを分析し、最高学年としての自分たちができることを改めて考えるなど、PDCAサイクルを意識した取り組みを進めた。他学年の児童や教職員からのリアクションボードを設置し、自分たちの実践の評価に役立てることに取り組んだ。



# 4. カリキュラム・マネジメント研究による成果と課題

## (1) 教員の意識改革

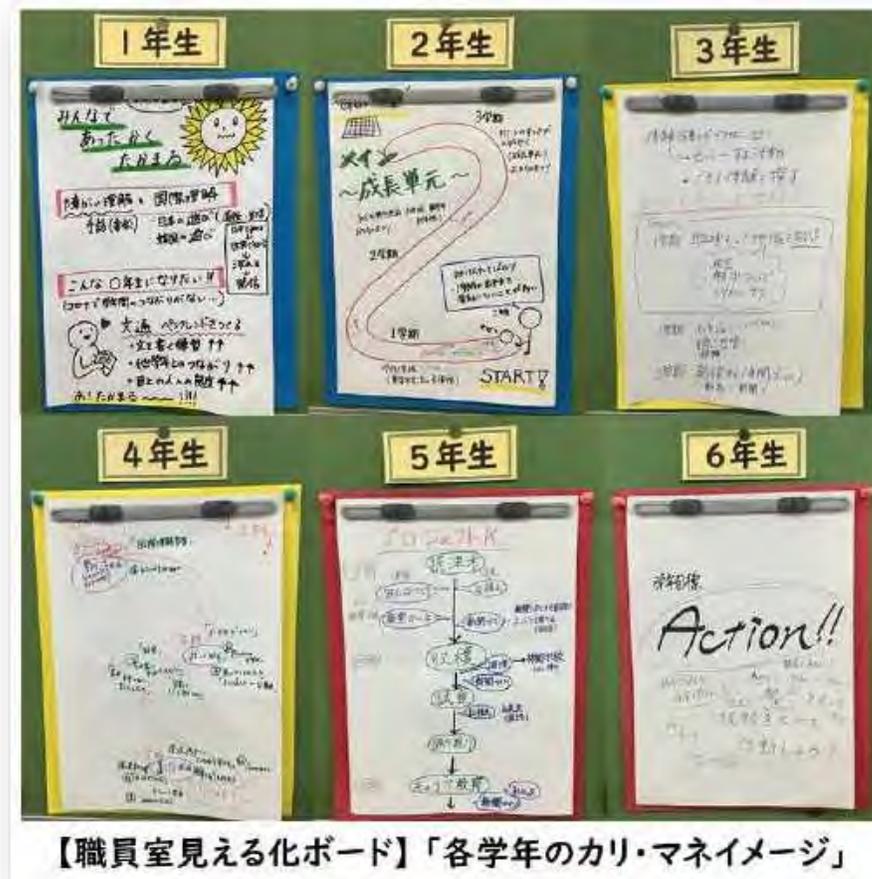
カリキュラム・マネジメントの研修を通して、教員自身の学習指導に対する意識が変化したと言える。

○新学習指導要領について研修し、学んだことを生かしてカリキュラム・マネジメントに取り組むことで、「単元の学習内容を身に付けさせる」という考えから、めざす子ども像をふまえ、「児童が何ができるようになることをめざすのか」という考えで、教材研究をすることができるようになった。

○1つの教科や単元で指導するのではなく、他教科等の学習を生かして指導することが効果的であると共通理解でき、積極的に教科等横断的な指導に取り組むことができた。

○つながりを生かすために既習事項を想起させたり、単元のゴールを児童と共有するためにめあての提示の仕方や学習の見通しを持たせるための掲示物の活用したりすることに、意識的に取り組むことができた。

○各教科の目標をより理解する必要性を感じ、学習指導要領に立ち戻りながら教材研究を行うようになった。



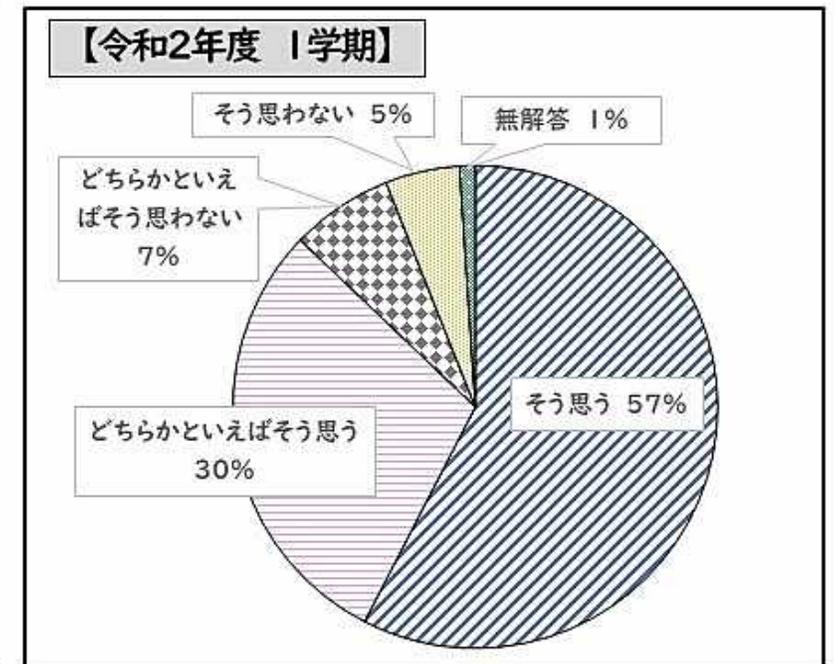
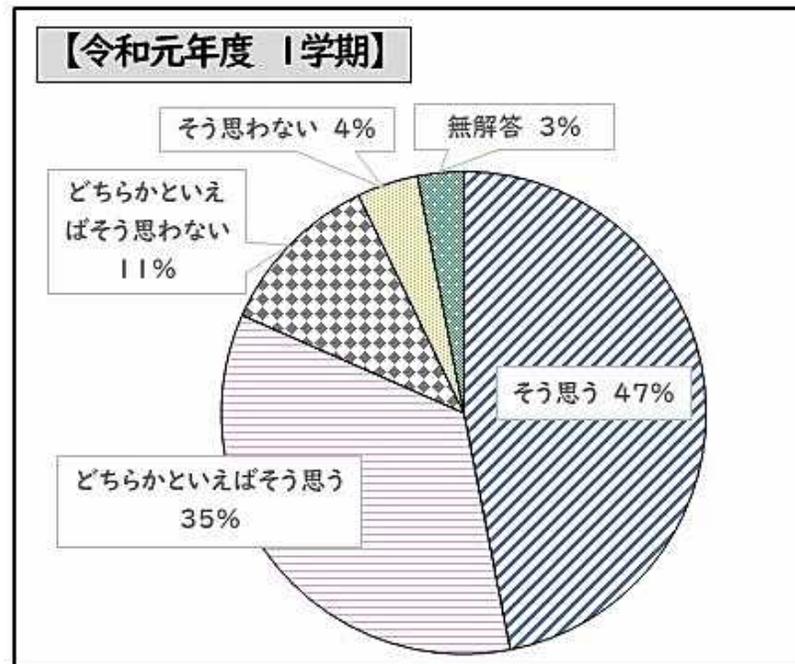
## (2) 教科等とのつながりを意識した授業づくりによる成果

研究テーマである「主体的に学び、高め合う児童の育成」をめざし、各学年で、児童の実態や身に付けたい力について話し合い、創意工夫を凝らした取組みが活発に行われた。

また、既習事項や他教科等とのつながりを生かすことで、児童が「～したい」と高い意欲をもって取り組む姿勢が多く見られるようになり、特に、学んだことや考えたことをアウトプットする力を高めることができた。

さらに、授業アンケートでは、「新しい学習をするときに、これまでに学習したことや他の教科などで学習したことが役に立ったか。」という問いに対し、「そう思う」と解答する児童が10%増加し、57%となった。「自分の書いたものをもう一度見たい。」と既習事項とつなげようとしたり、「〇〇の授業と似てる」「つながってる」「次に〇〇に役立てたい」と、他教科等との関連を意識したりする姿が多く見られるようになった。

授業アンケート【新しい学習をするときに、今までに勉強したことや、他の教科で勉強したことが役に立った】



### (3) カリキュラム表の改定、時数の見直しによる成果

教科間や行事と教科等の関連が明確化され、授業が計画しやすくなった。また、どの単元を関連づけるかを考えることで、見通しを持って学期ごとの学習計画を立てることができた。

さらに、予定時数を明らかにし、指導時数を意識しながら指導を行うことができるようになったことで、新型コロナウイルス感染症の影響によるカリキュラム変更にも柔軟に対応でき、児童の加重負担にならないように計画的に学習を行うことができた。

### (4) 学年団での研究の活性化 (70人力)

各学年団で、「児童がもっと主体的に取り組めるようにしたい。」「○○に気づかせたい。」「○○な力をつけたい」と話し合い、教科書の内容に止まらず、既習事項や他教科等との関連に目を向け、創意工夫を凝らした取り組みが活発に行われた。また、誰もが「つながり」を生かした学習計画を作成できるようになると、取り組みごとに提案者を変え、これまでの実践を生かせるように支援するなど、学年団で支え合い、成長し合おうとする姿が見られた。



12月: 5年生 学年会で取り組みを振り返り、その成果を見童の実態から分析

## (5) 今後の課題

◇ P D C A サイクルによる取組みによって、計画だけでなく、評価したり改善策を考えたりすることが重要であると共通理解できた。児童の姿からカリキュラムや手立てを評価するための観点や方法をより明らかにすることで、教師も児童も成果や課題を実感しながら研究を進められるようにしたい。

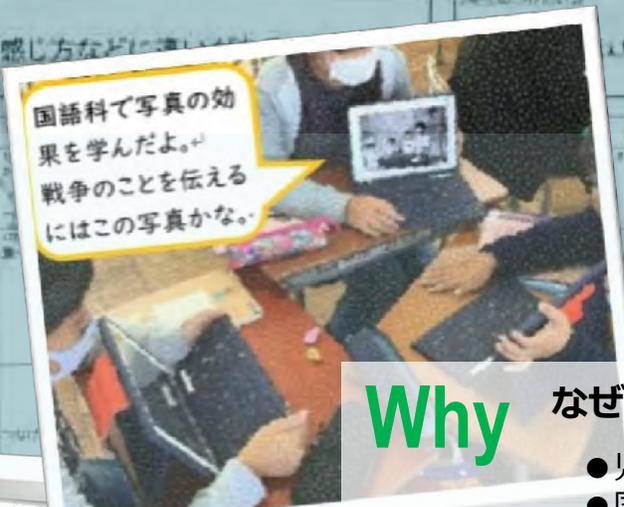
◇ 既習事項や他教科等のつながりを生かすために、各教科の目標への理解を深め、「何を学び、何ができるようになるか」、「次の単元でどのように生かせればよいのか」というゴールを明確にして授業をデザインしていきたい。

◇ 教師の考える学習の『ねらい』が、児童の「○○したい」「○○できるようになりたい」という思いの込もった『めあて』になるようにすることが、主体的・対話的で深い学びをつくりだすために重要であると共通理解できた。ひとりひとりの教職員の子どもを理解する力を高めるとともに、「○○したい」という思いを引き出すための手立てや、「○○したい」を実現するためのスキルについての研究をより進めていきたい。

◇ 各学年の P D C A サイクルによる取組みが、学校全体の研究を大きく前進させることができた。その一方で、各学年任せになってしまうことが多く、それぞれの学年の成果を生かしたり、支援し合ったりすることが十分ではなかった。学年間の交流や「見える化」の取組みをさらに進め、それぞれの成果や課題を生かし合い、高め合うことに引き続き取り組んでいきたい。

# 国語科を軸とした教科等横断的な視点での カリキュラム・マネジメントを通して、 子どもたちの言語能力の育成を図る

枚方市立招提小学校



国語科で写真の効果を学んだよ。  
戦争のことを伝えるにはこの写真かな。

## Why

### なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 児童の言語能力(特に、話す力・聞く力)に課題
- 国語科で学んだ言語能力を他教科や日常生活でも繰り返し使い、児童の言語能力を育成する必要があった。→カリキュラム・マネジメントの視点の必要性

## How

### どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 国語科を中心とし、他教科でも言語能力育成の機会を設けるために、年間単元配列表を一年間の計画をもとに立てた。
- 児童の言語能力の進捗状況を年間単元配列表を用いて振り返り、「何ができて」「何がまだできていないのか」をはっきりさせ、こまめに活動の見直しを図った。(小さなPDCAサイクルを回す)
- 教職員一人一人が自主的に実践を進められるよう、「教職員みんなで学び、学んだことをみんなで実践する」スタイルで研究を進めた。

## Change

### どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 教職員一人ひとりが学校全体を見通して教育活動が行えるようになった。
- 子ども自身が意識して、国語科と他教科で学んだことをつなげ、身につけた力をいろいろな場面で活用するようになった。
- 地域の方から、「招提小の子どもたちの成長」に関する声を多く聞くようになった。



相手の意図を捉えて聞く力がまだ弱いね

家庭科でも...

国語と算数のこの単元で取り組んでみようか。

## 1. はじめに

- (1) 本校の児童の実態
- (2) 子どもの実態を踏まえた研究テーマの焦点化－国語科の学びを他教科等に「つなげる」－

## 2. 研究の概要 –教職員のベクトルを揃えていくための取組み–

- (1) 最初につまずき –年間単元配列表の使い方–
- (2) P D C Aの見直し –小さなP D C Aサイクルを繰り返す視点–
- (3) 「みんなで学び、みんなで実践」の職員室文化を創る

## 3. 子どもにとっての成果と課題

- (1) 教科等横断的単元の学習と子どもの変容
- (2) 今後の課題

## 4. カリキュラム・マネジメント研究による成果と課題

- (1) 児童アンケートから見た成果と課題
- (2) 次年度に向けて

# 1. はじめに

## (1) 本校児童の実態

本校はこれまで、枚方市の「体力向上」にかかる研究指定校として、体育科の授業研究を進めてきた。その中で、チームの作戦を立てたり、アドバイスをし合ったりする「思考・判断・表現」の活動の際に、「チームメイトの話を最後まで聞けない」ことや、「自分の考えた作戦やアドバイスをうまく伝えられない」ことなどが授業中に見受けられ、児童の言語能力（特に、話す力・聞く力）に課題があることが分かった。また、生徒指導面から見ても、休み時間など日常生活において、コミュニケーションのやり取りの仕方が原因で児童同士がトラブルになることも非常に多かった。

## (2) 子どもの実態を踏まえた研究テーマの焦点化－国語科の学びを他教科等に「つなげる」－

児童の言語能力向上を図るため、研究教科を体育科から国語科に移し、初年度は「話す力・聞く力」の育成に取り組んだ。京都女子大学の水戸部修治教授を招聘し、国語科の授業改善に取り組む中で、「言語能力の育成には、児童の実態を踏まえた質の高い言語活動を行うこと」と「授業の中で学んだことを繰り返し使い、自分で活用できるようにすること」が大切だと学んだ。また、文部科学省のカリキュラム・マネジメントアドバイザーである大阪教育大学の田村知子教授の研修でも、「教科等横断的な視点で、教科と教科、単元と単元をつなげ、学びを活用する機会を作る必要性」を学んだ。

本校の教育活動において、国語科で学んだ言語能力を、国語科はもとより、他教科や日常生活でも繰り返し使うことで、児童の言語能力を育成することが重要課題となった。「1教科を基に他教科へ」の考えで、国語科の授業改善とカリキュラム・マネジメントの視点を結び付けて研究を行うこととなった。

# 2. 研究の概要 – 教職員のベクトルを揃えていくための取組み –

## (1) 最初のつまずき – 年間単元配列表の使い方 –

「国語科を中心とし、他教科でも言語能力育成の機会を設け、言語活動を繰り返し行う」といった教科等横断的視点で学習活動を行うため、年間単元配列表をもとに、どの単元とどの単元をつなげ、どんな学習活動を行うのか、一年間の計画を立てる機会を持った。

ところが、実際に年間の活動を見てみると、どれも言語能力育成の機会に思えてきて、「どこまで学習活動をつなげていいのかわからず、つながりの矢印だらけ」という状態や、「教科同士をつなげることが目的になってしまい、何がしたかったのか目標を見失う」という状態になってしまった。

そこで、先進的取組みを行う学校の視察に行き、年間の学習活動の計画の立て方を学んだ。

(次ページ参照)

第6学年 ①新士の関心 ②新士の関心 ③新士の関心 ④新士の関心 ⑤新士の関心 ⑥新士の関心 ⑦新士の関心 ⑧新士の関心 ⑨新士の関心 ⑩新士の関心

自分の思いに気づき、自分の言葉で表現できる力  
友だちの思いに気づき、友だちの言葉を自分ごとのように聴ける力

月	音楽	算数	理科	総合	国語	外国語活動	社会	家庭科	体育	芸術工作
4	1 夏の歌をひけおせよう	2 算数と図形 四角の面積	12 11月の誕生会	10 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで					
5	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
6	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
7	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
8	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
9	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
10	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
11	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
12	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
1	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
2	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
3	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで	1 国語と算数 算数のついで
合計	50	175	105	70	143	60	105	55	90	50

## －年間単元配列表の使い方：どうつながるか－

- ① 学校教育目標を確認し、児童の実態から「児童につけたい力」は何かを考える。
- ② 「児童につけたい力」を各学年の児童の実態に合わせて、「具体的な姿」で表す。
- ③ 「つけたい力をつける」ために、「国語科で学んだことを他教科で使う」視点で、教科のつながりを探す。

①②③をもとに、年間単元配列表を使い、年間の活動を整理し、「話す力・聞く力を育成するためのカリ・マネ計画表」を作成した。「つけたい力」と「めざす子どもの姿」を整理することで、闇雲に教科同士・単元同士をつなげるといふ最初のつまずきを乗り越えることができた。（次ページ参照）

招提 KICOCA (聞く力 各学年系統指標) カード

基本 ① ① いての顔を見て聞く ② がおで聞く  
 ③ っしょうけんめい聞く ④ しまいまで聞く  
 ⑤ なずきながら聞く

一年 相手の話を集中して聞く。  
 二年 知らせたいことや聞きたいことを落とさないように聞く。  
 三年 伝えたいことや聞きたいことの中心をとらえて聞く。  
 四年 話の中心をとらえて、自分の考えを持ち、質問したり感想を言ったりする。  
 五年 話の内容をとらえ、自分の考えと比べながら、自分の考えをまとめる。  
 六年 話の内容をとらえ、自分の考えと比べながら、それぞれの立場から考えをまとめたり広げたりする。

招提 IOCA (話す力 各学年系統指標) カード

基本 ① ① おを見て話す ② ② いごで話す (丁寧に話す)  
 ③ ③ ちんと分かりやすく話す ④ ④ えの大きさに気をつけて話す  
 ⑤ ⑤ ちをしっかり開けて話す

一年 声の大きさや速さに気をつけ、はっきりとした発音で話す。  
 二年 話す事柄の順序に気をつけて話す。  
 三年 自分の考えを、理由(わけ)や事例とともにくわしく話す。  
 四年 自分の考えを、理由(わけ)や事例をあげながら、話の中心が伝わるように話す。  
 五年 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見を区別し、話の構成に気をつけて話す。  
 六年 資料を活用するなどして、工夫して話す。

## ～系統立てて6年間で力をつける～

「話す力・聞く力」と言っても、イメージする「力」は人によってバラバラである。そこで、学習指導要領や児童の実態や課題と照らし合わせながら、各学年で身につけたい「話す力・聞く力」を話し合っで決めた。各学年での具体的な「めざす子どもの姿」を決めることで、目標を明確にし、1年から6年まで系統立てて、力の育成に取り組むことができた。

基本を定着させ、着実に力をつけるために、「聞き方あいうえお」「話し方かきくけこ」を合言葉に、教室にカードを掲示し、授業内で折に触れて指導した。掲示物を貼ったままにせず、活用し、系統立てて取り組むことで教育効果を上げた。（KICOCAカード・IOCAカード）



## 「話す力・聞く力」の育成から、「共有する力」の育成へ

児童の言語能力育成に向けて、初年度は「話す力・聞く力」をつけたい力の柱に据え、研究に取り組んできた。児童の授業での姿やアンケート結果、招提チャレンジ(学期末テスト)の結果から、一年間の取組みを通して「話す力・聞く力」が徐々に身についてきたことが分かった。そこで、二年次は、一年次につけた「話す力・聞く力」をもとに、さらに対話する機会をさまざまな教科で設定し、国語科を中心として「共有する力」の育成を他教科でも図ることとした。「話すことができる・聞くことができる」という目標から、「聞いたり話したりする中で、自分や友だちの考えのよさやちがいに気づき、認め合うことができる」という目標へステップアップし、初年度の研究の上に二年目の研究を積み重ねることとした。

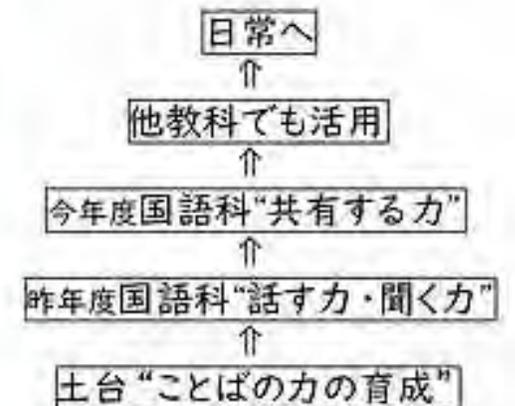
「対話する機会」をさまざまな教科で設定し、  
国語科を中心として「共有する力」の育成を他教科でも図る。

「共有する力」とは、どのような力なのか、全教職員で共通の意識を持つために、学習指導要領や児童の実態から、各学年での「つけたい力」「めざす子どもの姿」を具体的に決め、育成を図った。

学習活動や指導に迷ったときは、必ず「つけたい力」に立ち返るよう意識した。

### 「共有する力」各学年でつけたい力

- 第1学年 自分の考えや思いを持つ。
- 第2学年 感じたことや分かったことを共有する。
- 第3学年 感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方の違いに気づく。
- 第4学年 互いの感じたことや考えたことを理解し、他者の感じ方などのよさに気づく。
- 第5学年 意見や感想を共有し、自分の考えを広げる。
- 第6学年 意見や感想を共有し、自分の考えを広げ、深める。



## (2) PDCAの見直し –小さなPDCAサイクルを繰り返す視点–

これまで年間単元配列表においては、年度当初に計画（Plan）し、一年間を通して実施（Do）した後、年度末に反省として評価（Check）し、次年度に改善（Action）するという流れであった。

しかし、このPDCAサイクルの流れでは、年度末に反省をする頃には、細かな記憶は臆気で、年度内に活動を改善することはできなかった。

そこで、大きなPDCAサイクルの中に小さなPDCAサイクルを回していくことを大切にし、授業研究のC・Aと同様、各学期ごとに、年間単元配列表を用いて「カリ・マネ計画表」の進捗状況を振り返り、「つきたい力」育成に向けて、「何ができて」「何がまだできていないのか」をはっきりさせ、こまめに活動の見直しを図った。



ブロック学年会【担任や支援担、専科で構成】で、「カリ・マネ計画表」の進捗状況を振り返っている様子

## －見直し後の評価（Check）と改善（Action）の場・時期－

### 定性的評価

ブロック学年会〔2学年担任＋支援担＋担外で構成〕を活用し、

- ①「カリ・マネ計画表」の進捗状況の確認（学期ごと）
- ②授業や実際に行った言語活動の取組みについて意見交流（月1回以上）

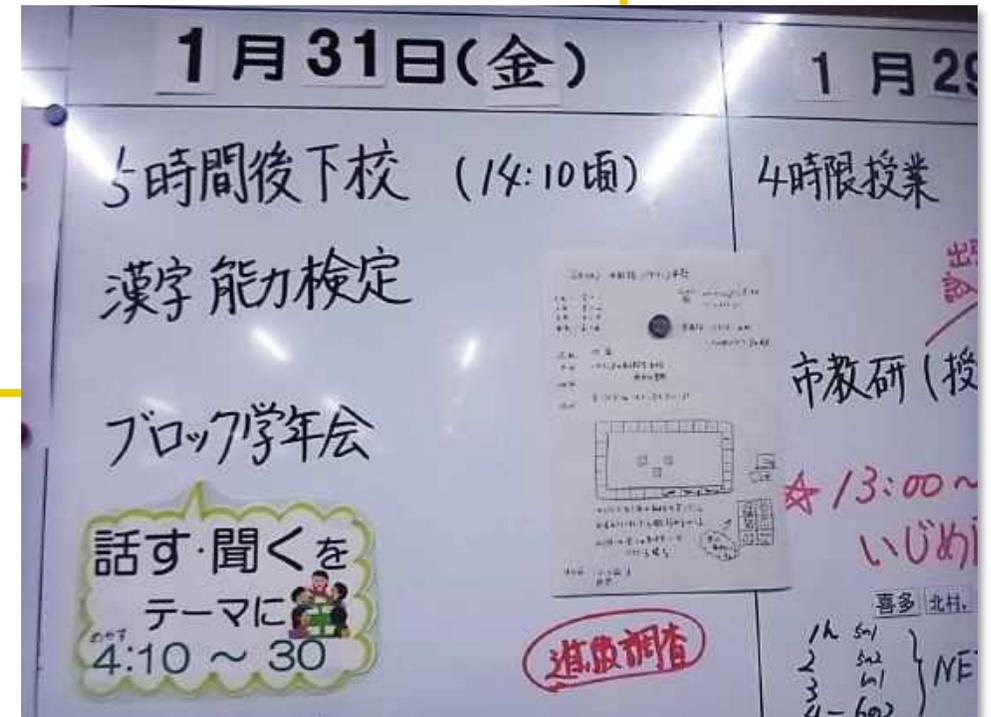
### 定量的評価

各学年で

- ①府作成「ことばのちから」を活用した招提チャレンジ問題の実施（学期ごと）
- ②児童の言語能力に関する意識・学習状況のアンケート（学期ごと）

定性的評価・定量的評価ともに、職員会議を活用し、教職員全体で共有する場も必ず設けた。

特に、有効であった各学年の取組みを紹介し、他の学年にも広げ、全校で取り組むという意識を持つようにした。



### (3) 「みんなで学び、みんなで実践」の職員室文化を創る

学校全体の教育活動を、管理職や研究主任だけが見通すのではなく、カリキュラム・マネジメント研究を通して、教職員一人ひとりが学校全体を見通して教育活動が行えるよう、ステップを踏んだ。

教職員一人ひとりが自主的に実践を進められるよう、「みんなで学び、学んだことをみんなで実践する」スタイルを採った。

#### －“みんなで学び、みんなで実践”スタイル－

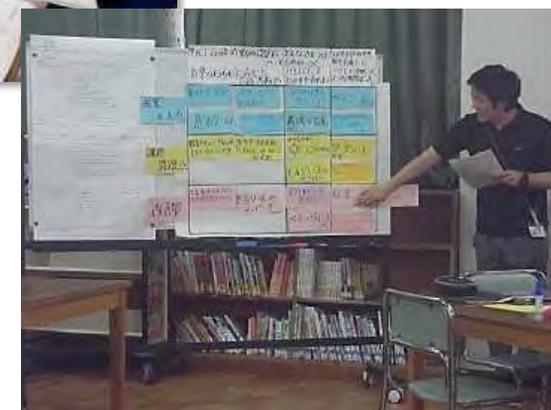
①年度初めの研修で、課題意識を共有 「ここをがんばろう」

②みんなで実践し、学び合う

「みんなやっているから授業について相談しやすい」

③実践の共有

「“こうすればよかった”がわかるから“やってよかった”」



## ① 年度初めの研修で、課題意識を共有「ここをがんばろう」

年度初めに研修を行うことで、「めざす子どもの姿」や「今、求められている授業」について、教職員みんなで話し合ったり学び合ったりする機会を持つことができる。年度初めという時期を逃さず捉え、最初にみんなで児童の課題を共有し、授業について語り合うことで、「めざす子どもの姿や授業」といったゴールのイメージを共有しながら、教職員一人一人が、「今年はこちらをがんばろう」と自分の中に課題意識を持って、自主的に実践を進めるきっかけとなった。

### 「質の高い言語活動」についての学んだ際のキーワード

- ・学習者主体の授業
- ・つきたい力を明確にし、児童の実態に合わせた言語活動を設定する など

### 教職員の声 ～研修の振り返りより～

授業の指導ポイントを学んで、授業のイメージが少しずつわかってきた。

めざす子ども像もハッキリと見えてきました。単元のゴールはハッキリさせていても、それをつなげられていないと感じていたところなので、これから自ら本に手をのばし、読みこなす子の育成をめざします！

“この話のここが好き”という気持ちで学習を進められたら、とても楽しく国語の学習ができることがよくイメージできました。学年ごとの指導の発展についてもよくわかりました。



## ② みんなで実践し、学び合う「みんなやっているから授業について相談しやすい」

- 「みんなで」授業づくり（夏季研修）
- 略案を持って、「みんなの」授業をみに行こう！（相互授業参観）

### 夏季研修

夏の研修に2学期の授業づくりを設定し、みんなで相談しながら授業の準備を行った。

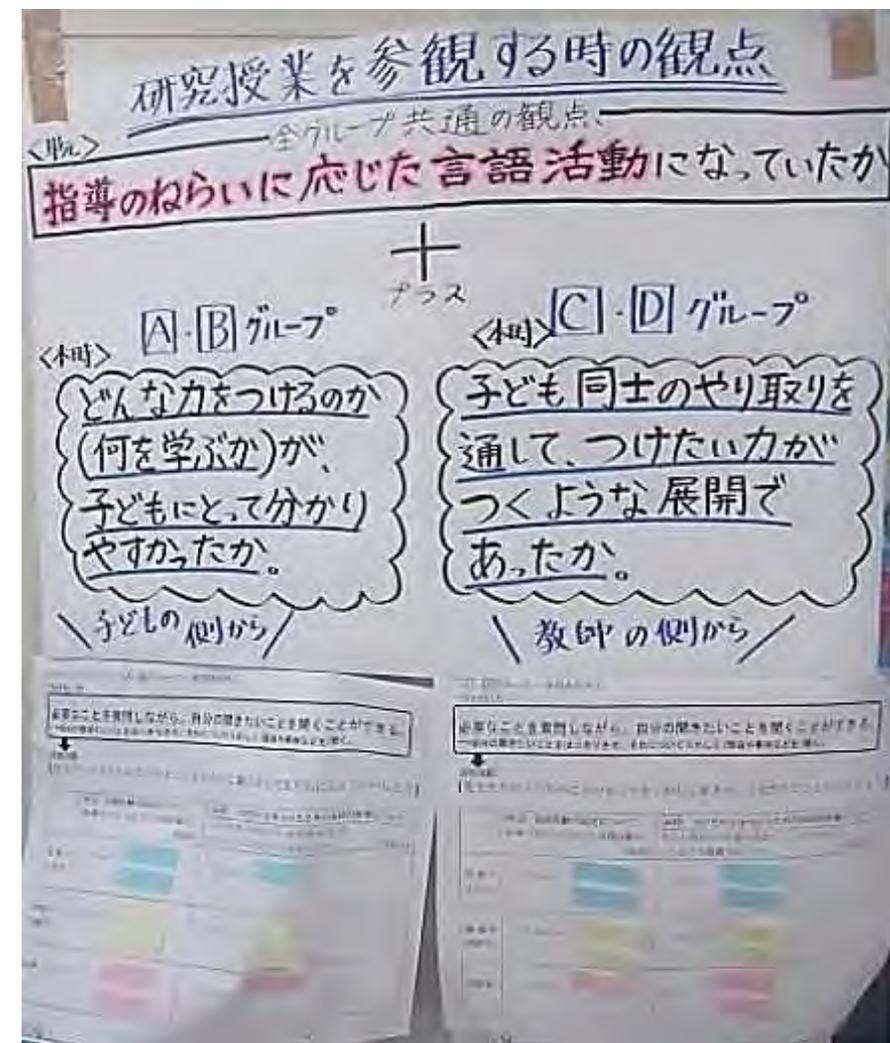
- ・学年を主としたグループで言語活動を設定し、単元を構想
- ・ワールドカフェ方式で、さまざまなグループの人と意見交流

「その言語活動は学年の子どもにぴったり？」  
「その言語活動は指導事項とぴったり？」

### 相互授業参観

「みんなでやってみる」ことを大切に、全教職員で年間1本の授業を公開した。

- ・研究仮説の中から、「どこをがんばる」かを選んで略案作成
- ・授業公開日はカレンダーに載せ、わかりやすくお知らせ
- ・二年次はコロナ感染症対策や授業時数確保も兼ねて、授業をビデオに撮り、放課後にビデオを見ながら授業研究を行った。



## ② みんなで実践し、学び合う「みんなやっているから授業について相談しやすい」

### ○「みんなで」学ぶ（先進校視察）



「みんなで」学び、「みんなで」授業について語り合う中で、普段の職員室でも、自然と、子どもの姿や授業での様子、言語活動や指導事項についての話題がとびかうようになった。

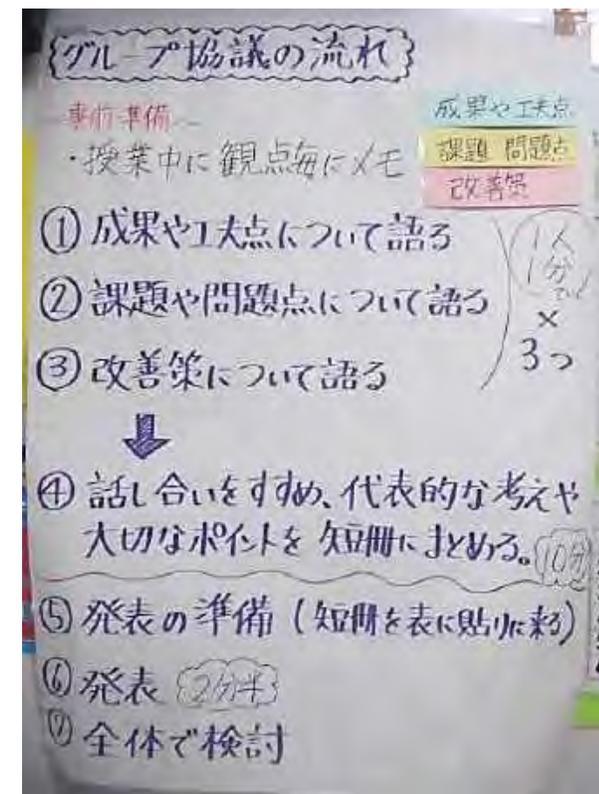
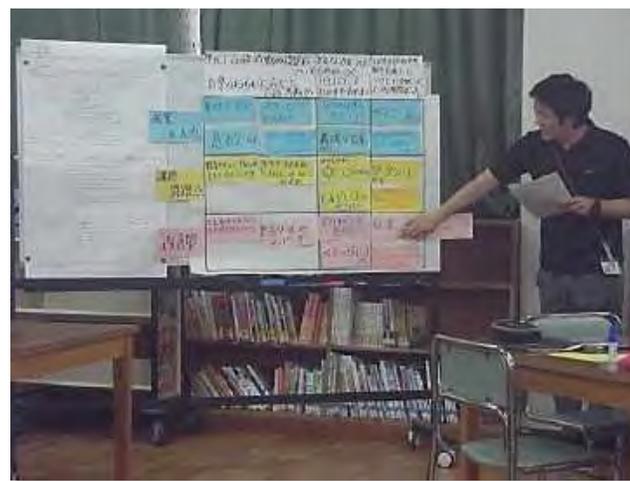
授業でうまくいったことや、むずかしかったことなどを放課後に自然と話ができる環境のおかげで、安心して授業に取り組むことができる。

「みんなが」授業を工夫して考え、準備しているので、職員室でアイデアをもらい、互いに刺激を受けることができる。

### ○「みんなが」語れる研究協議

（マトリクス法と短冊法を用いて誰もが話せる場づくり）

- ・マトリクスを使うことで「何」について話すのかがハッキリ！
- ・マトリクスに沿って一人一人語る時間が必ず確保されている
- ・グループでの話し合いを短冊で端的に可視化し、全体で共有しやすくする  
→全体での協議に便利



### ③ 実践の共有 「“こうすればよかった”がわかるから“やってよかった”」

- ・実践した言語活動の良かった点・改善点をミニ冊子で配付、ブロック学年会で意見交流

## 2学期 「話す・聞く」単元

つけたい力×子どもの実態

# 言語活動の実践

児童の実態が変われば、  
言語活動における児童の様子も変わる！

ブロック学年や今後の実践等にご活用ください。

### 2学期 「“つけたい力”と“子どもの実態”にぴったり」な言語活動の実践について

つけたい力をおさえているか 子どもにとって何を学ぶかが分かりやすいか

研究・研修部

8月20日の校内研修を受けて、2学期に行った「つけたい力と子どもの実態にぴったり」な言語活動について、実践の様子をお聞かせいただき、学校で共有したいと思います。

児童の様子、また、**児童の様子から分かる良かった点・改善点**などについて、記入してください。  
(例) 児童の積極性や参加率、学習に困り感のある児童がどれくらい参加できているか など

【 4年】

1. 単元名  
だれもが関わり合うために
2. 本単元でつけたい力  
目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。
3. 本単元で行う言語活動  
「令和」の新時代をともに生きていくために、だれもが関わり合うための、社会の工夫を調べて発表しよう。
4. 児童の様子、児童の様子から分かる良かった点と改善点など  
○自分で調べたいことを選んでの活動だったので、意欲的に取り組んでいた。  
○情報の分類について、児童が自分の基準で分けられれば良いことにしたので、評価がしやすかった。  
○情報を整理すると発表がしやすいことや、必要な情報と必要でない情報があることに気づけた。  
  
△メモの取り方に課題がある児童が少なくなかったので、引き続き他教科でも行う。  
△資料の情報が入ってこない児童への支援がまだまだ不十分であった。(声に出して一緒に読むなどの支援を行った。)



### ③ 実践の共有 「“こうすればよかった”がわかるから“やってよかった”」

- ・「カリ・マネ計画表」を職員室に掲示し、「誰もが」「いつでも」、学校全体の教育活動を「見える化」



#### 「見える化」の効果①

##### 単元がつながる・教科がつながる

- 全ての教科の活動を年間を通して、いつでも確認できる！
- これまでの活動やこれまでに身につけた力を頭に入れながら、次の単元を計画することができる！
- 各教科を横断して単元計画を立てやすい。

#### 「見える化」の効果②

##### 学年がつながる・全体がつながる

- 自分が行っている教育活動が学校全体の活動のどこを担っているのか確認できる！
- 各学年の目標を確認しながら6年間を通して、つけたい力をつけることができる！

### ③ 実践の共有 「“こうすればよかった”がわかるから“やってよかった”」

6年生 【C 読むこと】 物語教材			中心教材と言語活動			
学年目標	知・技	日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。	生お「 き家「 方の「 が人「 任に「 わ「 る「 よ分「 ま「 に考「 朗え「 読た「 をし「 よ「 ま「 の「	を大「 給好「 にき「 表さ「 して「 て「 お「 話場「 給人「 画物「 展の「 をし「 しよ「 ま「 の「	かに平「 せ、和「 よ平「 と朝「 よ朝「 で他「 学学「 年「 に「 お「 話「 を「 読「 み「 聞「	書「 命「 の「 い「 の「 ち「 の「 ま「 方「 を「 ま「 ま「 に「 海「 の「 命「 読「
	思・判・表	筋道を立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。				
	態度	言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。				
※対話的な学びのための作法※ ・叙述に根拠（どこからそう思うのか）を求める。 ・自分と同じところ、違うところを伝え合う。 ・「～が言っているのは、こういうこと」と代わりに言えるくらいまでよく聞く。 ・分からないことは、くわしく聞き返す。						
【知・技】	読書	オ.日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに関与することに気付くこと。		○	○	○
【思・判・表】	構造と内容の把握	イ.登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。	○	○		
	精査・解釈	エ.人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。	◎	◎	◎	
	考えの形成	オ.文章を読んで理解したことに基いて、自分の考えをまとめること。				◎
C読むこと	共有	カ.文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。	○	○	○	◎
【知・技】	言葉の働き	ア.言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。				
	語彙	オ.思考に関わる語句の量を増し、語や文章の中で使うとともに、語句と語句の関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、五感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。				
	表現の技法	ク.比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。				
	音読・朗読	ケ.文章を音読したり朗読したりすること。	◎			
学習用語	・登場人物の関係（人物相関図）			○		
	・朗読		○			
	・心情の変化					
	・推薦する（他の作品や叙述と比較して、固有のよさを明確にする）				○	
	・読書座談会					○

言語能力育成計画を資質・能力毎に整理し直し、1年から6年まで見通せる表「招提小オリジナル系統表」を作成した。

（使用した学習用語や、評価方法も合わせてまとめ、指導しやすくなるように）

ミニ冊子の配付も「カリ・マネ計画表」もオリジナル系統表も、学校全体で取り組んできたことを整理し、都度「見える化」して共有するためのもので、これらは教職員一人一人が少しずつ取り組みを進めてきた証でもある。

完成されたものではなく、みんなが取り組んできた一歩一歩が、学校全体での取り組みになり、子どもたちの成長へとつながっていったことは大きな成果である。



(Excel版)



(PDF版)

# 3. 子どもにとっての成果と課題

## (1) 教科等横断的单元 (※) の学習と子どもの変容

教科等横断的单元を通して学習を重ねていく中で、子どもの学習に対する意識が変わってきた。

－ 6年生の例－

### 国語科

『ヒロシマのうた』～戦争や平和について書かれた作品を読もう～

### 社会科

日中～太平洋戦争、戦争中の暮らしの様子を捉えよう

### 総合的な学習の時間

課題を見つけ、必要な情報を収集し、解決に向けて考えをまとめよう

### 【つきたい力】

本の読み聞かせを通して、戦争の恐ろしさや平和の大切さを、下級生に伝えるために、友だちと意見や考えを共有し、平和に対する自分の考えを広げ、深める。



※「教科等横断的单元」とは…

年間単元配列表やカリ・マネ計画表を作成するなかで、教科等横断的につながる学びを一つの「单元」として捉え、整理し直したものです。

## －子どもの変容－

①教員が意識して学びをつなげていた。

→子ども自身が意識して、学んだことをつなげ、身につけた力を活用するようになった。

②学んだこと・身につけたことをつなげて、課題解決に当たるプロセスを何度も経験することで、子どもが主体的に課題に取り組み、行動できるようになった。

(子どもの声)

「社会科で学んだこと以外にも知りたいことが出てきた。総合的な学習の時間でたくさん調べることができたので、本の読み聞かせで、想像力が高まり、気持ちを入れて朗読できた。」

上記のように、学習をつなげていく中で、「何が身についたか」「何ができるようになったか」が明確になり始め、振り返りの記述にも多く見られるようになった。

(子どもの声)

「社会科で戦争について学んだおかげで国語科の作品を読み深められた。」

「国語科で資料の効果学んだので、総合的な学習の時間で、必要な情報の集め方がわかった。」

**振り返り** 教科等横断的単元の学習後、振り返りを行う。

「学んだ力を使って何ができるようになったか」を視点に振り返る。

**発問例**

- ・総合の「××」学習の中で、国語で学んだ力を使ってできたことはありますか。ふりかえて書きましょう。
- (例) 国語で学んだ聞き方を使って、××した。
- (例) 発表の時、国語でやった話し方を使って、△△できた。
- (例) ポスターを作る時に、国語で学んだ書き方を使って、□□□を工夫した。
- (例) 話し合いの時に、国語で学んだ○○をしたけれど、話し合いがうまくいかなかったので、次は〇〇したい。
- ・国語で学んだ力を使って、次は、どんな勉強をしてみたいですか。

総合の平和学習で調べたからその資料をすぐにあつたりしてすぐ本読み聞かせもできた。「サボテンの花」の朗読の力をついでた

## (2) 今後の課題

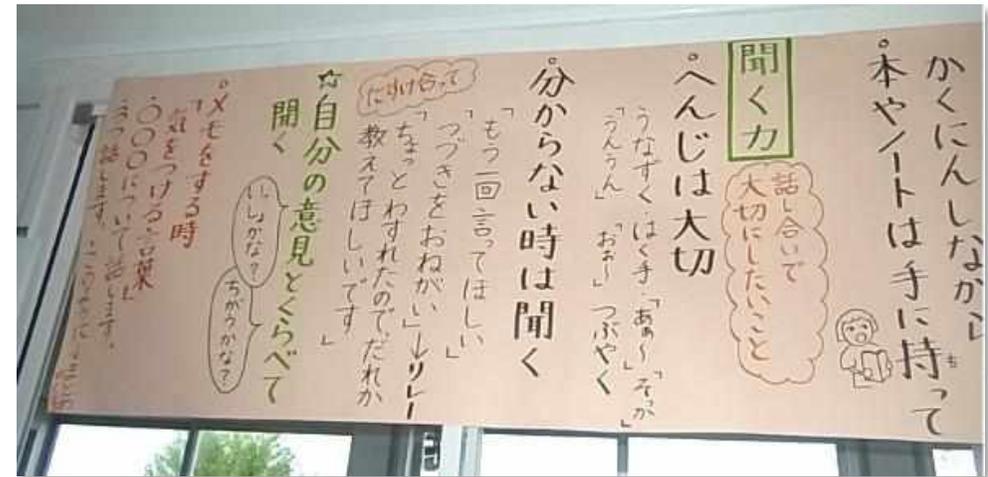
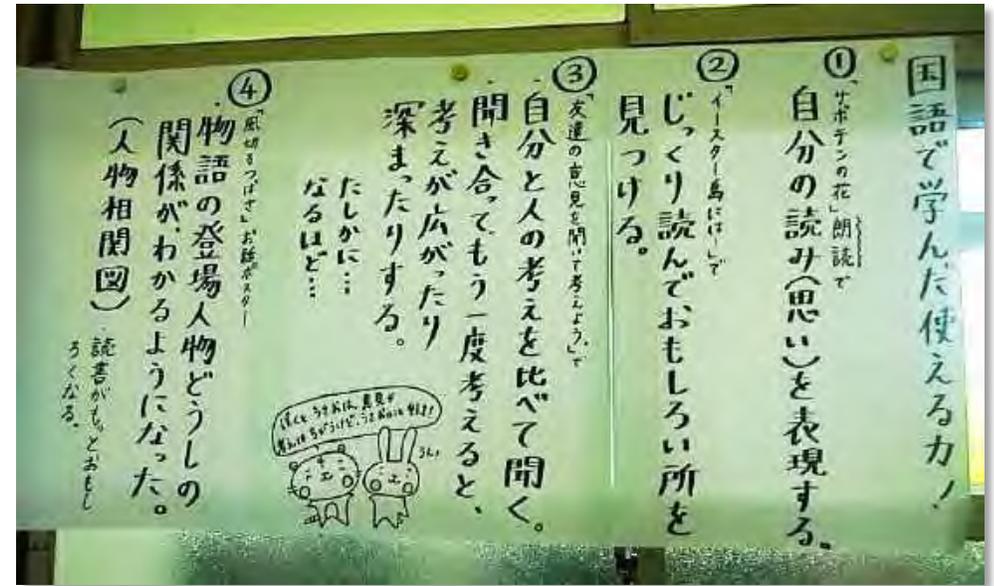
各学年、教科等横断的単元で学習を行うことで、教科で切り離されていた学びがつながり、身につけた言語能力を活用する機会は増えた。

しかし、児童アンケートや振り返りの記述において、「言語能力が身につけている」と児童の声が表れている学年にはばらつきが見られた。これは、児童への声かけ等を始めとした、児童のメタ認知への働きかけの弱さや、言語能力活用の方場の頻度の違いによるものと考えている。

そこで、今後は、「国語科で身につけた言語能力が他教科でも活用できている場面」を逃さず捉え、児童に声かけすることを授業中に意識して行い、振り返りの充実も図っていく。

また、「学んだこと」を画用紙にまとめ、教室掲示し、子どもの目に触れるようにすることで、児童の学びを蓄積&見える化し、「児童自身が学習で身につけた力を自覚し、意識して力を活用できる」一助とする。

さらに、家庭学習や自主学習をいかして、子ども自ら学びをマネジメントし、活用できる機会を増やしていきたい。



# 4. 研究の成果と課題

## (1) 児童アンケートから見た成果と課題

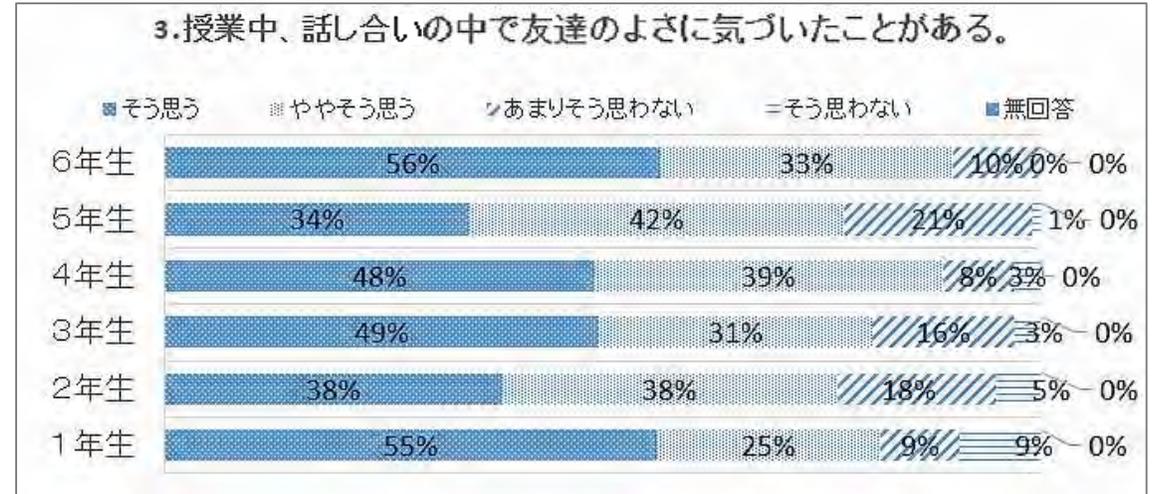
令和元年6月から令和2年11月の間に、学期に一度ずつ児童アンケートを行って、結果を分析し、授業改善に役立っている。

### 成果

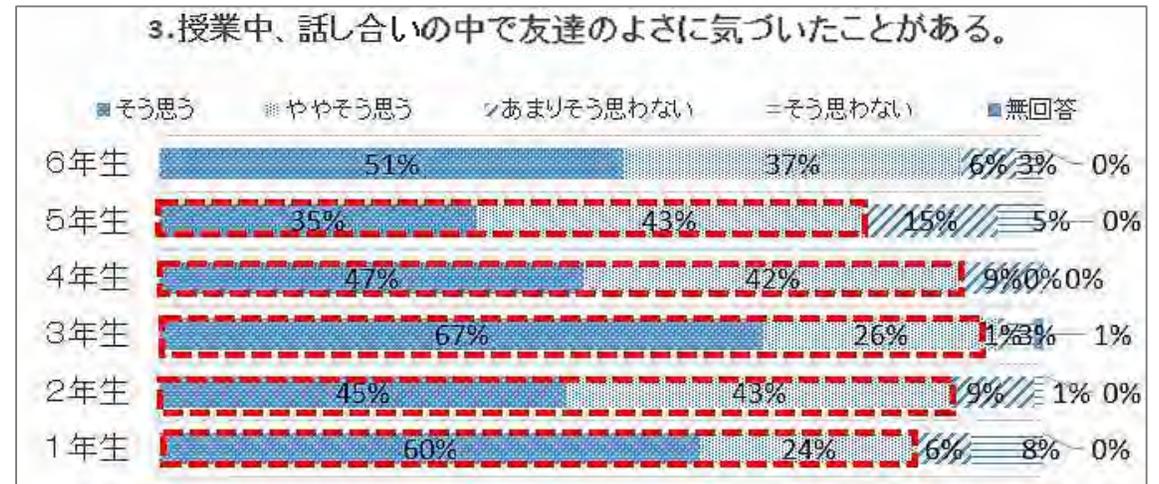
令和2年度の児童アンケートの結果より、「3.話し合いの中で友だちの良さに気づいたことがある」の項目では、肯定的回答が70%台から80~90%台へと伸びてきた。

国語科を中心として、各教科等横断的に言語能力を育成し、対話を重視した結果、今年の研究テーマに掲げためざす子ども像「対話を通して、よさやちがいを認め合う子」に近づいてきた。

令和2年 7月



令和2年 11月

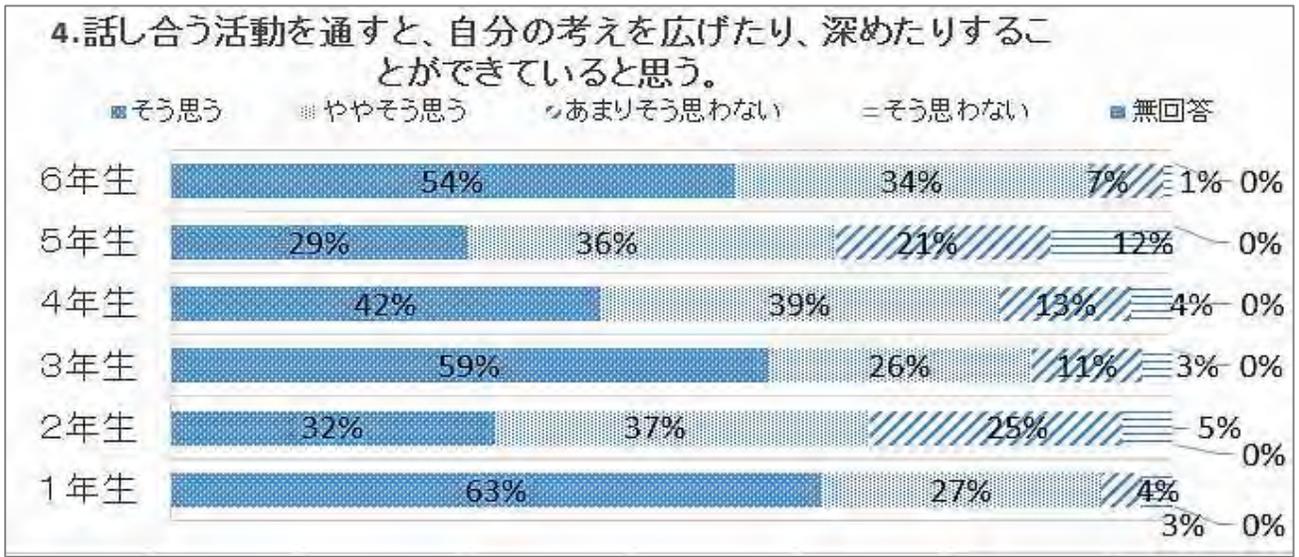
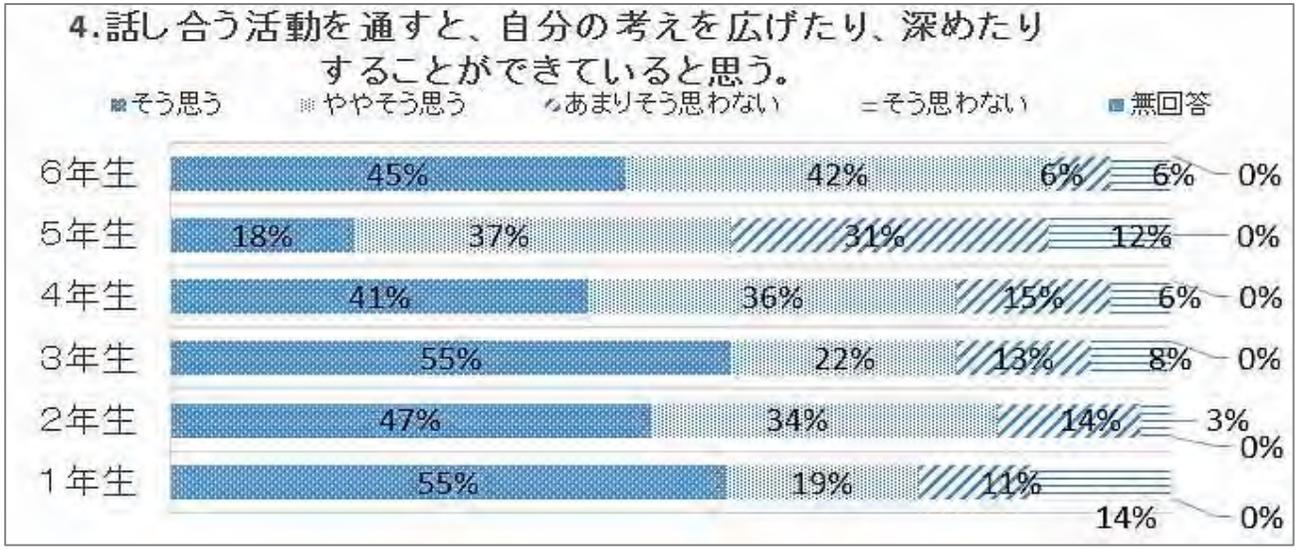


# 課題

一方で、「授業の中で、友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていると思いますか。」の項目では、肯定的回答は7月と比べて少しずつ上昇しているものの、学年によるばらつきが見られる。

研究テーマのめざす子ども像「気づきを深め合える子」の育成に関しては、授業改善の余地があると考えられる。

改善策としては、話し合い活動では、意見の理由や根拠まで互いに聞くようにし、友だちの考えからの気づきが増えるように授業を考えていきたい。また、ふり返りを充実させ、友だちの意見を聞いて「自分がどのように変わったか」や、「友だちの意見で取り入れられそうなもの」を考えて書くように、全学年で指導に当たりたい。



## (2) 次年度に向けて

二年間、国語科を軸として教科等横断的な視点でカリキュラム・マネジメントを行い、子どもたちの言語能力育成に取り組んできた。今後は、二年間の研究で育てた力を土台にし、国語科の授業改善を継続しつつ、さらに子どもたちが自ら学びをマネジメントし、言語能力を身につけていけるように活用の中を見直すことが重要と考えている。

言語能力育成の活用の中として

・国語科と総合的な学習の時間との関係の見直し

・国語科と行事の関係の見直し

から行っていきたい。

子どもたちの交流の場や活躍の場を増やし、互いに学び合うことのよさや、さまざまな場面での気づきを得られるように来年度の指導計画を立てていく必要がある。

# 総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメント

～生徒の資質・能力の教科等横断的な育成～

枚方市立第一中学校



Why

## なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 「自分にはよいところがあると思う」（全国学力・学習状況調査 生徒質問紙）に対する肯定的評価の割合が2年間で10pt減少していた。
- 自分の意見を発信することにためらいがあり、意見の交流場面に対して難しさを感じていた。
- 生徒の自己肯定感が下降傾向にあることが本校の大きな課題として捉え、日々の教育活動をととして自己肯定感を高めていくことを取組みの中心に据えた。

How

## どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 初年度は取組みのターゲットを3年生に絞り、総合的な学習の時間を軸として生徒の学びをコーディネートし、2年次に全学年で取組みをスタートした。
- 学校全体の取組みとする際、グランドデザインを作成することで、教職員の意識を統一し、教科の壁を超える仕掛けを作った。
- グランドデザインで示した資質・能力を身につけるために年間計画を見直し、授業改善を推進した。

Change

## どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 職員は身につけるべき資質・能力を意識した授業計画をつくることで、学校全体の取組みへと深まった。
- 生徒は共に学ぶ姿勢が身につけ、積極的な意見交換ができるようになり、「話し合う活動」に関するアンケートの強い肯定回答が、14.7pt上昇した。
- 他者の意見と自分の意見の違いに気付き、多角的な視点で課題を捉えようとするようになった。
- 学校アンケート（保護者）における「先生は子どもの意見や考えを大切にしている」の項目で肯定回答が12.7pt上昇した。



## 1. 令和元年度（研究初年度）の取組み

- (1) 研究の概要
- (2) 3年生の取組みを起点に
- (3) 3年生の取組みを学校全体の取組みへ
- (4) 生徒・保護者への発信

## 2. 2年次の取組み～逆算した計画と教科等横断的な視点～

- (1) 全学年で取組みをスタート
- (2) 具体的な取組み～1年生～今後の課題

## 3. 次年度に向けて

- (1) 2年間の成果と課題

# 1. 令和元年度（研究初年度）の取組み

## (1) 研究の概要

### ○本校の教育目標

「考える 思いやる たくましく生きる」

### ○生徒の実態

外部の有識者（関西外国語大学 坂本暢章教授）の助言に基づき、各種アンケートから本校の課題を洗い出し、特に生徒の自己肯定感が下降傾向にあることが本校の大きな課題として捉え、日々の教育活動をとおして自己肯定感を高めていくことを取組みの中心に据えた。

### ○研究テーマ

学習の基盤となる資質・能力の育成に向け、総合的な学習の時間を軸とし、教科等横断的に組織として教育課程を編成することで、

①自信をもって学べる子どもの育成

②「表現力（＝聞いて考えたことを自分の言葉で説明する力）」・「コミュニケーション力（＝多様な考え方を持つ人に対し、自分の意見を臆せずと言って合意形成を図る力）」の育成

③主体的・対話的な学びの実現による学力向上

### ○研究仮説

グループで納得解を出させたり、他者の考えを参考にしたりしたくなるような課題や問いを工夫することで、安心して自分の考えを話すことができる学習環境をつくり、自己肯定感を高めることができる。

### 「自分にはよいところがあると思う」

（全国学力・学習状況調査 生徒質問紙）に対する肯定的評価の割合

H29 72.1%（本校） 70.7%（全国） 【+1.4pt】

H30 77.7%（本校） 78.8%（全国） 【-1.1pt】

R01 62.6%（本校） 74.1%（全国） 【-11.5pt】

## (2) 3年生の取組みを起点に

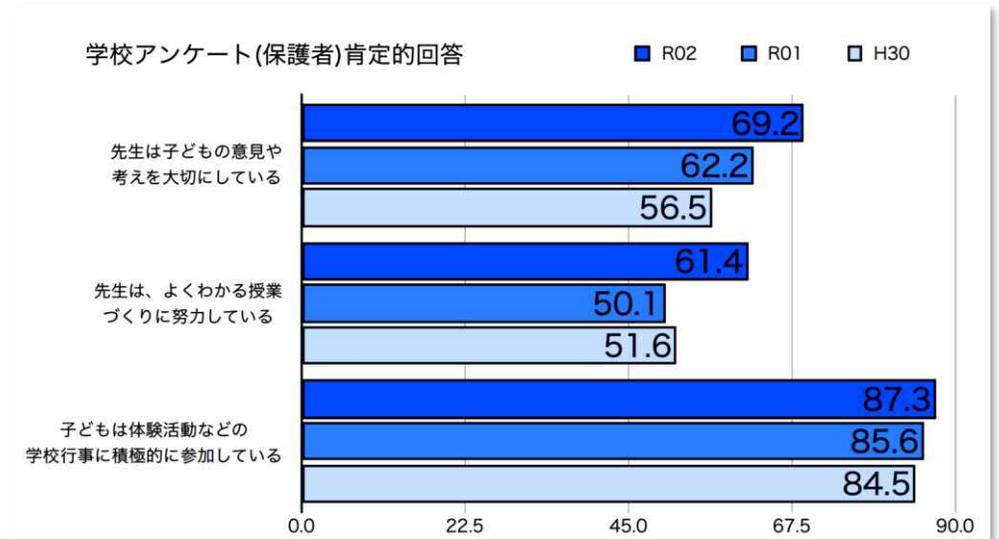
### ○ねらいを絞る

研究初年度は3年生をターゲットに取組みを推進していくこととした。総合的な学習の時間を柱として、教科のつながりを学年会で確認し、効果的に生徒の資質・能力を育成していく計画を立てた。具体的な目標として、「2学期末に、自分達が調べた内容について自信を持って発表すること」とし、「表現力」「コミュニケーション力」を教科等横断的に育成していくことをめざした。

### ○学習形態・学習環境の整備

4人班を基本とした学習形態を推進し、考えたアイデアを書き出すことができるよう、各班に1枚のホワイトボード(45×60)を設置した。例えば、道徳では「家族がドナーカードを記入せずに脳死したときどうするか？」(指導案・ワークシートは次ページ参照)などの課題設定を工夫することで、ホワイトボードに自分の意見を書いたり、班で意見をまとめたりする仕掛けを作りだし、他者の意見を聞きたくなる発問の工夫を推進することができた。この発問では、生徒が家庭内に議論の場を移すなどし、多角的な視点を取り入れようと主体的に学びを進めることができた。

このように、生徒が主体性を持ち、学びの場を学校だけでなく家庭にも持つことで、保護者に対する学校アンケート(5件法)の結果では、多くの項目で肯定的な回答の割合が上昇した。(右グラフ参照)



問題解決的な学習の展開

臓器移植を巡る迷いをもとに生命の尊さについて問題解決的に学習する展開である。中学生の時期は、身近な人の死に接したり、自分の命のありがたさを感じたりする経験がまだ少ないと考えられる。臓器移植を巡って自分や身近な人の生命について深く考えさせることで、生命のかけがえのないさを、尊重する態度を深めたい。

<b>学習指導過程</b> 近時所要：約5分	導入 展開 結末	実物の臓器提供意思表示カード 臓器移植の手続きを受け附けた人の手紙など
---------------------------	----------------	--

	学習活動	指導上の留意点【発問の意図】
導入 5分	1 臓器移植について知る。 発問①臓器移植や臓器提供意思表示カードについて知っていますか。 臓器提供意思表示カードの具体物を見せる。(発問書)	○臓器移植に関する知識の共有化を図る。適宜、研究についてなど情報を補足する。
展開 15分	2 教材「臓器ドナー」を読み、考える。 発問①【問題をつかもう。】臓器移植を巡っては、どんな迷いや問題があるだろう。 - 生と死について。 - 臓器はほしいが、あげたくない。  発問②【自分で考えてみよう。】自分の意思を臓器提供意思カードに書き込んで、班で意見を交換しよう。 - 自分の大切な臓だから、自分勝手にではないと思う。 - 大切な臓なので、たとくなくても大切にしたいから。  ★発問③【問題について考え、議論しよう。】臓器提供の意思表示をしていない家族が脳死した場合、臓器提供することができるか、できないか、また、その理由を書いて、班で交換しよう。 - 班で紙に意見をまとめる。 - 班で意見をまとめた後、他の班の紙を見に行く。	○教材を読んで感じたことを出させながら、以降の発問で自分の経験（自分事）として考えられるようにする。  ○生命に関する判断は直ぐ難しいものであり、だから生命のかけがえのないさについて深く自覚し尊重することが必要であり、正しい答えなどないことに気づかせる。  ○自分の命だけではなく、大切な人の命についてもどう判断するかを考えさせることで、生命尊重に繋がって自分なりの道徳的判断に意図が向くようにする。  ○班で意見を共有し、互いの考えを理解し合う。
結末 5分	3 今日の学習を振り返る。	○教材中の人物や文壇など、生命に対するさまざまな価値観に触れたうえで、今の自分の生命に対する思いを振り返らせたい。

**発問書例**

**臓器ドナー**  
- 生前に意思表示

**臓器提供意思表示カード**

○臓器移植を巡る迷いや問題

- ・ 生と死について。
- ・ 臓器はほしいが、あげたくない。
- ・ 自分の命とほかの人の命。

16	自他の生命の尊さ 臓器ドナー	教科書 96～99ページ
<p>〈1, 2, 3, いずれかの番号を○で囲んでください。〉</p> <p>1. 私は、<b>脳死後及び心臓が停止した死後</b>のいずれでも、移植のために臓器を提供します。</p> <p>2. 私は、<b>心臓が停止した死後</b>に限り、移植のために臓器を提供します。</p> <p>3. 私は、臓器を提供しません。</p> <p>〈1又は2を選んだ方で提供したくない臓器があれば、×をつけてください。〉 【心臓・肺・肝臓・腎臓・膵臓・小腸・眼球】</p> <p>(特記欄： 署名年月日：_____年____月____日 本人署名(自筆)：_____ 家族署名(自筆)：_____)</p>		

**考えてみよう** 臓器提供の意思表示をしていない家族が、脳死をした場合、臓器提供しますか？

【 はい ・ いいえ 】

理由

**振り返り** 今日の学習で気づいたことや考えたことをまとめてみよう。

自分への振り返り ○印をつけよう。

今日の授業の内容は	印象に残った	_____	印象に残らなかった
友達の見や話し合いから、新しい発見や気づきが	あった	_____	なかった
自分の考えを深めることが	できた	_____	できなかった
これから大切にしたいことが	わかった	_____	わからなかった



指導案データ



ワークシート

## ○教科等横断的な視点で、資質・能力、知識・技能をつなぐ

本校では、教科間の内容をつなぐだけでなく、資質・能力や必要とされる知識・技能、学習技法をつないでいくことを重視した。

国語科では、記述内容から読み取れることを班で協力してホワイトボードにマトリックスでまとめたり、数学では活用問題の解説をホワイトボードにまとめて説明したり、理科では実験をする前に今までの知識を使って、実験結果の予想とその根拠を各班がホワイトボードにまとめて発表したりした。



このように、総合的な学習の時間だけでなく、道徳を含めた全教科が4人班の交流を基本とし、意見を出したくなるような発問の工夫をしたり、理由や根拠を記述させたりし、その意見や記述に対して双方向のやりとりを促し、生徒がこれらの力を使って、自信を持ってプレゼンテーションができるようにした。このような経過をたどり、生徒は、班学習や発表時に自分の意見を言え、意見の相違があったとしても、他者と合意形成ができるようになった。

## ○初年度の成果

2学期末には体育館で保護者も交え、全員がポスターにまとめた資料を発表し、自分の見解を述べ、他者からの質問にも自分の考えを織り交ぜて返答することができた。また振り返りでは「新しい疑問を発見したのでさらに探究したい」などの記述があった。

研究初年度の取組みにより、生徒の主体性が育ち、自分の意見に自信を持って発言し、他者の意見にも誠実に向かい合える生徒集団となった。生徒の年間の振り返りでは、総合的な学習の時間や道徳についての内容記述が多く、「もっと上手く説明したい」「高校でも探究活動を続けたい」など前向きな姿勢が伺えた。特に、自我を出すことが苦手であった生徒が「先生たちの授業のおかげで、自分の意見を言うことが楽しいと気づくことができた」という振り返りを書いたことは、これまでの取組みの1つの大きな成果であると考えられる。教員はこれらの成果を実感し、「1年生の頃からこの取組みをすればさらに力がつく」という自信をもって、次年度の取組みを練ることができた。

### (3) 3年生の取組みを学校全体の取組みへ

#### ○学校のグランドデザインを作成する

学校全体のベクトルを揃えるため、取組みを推進する「明確な根拠」を作ることとした。管理職のリーダーシップのもと、教職員全員で卒業までにつけるべき資質・能力を策定する「学校のグランドデザイン」を作成した。その目標と資質・能力は教育目標に基づき、「自ら課題を見つけ、学んだこと、経験したことを生かして課題解決することができる」「自分自身で考えを持ち、他者と意見交流することで考えを広げ、深めることができる」の2点とした。

研究初年度は3年生をターゲットに取組みを推進していくこととした。総合的な学習の時間を柱として、教科のつながりを学年会で確認し、効果的に生徒の資質・能力を育成していく計画を立てた。具体的な目標として、「2学期末に、自分達が調べた内容について自信を持って発表すること」とし、「表現力」「コミュニケーション力」を教科等横断的に育成していくことをめざした。



## ○具体的場面の設定

力を発揮する場面を具体化するため、各学年で各学期にどのような資質・能力を身につけるのかを明確化した総合的な学習の時間の計画を作成して共有した。SDGsを題材として、「3年生で調べたことと自分の考え」をプレゼンテーション形式で発表し、さらに「行動として実践していくこと」をゴールとし、教職員が資質・能力の具体的なイメージを持てるようにした。

## ○巻き込む力

本校では見直しや新しい取組みについて、教員からの肯定的な意見が大半を占め、「子どものためならやろう」「まずはやってみよう」「前向きな意見は応援しよう」という雰囲気がある。そして、研究指定を受ける前と比べて、取組みが決定されてからのスピード感が増してきている。これも、生徒の育成すべき資質・能力が明記された「グランドデザイン」という同じ目標を持ち、教職員の判断基準が明確になったことが影響していると考えられる。



1年生



2年生



3年生

## ○総合的な学習の時間3か年計画

総合的な学習の時間において、各学年、各学期でつきたい資質・能力を明確にし、つけた力を発揮する場面や授業内容をまとめ、全職員で共有し、教科等横断的に生徒の力をつけることができた。

この計画に基づき、各学年の総合的な学習の時間担当者（学習・学力向上部）が案を作成し、学年会などで、その学年の生徒がより主体性を発揮できるような発問や課題の工夫を練り直したりした。

複数の職員が一緒に発問や課題を練り上げることで、教科の壁を越えて議論を進めることができ、職員の貴重な生きた研修の場にもなった。

また、新型コロナウイルスに係る計画の変更においては、「この計画に示した『つきたい資質・能力』をつけるためになにができるか」という幹があるため、授業内容の変更があったとしても、職員の視点はぶれることがなかった。

【1年】

	つきたい資質・能力	授業内容	つけた資質・能力の活用場面
1学期 夏休み	①SDGsについて知る ②探究的な学習の方法（特に「課題設定」と「仮説を立てる」ことの大切さ）を理解する	SDGsの目標16を利用した探究活動 10h 夏休みを利用して企業訪問	クラスでポスターセッションをワールドカフェ方式で実施する
2学期	①インタビューで情報収集ができる ②発表を聴いたら質問ができる ③ポスターセッション後に新たな課題を見つけることができる	コアタウンへの校外学習とSDGsをつなげた探究活動 20h	クラスでポスターセッション①をワールドカフェ方式で実施する 学年でポスターセッション②を実施する
3学期	①働くこととSDGsのつながりを考えるきっかけをつかむことができる	「職業調べ」「職業講話」などを通して企業のSDGsの取り組みを学ぶ 20h	クラスでポスターセッション①をワールドカフェ方式で実施する 学年でポスターセッション②を実施する

【2年】

	つきたい資質・能力	授業内容	つけた資質・能力の活用場面
1学期 夏休み	①SDGsについて知る ②インターネット以外の方法で情報収集ができる ③探究的な学習の方法（特に「課題設定」と「仮説を立てる」ことの大切さ）を理解する	①身近な問題をSDGsにつなげた探究活動 10h ②ポスターセッション①後の新たな課題と自分の職場体験学習での課題をつなげ、企業訪問の準備をする 8h ③職場体験先を探し、依頼する	クラスでポスターセッションをワールドカフェ方式で実施する
2学期	①発表を聴いたら質問ができる ②働くこととSDGsのつながりをつかむことができる ③ポスターセッション後に新たな課題を見つけることができる	①職場体験学習とSDGsをつなげた探究活動 20h ②校外学習を利用した探究活動 20h	クラスでポスターセッション①をワールドカフェ方式で実施する 学年でポスターセッション②を1年生を招待して実施する
3学期	自分の進路について考えることができる	ドリームマップの作成 8h	自分の夢をクラスでプレゼンテーション

【3年】

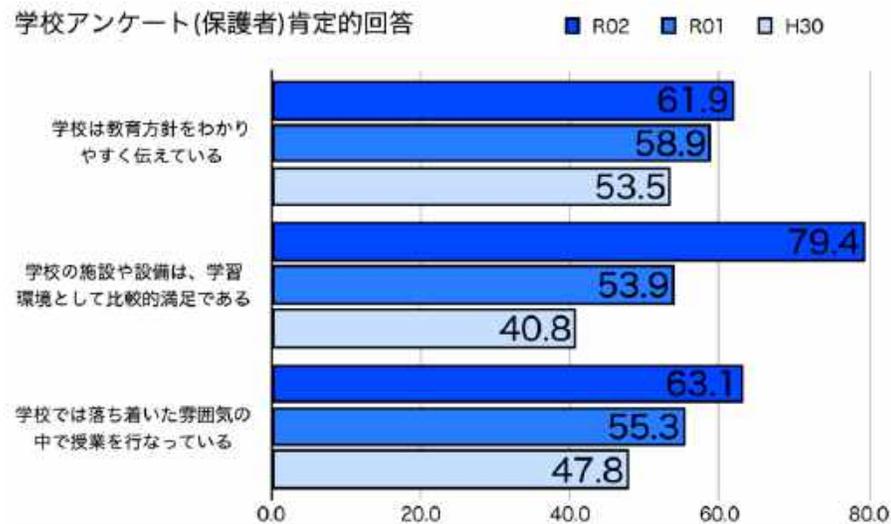
	つきたい資質・能力	授業内容	つけた資質・能力の活用場面
1学期	①SDGsについて知る ②インターネット以外の方法で情報収集ができる ③探究的な学習の方法（特に「課題設定」と「仮説を立てる」ことの大切さ）を理解する	①身近な問題をSDGsにつなげた探究活動 10h ②ポスターセッション①後の新たな課題と修学旅行での課題をつなげる	クラスでポスターセッションをワールドカフェ方式で実施する
2学期	①発表を聴いたら質問ができる ②ポスターセッション後に新たな課題を見つけることができる ③SDGs達成のための行動ができる	①修学旅行とSDGsをつなげた探究活動 20h ②実行計画を作り、行動する	クラスでポスターセッション①をワールドカフェ方式で実施する 学年でポスターセッション②を1年生と大人を招待して実施する
3学期	行動することで新たな課題を見つけることができる	SDGs報告会	在校生や関係する大人を招待してサミットを開催する

## (4) 生徒・保護者への発信

新学習指導要領の実施に向け、本校でも授業改善を進めているが、保護者から、「なぜ班学習なのか」「板書を中心とした授業に戻してほしい」などの意見をいただくことがあった。

そこで、学校のグランドデザインを生徒・保護者へ公表し、「学力向上の取り組みNEWS」を新たに発行して、グランドデザインの意味や、なぜ授業が変わるのかを生徒・保護者へ発信し、ホームページで公表することとした。この「学力向上の取り組みNEWS」では、ICT機器の導入や学習スタイルの変化など、生徒・保護者の疑問に答えていけるよう定期的に発信していくこととしている。

学校の情報を積極的に発信していくことで、保護者に対する学校アンケートでは次のような変化が出ており、成果を見とることができたことから、来年度以降もこの取組みを継続していく価値を見出している。



### 学力向上の取り組みNEWS

～共に学ぼう、共に高め合おう～

#### 発信していきます

近年教育界を取り巻く環境の変化はめまぐるしく、10年前、20年前の教育スタイルとは様変わりしています。

ICT機器の導入や、班学習の取り組み、総合学習の改善など、時代に合わせ、生徒に必要な資質・能力を育成していくために、外部の知見(大学教授や専門家など)を積極的に校内に入れています。

保護者の皆様におかれましては、この教育の姿容に戸惑いを感じることがあるかと思いますが、「学力向上の取り組みNEWS」を定期的に発行し、少しでも「新しい一中の教育」をお伝えしていこうと考えています。

これから訪れるだろう激動の社会で、一中学生が、自信を持って羽ばたいていけるよう、ご協力をお願いします。

#### 新しい時代を生き抜くために

休校期間が終わり、2週間の分散登校を終り、6月15日より学校が再開しました。この4月からスタートするはずだった様々な行事や取り組みが実施できるかどうか、不安な中の再開でした。

右の資料は、学校の「グランドデザイン」と言われるものです。昨年度末に、新学習指導要領作成に携わっており、文部科学省中央教育審議会委員を務めている、横浜国立大学の高木康郎名誉教授に本校いただき、本校職員が「どのような教育をしていきたいのか」を議論し、高木先生のお話のもと、教育目標をグランドデザインとして取りまとめました。来年度実施の新学習指導要領に基づき、一中学生が獲得したい資質・能力を明確にして、一中の目標を定めたものです。

このグランドデザインは、6月末に各学年の総合の時間に生徒には配布しており、ホームページでも公表しています。このグランドデザインに基づき、授業や取り組みなどを見直し、改善しています。

グローバル化やAIなどが急速に進進し、社会の構造が大きく変わっていく現代において、今までのような受験中心の教育では国際社会の中で日本を取り残されてしまう。そこで教育を改革しようというのが新学習指導要領です。

めまぐるしく変化する社会で生き抜くためには、「受験で高い点数をとるためだけ」に勉強するという考えでは取り残されると、高木先生を含めたくさんの研究者が警鐘を鳴らしています。今こそ学校とは何かを真剣に考えるタイミングなのかもしれません。受験でも、社会人になっても輝いて欲しい。そんな思いを込めて作っています。



## 2. 2年次の取組み～逆算した計画と教科等横断的な視点～

### (1) 全学年で取組みをスタート

#### ○生徒・教職員のベクトルを揃える

全生徒が同じ目標へ向かうことを目的とし、全学年で「総合的な学習の時間」を通して、これからの時代を生きていくうえでつけたい力について明確に示した、共通の「総合開き資料」を使い、全担任が同じ説明を全生徒にした。生徒にも「**3年生で力を発揮する場面**」を具体的に示すことで、生徒全員が“3年生で調べたことと自分の考えをプレゼンテーション形式で発表し、さらに行動として実践していくこと”という「ゴール」を見据えることができた。

#### ○校務分掌の役割

全学年で総合的な学習の時間を充実させ、学校のランドデザインで示した資質・能力を育成するため、学習・学力向上部では週に1回の部会で、各学年の取組みを共有し、進捗状況を確認したり、総合的な学習の時間の計画を練り直したりした。また、相互参観授業週間を学期に1回定め、他の教科でどのような取組みをしているのか実際に目にする機会を作り、教職員が互いに刺激を受けながら、授業を改善しているように工夫している。（右図は相互参観用の授業参観シート）

授業参観シート

日時：( )月( )日( )時～( )時  
 授業者：( )先生 教科( )  
 参観者：( )

① 11月6日公開授業で1回参観してください。  
 ② 11月2日～11月13日までの期間で1回以上参観してください。

かがめざす子どもの姿 学校ランドデザイン

- 学んだこと、経験したことを生かして自ら設定した課題を解決している
- 自分の考えや思いを他者と交流することで学びを深めている

① 授業を見る観点を下の表から選んで参観してください。（すべてに記載する必要はありません）

観点	見つけた工夫やアドバイス
生徒が主体的に学習をすすめている工夫	
他者と交流することで学びを深める工夫	
生徒同士がつながりを持つ工夫	
生徒の学びを定着させる工夫	
板書の工夫	
生徒の学びを深める時間の工夫	
課題（プリントや教具）の工夫	
個に応じた指導の工夫	
生徒の学びを見取る工夫	

② 授業者の先生に質問/メッセージを書いてください。

※参観シートは授業者へ原本を、学力向上担当まで写しを渡してください。複写して使用してください。





## (2) 具体的な取組み～1年生～

### ○ 1年生の目標

1年生の1学期の総合的な学習の時間では、まず、①SDGsについて知ること、②探究的な学習方法を理解する、の2点から取組みを始めた。また、力を発揮する場面は、班で協力して説明資料を作成し、ポスターセッションをワールドカフェ方式で実施し、全員が自分たちの考えを説明することとした。

### ○ 目標を見据えた計画

1年生の総合的な学習の時間第1期の計画は6月から9月中旬までの3ヶ月半の計画で、この計画に基づき、各教科が授業において育成した資質・能力を、どのように総合的な学習の時間につなげることができるのか、**職員室内の単元計画表に書き込んでいくことで、効果的に生徒の力をつけていく工夫をした。**



1年生総合  
学習計画



1年生総合  
ワークシート







## ○取組みの進捗を見取る

生徒の力は「伸びている」と多くの教職員が「感じる」ことができた。学校自己診断アンケート項目「先生は、生徒の意見や考えを大切にしてくれる」の肯定的回答が、63.4%から70.9%に上昇したことからも、取組みの成果を見取ることができた。しかし、もっと正確にこの取組みの成果や課題を数値として振り返ることで、さらに本校の取組みを推進できるのではないかと考えた。

そこで令和2年度からは、年度当初と学期末にアンケートを実施し、強い肯定の数値を取組みの成果として見取ることとした。このアンケート内容を集約し、学年会で共有することで、今後の展望や対策を練ることにつながった。1年生では実際に、全5問中4問の強い肯定回答が入学当初から12月にかけて上昇し、特に「中学校に入学してから、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていたと思いますか」の項目では、入学当初から比べ14.7pt上昇した。この結果は、職員にとって大きな励みになると共に、自信にもつながった。今後もアンケートを定期的に取り、取組みの進捗を丁寧に見取ることで、カリキュラム・マネジメントを学校の「文化」に落とし込み、異動者を含めたくさんの職員が協力できる環境を作り出していきたい。

1年生 カリキュラムマネジメント進捗確認表 アンケート結果

組	アンケート項目	A B C D				学年の傾向	
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	肯定的回答 A+B	強い肯定 A
5/19	中学校に入学してから、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていたと思いますか	45.6%	48.3%	9.9%	1.2%	88.9%	45.6%
8/4		68.6%	26.7%	3.5%	1.2%	95.3%	68.6%
12/3		60.3%	31.8%	4.0%	4.0%	92.1%	60.3%
						0.0%	0.0%
						0.0%	0.0%
5/19	中学校に入学してから、授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていましたか	47.4%	39.2%	11.1%	2.3%	86.5%	47.4%
8/4		43.0%	46.5%	9.9%	0.6%	89.5%	43.0%
12/3		51.7%	33.8%	9.9%	4.6%	85.5%	51.7%
						0.0%	0.0%
						0.0%	0.0%
5/19	中学校に入学してから、総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか	48.0%	36.3%	13.5%	2.3%	84.2%	48.0%
8/4		41.3%	43.6%	13.4%	1.7%	84.9%	41.3%
12/3		47.7%	39.7%	7.9%	4.6%	87.4%	47.7%
						0.0%	0.0%
						0.0%	0.0%
5/19	中学校に入学してから、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがよまらなくなる、資料や文章、絵の描き立てなどを工夫して発表していたと思いますか	35.7%	49.1%	12.9%	2.3%	84.8%	35.7%
8/4		32.6%	46.5%	18.0%	2.9%	79.1%	32.6%
12/3		37.7%	47.0%	9.9%	5.3%	84.7%	37.7%
						0.0%	0.0%
						0.0%	0.0%
5/19	中学校に入学してから、みんなで話し合っただけのことなどに協力して取り組み、気づかされたことがありますか	59.6%	30.4%	7.0%	2.9%	90.1%	59.6%
8/4		68.6%	22.1%	8.7%	0.6%	90.7%	68.6%
12/3		65.6%	23.8%	5.3%	5.3%	89.4%	65.6%
						0.0%	0.0%
						0.0%	0.0%

目標としている強い肯定の上昇は5問中4問達成しました。

質問① 45.6→60.3(+14.7) 大幅UP!!      質問② 47.4→51.7(+4.3)

質問④ 35.7→37.7(+2.0)                      質問⑤ 59.6→65.6(+6.0)

特に、質問①話し合う活動の充実では、+14.7となっており、様々な教科で意図的に取組みを進めていることが、結果として表れています。先生方ありがとうございます。これからもがんばりましょう!

質問③については、生徒が総合第2期の取組の難しさを感じているのかもしれませんが、発表までに、生徒の自己肯定感を高められるよう、教員の適度な介入が必要と感じます。学年全体で協力していきましょう。ただし、肯定的な回答は、84.2→87.4と+3.2に上昇しています。

# 3. 次年度に向けて

## (1) 2年間の成果と課題

### ○「大人が変われば子どもが変わる。子どもが変われば大人が変わる。」

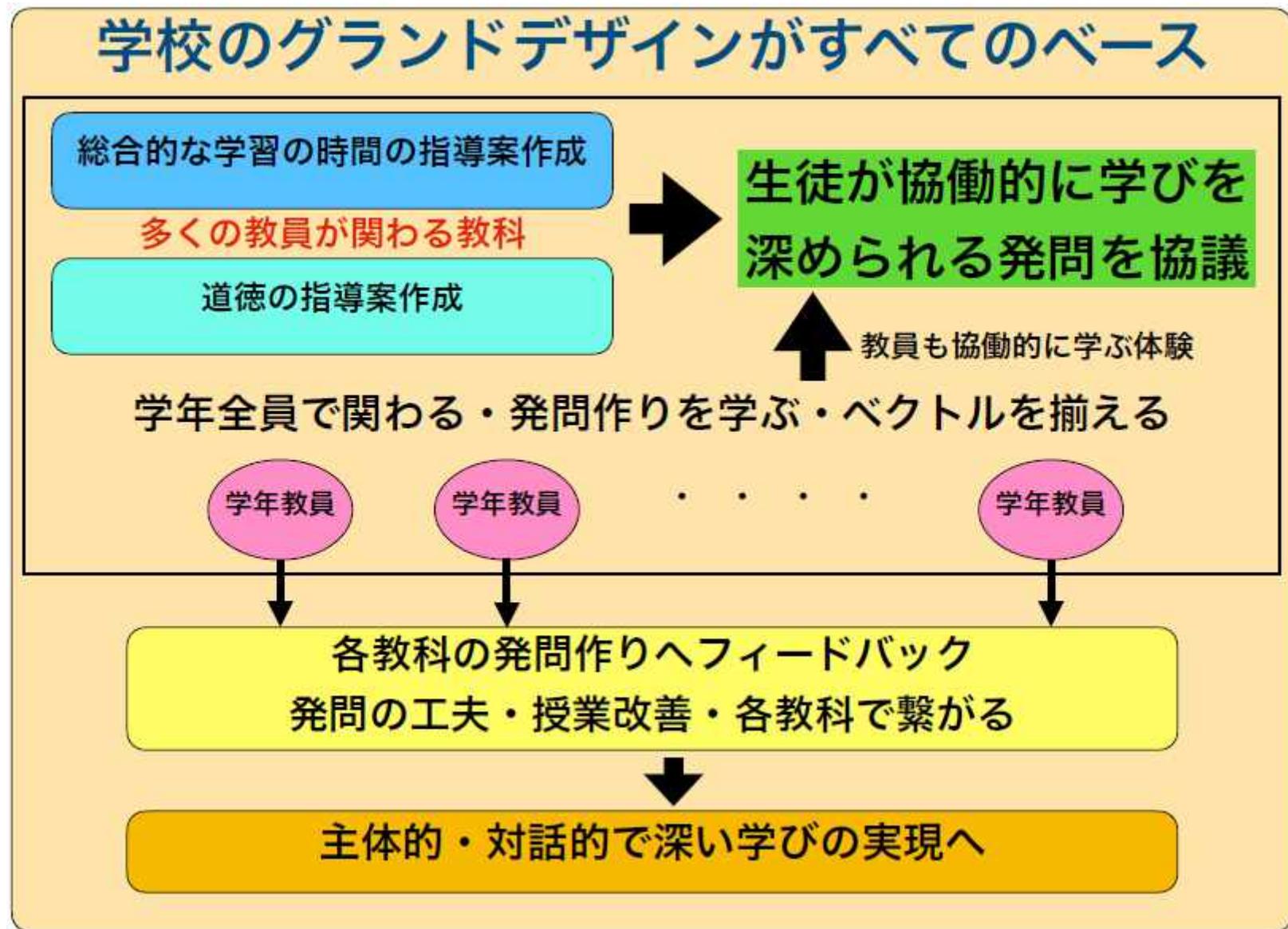
2年間の本校の大きな成果は生徒の様子に変化があったことである。1年めは「自信を持って、自分の意見を言うことができない」「意見をぶつけ合うことができない」などの課題が多く見られた。しかし、「自分の意見」を言う機会を教科等横断的に持ち続け、「自分の考えに間違いなんてない」と言い続けることで、生徒は安心して意見を出せるようになり、意見を出す必要性を感じることができた。指導方法を工夫すれば、子どもの力は伸ばすことができ、「できない」ことも「できる」ようになることを目の当たりにすることができた。そして、「大人（教員）の指導方法が変われば子ども（生徒）が変わる。そして、子どもが変われば大人も変わる。」という成功体験をもとに、2年次の取組みを力強く推進することができた。大人同士で気づき合えることも、子どもから気づかされることも多々あった。たくさんの人を巻き込めば巻き込むほど、多くの変化が現れる可能性を秘めている。これからもできるだけたくさんの人を巻き込み、学校の取組みが深化していくことをめざすつもりである。

### ○教科の壁を超える

道徳や総合的な学習の時間の授業について、より考えが巡るような主発問を学年全体で協議することで、各教科の授業が生徒に主体性を持たせるよう改善されることは大きな発見であった。たくさんの教職員が関わる総合的な学習の時間を軸として、各教科内の活動内容がより生徒主体のものへと変化し、つけたい資質・能力を意識するようになった。教科の壁を越え、授業の主体が生徒へと移り変わっていく過程を本校が歩んでいるように感じる。

## ○既存の取組みの見直し

学校のグランドデザインに基づく授業改善を進める中で、学校の既存の取組みの見直しも加速した。グランドデザインで示した生徒につける資質・能力と合致させるために、朝読書のあり方や、修学旅行を含む校外学習についても見直しを図り、「何を身につけ、何を学ぶのか」「3年間でどう系統立てるのか」という視点で議論を交わすことができている。また、生徒が主体的に学校を変えようとする力も芽生えだし、例えば生徒会を通じて「テスト範囲の公表時期を早めてもらい、計画的に学習を進めたい」という要望を叶えることができた。



## ○数値としての成果

前述のアンケート結果のとおり、5項目中4項目で強い肯定的な回答が上昇しており、取組みの成果が伺える。しかしながら、本校の取組みの成果をアンケート数値で見取るには、取組みが途中段階であるため、分析しきれていないと言えない。この取組みを継続し、一過性のものではなく、経年比較や同一集団比較までできるよう、学校の「文化」にまで落とし込むことが本校の課題である。

## ○最後に

カリキュラム・マネジメントの研究を進めることで、学校全体のビジョンや「つけたい資質・能力」を明確にし、教職員・生徒が同じベクトルで取組みを推進することができた。教職員や教科が各々で生徒の力をつけるのではなく、計画的に組織的に力をつけることで、生徒は力をより効果的に身につけることができている。生徒が自己肯定感をもって学び続けられるよう、この取組みを継続し、本校の文化としていきたい。

# 「食に関する指導」を通じて 家庭・地域とつながる西小っ子

熊取町立西小学校



## Why

### なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 児童の「食」に対する意識は低く、偏食や野菜嫌いが見られる。
- 学校で「食に関する指導」を行ってきたが、独立した取組みになりがちであった。
- 「食に関する指導」を効果的に進めるための研究が必要であった。



## How

### どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- アンケートにより児童の実態を把握したり、実践の検証を行い、学校全体で課題と実践を共有する。
- 発達段階に応じた系統的な指導計画を立案する。
- 各学年において単元配列表を用いて教科横断的な視点でつながりを意識し、授業計画を立てる。
- 地域の環境や人的資源を活用し、体験学習等を通して児童の学びを深める。



## Change

### どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 児童の「食」に対する意識が高まり、「食」を通して人とつながったり、今までの学びや日常生活等と結びつけて考えたりする姿が見られるようになった。
- 教職員は「食に関する指導」と各教科とのつながりを意識して授業改善に取り組むようになった。
- 教職員同士が「食に関する指導」を通してつながり、学校全体で成果や課題を共有し、改善につなげられるようになった。
- 各教科においても、系統性や教科横断的な視点をもって指導計画を作成するようになった。

## 1. 全教職員による共通理解と協働

- (1) カリキュラム・マネジメントの基盤としての教職員の共通理解
- (2) カリマネ表(単元配列表)の作成と活用

## 2. 具体的な授業実践

- (1) 教科横断的な視点でのつながりを意識した実践
- (2) 地域の環境や人的資源を活用した体験学習の実践
- (3) 系統性や既習事項とのつながりを意識した授業実践
- (4) 教科指導への広がり

## 3. 成果と今後について

- (1) 児童の変容
- (2) 教職員の変容
- (3) 成果・課題と今後に向けて

# 1. 全教職員による共通理解と協働

## (1) カリキュラム・マネジメントの基盤としての教職員の共通理解

本校では、従来より地域の資源を活用し、さまざまな食に関する学習や体験的学習等に取り組んできた。しかしながら、それぞれの取組みが単発になりがちであった。また、全国学力学習状況調査における朝食摂取状況では平均を下回るなど、児童の食に対する意識の低さが見られる状況であった。そこで、「食に関する教育において、教科横断的な視点に立ち、全体計画と関連づけながら効果的な指導を行う」ことをテーマに研究を行うことにした。

「食」に関する学習は、家庭科の内容の中で取り上げられるが、「食に関する指導」の目標については、家庭科の教育課程の中だけで達成できるものではなく、学校の教育活動全体を通して計画的、継続的に取り組み、達成していくことが期待されている。また、取組みの内容に関しては、家庭や地域との連携が必要になる場合も多くなる。それらの特性を踏まえ効果的に指導を行うには学校全体、各学年の年間指導計画を俯瞰的に捉え、いつ、どの教科・領域で、どんな「食に関する指導」を行うかを検討する必要があった。

カリキュラム・マネジメントの実現には、学校の教育活動の現状に対する問題意識を全教職員が共有したうえでの「協働」が不可欠である。そこで、「カリマネ表（単元配列表）」を作成し、これまでの「食に関する指導」の実践について各教科・領域とのつながりを捉えることにした。

研究開始当初は、教職員がどのような視点で、どのように研究を進めていくかをイメージできない状況であったため、身近な課題に着目し取組みを進めた。

大阪教育大学の田村先生をお招きした研修会において、児童の実態やアンケート調査の結果をもとにして、K J法を用いて課題を整理し、「児童の偏食、特に野菜ぎらいの児童が多い」ことを取り上げ、各学年の取組み目標を検討する機会をもった。その際、以下の4つのポイントを踏まえて、各学年の取組み目標を策定した。

### 【ポイント】

- ①各学年の取組みを理解し、発達段階に応じた系統的な指導計画にすること
- ②バランスよく食べること、特に野菜を見たり、育てたりして、野菜を身近に感じられるように取り組むこと
- ③周りに田畑が多くあり、作物を育てている地域の方々がたくさんおられることを生かして、作物を育てる喜びや工夫、苦労などを聞かさせていただくことにより、食物の大切さを理解させ感謝の気持ちを育むこと
- ④食育は家庭と切っても切れない関係にあり、生活環境や価値観については、家庭によりさまざまである。したがって、食育を進めていく上で、家庭との協力は不可欠であること



【表 1】「野菜ぎらい」を切り口とした各学年の取り組み目標

学年	目 標
1年	野菜の名前を覚えて野菜に親しませる
2年	自分たちで育てた野菜を工夫して調理し、野菜嫌いの子どもの数を減らす
3年	畑で働く方の工夫や苦勞を知り、生産にかかわる人々への感謝の気持ちを育てる
4年	食事のマナーアップを図る（食事マナーと学力の関係性を意識して）
5年	交流（保護者、地域等）を進め、感謝の気持ちを深め、よりおいしく食事をする
6年	食事のマナーの向上と楽しさを味わい、修学旅行で仲間との親交を深める



第2回目の研修会では、武庫川女子大学の藤本勇二先生をお招きし、第1回研修会で検討した「食育は育てる、作る、食べる」という切り口からだけでなく、環境問題、食品ロスの問題等からのアプローチもあることを再確認した。食に関わるさまざまな課題を明らかにすることにより、「食の安全」や「命の尊さ」、「健康なからだづくり」への広がりなど、他教科や領域との関連性や発達段階（学年）に応じた取組みのあり方が、より鮮明になった。

実際に令和2年度の取組みについては4年生で、食品ロスの問題を自分たちにできる環境問題と捉え、給食の残食を減らす取組みが行われ、委員会活動ではアルミ缶や古紙を集める取組みの意識の向上につながっていった。

このように、カリキュラム・マネジメントを意識した取組みを進めることを通して、日常的に教科横断的な実践を行っていたことに気づき、教職員が共通理解をし、組織的、計画的に進めることが、教育の質の向上につながることが実感できた。





## 2. 具体的な授業実践

### (1) 教科横断的な視点でのつながりを意識した実践

P.5の【表1】の目標を踏まえ、「カリマネ表」を活用して各学年で取組みを実践した。主な実践例は【表2】の通りである。

【表2】各学年の主な取組み

学年	取組み
1年生	栄養職員との連携による給食指導
2年生	自分たちで育てた野菜を工夫して調理、活用した取組み
3年生	お店や畑で働く方の工夫や苦勞を学び、感謝の気持ちを育てる取組み
4年生	食品ロスについて学び、自分たちができることにつなげる取組み
5年生	体験、交流（保護者、地域等）を通して、感謝の気持ちを深める取組み
6年生	調理実習や給食等を通じて食事のマナーを向上させる取組み

- 1年生：特別活動の時間を活用して、給食開始までに実際に使うお盆やお皿を使って配膳の事前指導や、生活科の時間や給食の時間を活用し、野菜のはたらきの指導を実施した。
- 3年生：社会科の学習でお店や畑で働く人の工夫や苦勞を学び、社会見学ではスーパーマーケットの見学や畑で働く人の話を聞くなど実施した。
- 4年生：社会科の学習で「住みよいくらし」の単元の「ごみのしまつと活用」について学習し、熊取町住民部産業振興課の協力を得て、熊取町で推進されている4Rの取組みの中のリデュース（ごみを減らす）について食品ロスのことを学習した。
- 6年生：家庭科の調理実習を通して、家庭への感謝の気持ちを育み、給食の時間や修学旅行での会食などでは、食事のマナーの向上に取り組んだ。



## 【5年生】

①社会科、総合的な学習の時間を活用し、農業体験を実施する。学校付近の農家の方の協力を得て、田植えの体験を行う。

②農家の方から仕事について学び、機械がない時代の苦労話等も聞かせていただく。

③稲刈り体験を行う。農家の方の苦労や工夫に気づき、お米を大切に食べようという意識が高まった。また、感謝の気持ちを育むこともできた。

④総合的な学習の時間に「もっとみんながお米を食べるための作戦を立てよう」というめあてを持って班ごとに作戦を立て、土曜参観で発表した。その内容を新聞にまとめて共有した。

⑤支援学級（ひまわり学級）で育てた野菜と、5年生全体で育てたお米を使って、家庭科の時間におにぎりと豚汁を作って交流会を行った。



今は機械で田植えも稲刈りもしているが、もっと昔は家族全員で手作業でしていたことを聞いてびっくりした。



外国のお米のことも知って、日本のお米のおいしさを感じました。



### (3) 系統性や既習事項とのつながりを意識した授業実践

小学5年生の家庭科「食べて元気！ご飯とみそ汁」（東京書籍）の単元で、5大栄養素の学習の公開授業を実施した。

#### 【単元の目標】

食事の役割や栄養について理解するとともに、健康で安全な食生活について考え、課題をもって、日本の伝統的な日常食であるご飯とみそ汁に関する基礎的・基本的な知識と技能を身につけ、自らの食生活をよいものにするための実践的な態度を養うこと。

#### 【他教科・領域、既習事項等とのつながり】

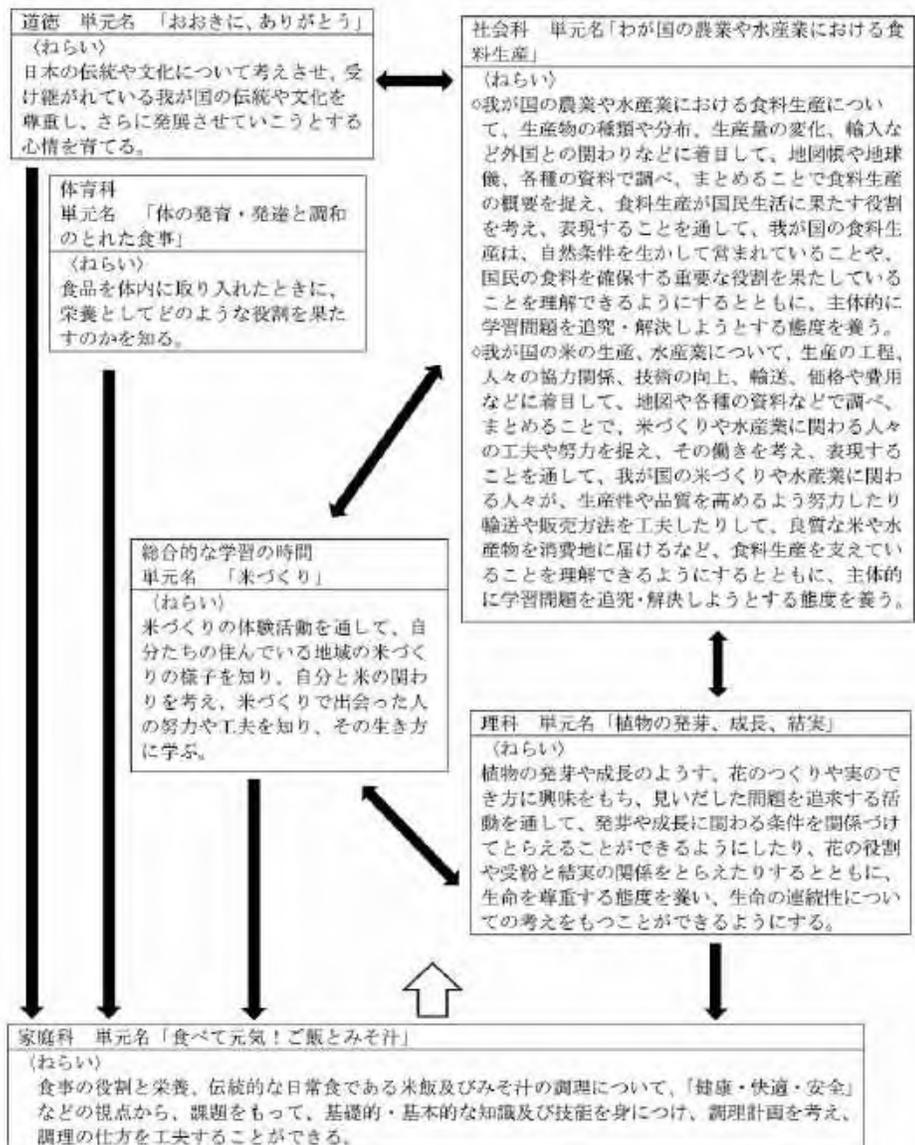
- ・「食事の役割」：第4学年 体育「体の発育・発達と調和のとれた食事」
- ・「栄養」：第5学年 理科「植物の発芽、成長、結実」
- ・「伝統的な日常食」：道徳「伝統文化の尊重」
- ・「日常食であるご飯とみそ汁」：第5学年 社会「わが国の農業や水産業における食料生産」  
第5学年 総合的な学習の時間「米づくり」
- ・「自らの食生活をよいものにするための実践的な態度」：道徳「節度・節制」



#### 【自分の生活・家庭や人・地域とのつながり】

- ・自分の生活は家族との協力や、地域の人々との関わりの中で成り立っていること、家庭生活は自分と家族との関係だけでなく、地域の人々と関わることでより豊かになることを理解した上で、より良い生活を工夫して積極的に取り組むことができるようにする。
- ・食生活を家庭生活の中で総合的に捉えるという家庭科の特質を生かし、家庭や地域との連携を図りながら健康で安全な食生活を実践するための基礎が培われるよう配慮するとともに、必要に応じて、家庭科専科や給食主任、地域の人々の協力を得るなど、食育の充実を図る。

「つながり」相関図



本単元における「つながり」相関図

【本単元の実施に至るまでの「つながり」について】

カリマネ表（単元配列表）を作成する以前は、1時間の授業が独立したものになりがちであった。しかし、年間指導計画を俯瞰的に捉え、さらに学年の教員で「食に関する指導」に係る単元等を線でつなぐ（7ページ参照）ことによって、年間を通して教科横断的な視点をもって指導に臨むことができた。実際の授業では、「〇〇で学習した△△と関係している」といった声かけや「〇〇で学習したことを思い出してみよう」といった指示や声かけが自然とできるようになっている。

また、子どもたちからも「〇〇で学習したことと似てる」や「△△とつながってる」、さらには「この学習はどんなことにつながるんやろ」といった声が聞こえるようになった。

本単元の学習については、4年生時の保健の学習で「食品を体内に取り入れた時のはたらき」や理科の「植物の発芽、成長、結実」の単元で植物の種子の中の養分に関する学習で扱うでんぷんとの関連を図った。また社会科の「わが国の農業や水産業における食糧生産」や総合的な学習の時間の「米づくり」、道徳の日本文化を大切にしようとする態度や生活を楽しもうとする態度を育てる学習とも関連を考えて学習を進めた。



## (4) 教科指導への広がり

本校の研究教科（生活科、理科）については、つながりを意識した学習指導案を作成している。

小学5年生の理科「ふりこのきまり」の単元で、大阪体育大学の神山先生を講師としてお招きし、「ともにつながり、ひびき合う学習をめざして～始めと終わりのつながりをデザインする～」をテーマに授業研究を行った。「つながり」を生かした学習のめあて、「つながり」の相関図は次のとおりである。

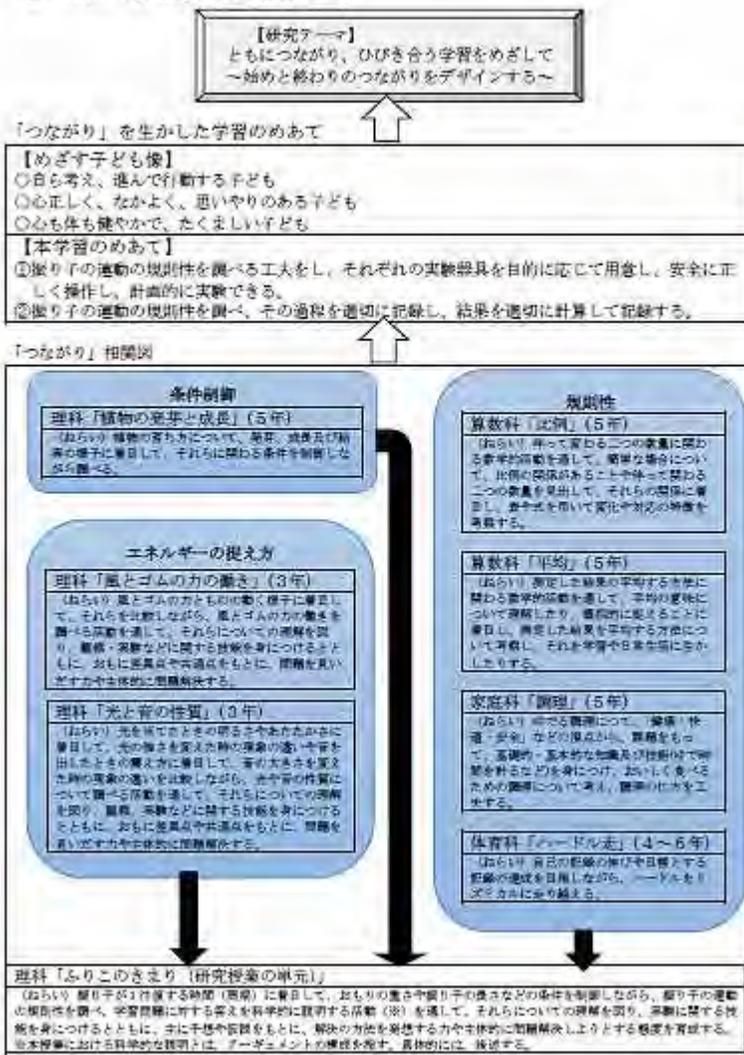
また、既習学習及び他教科とのつながりは次ページのとおりである。



### 7. 指導観

#### (1) 研究テーマとの関わり

##### ① 「つながり」を生かした授業デザイン



### ② 「つながり」を生かすための手立て

#### 【既習事項とのつながり】

- ・「植物の発芽と成長」の学習を通して、条件を制御しながら調べた。このことから、本単元では、振り子の実験の条件(振れ幅・おもりの重さ・振り子の長さ)を適切に制御しながら調べられるようにしていきたい。
- ・「風とゴムの力の働き」「光と音の性質」の学習を通して、主体的、計画的に操作や制御を通して働きかけ、進捗することにより、対象の性質や働き、規則性などについての考えを構築してきた。このことから、本単元では、おもりの重さや振り子の長さなどの条件を制御しながら、振り子の運動の規則性を調べていきたい。

#### 【他教科とのつながり】

- ・算数科「平均」では、平均の意味について理解したり、概率的に捉えることに着目し、測定した結果を平均する方法について考察したりする活動を行った。このことから、本単元では、振り子の1往復する時間の平均時間を適切に計算できるようにしていきたい。
- ・算数「比例」では、作って覚える二つの数量を見出して、それらの関係に着目し、表や式を用いて変化に対応の等価を考察する活動を行った。このことから、本単元では、振り子が1往復する時間と振れ幅・おもりの重さ・振り子の長さの二つの数量の関係に着目し、表や式を用いて変化に対応の等価を考察していきたい。
- ・家庭科「調理」では、課題をもって、基礎的・基本的な知識及び技能(ゆで時間を計るなど)を身に付ける学習を行った。このことから、本単元では、振り子が1往復する時間を適切に計れるようにしていきたい。
- ・体育科「ハードル走」では、ハードルをリズミカルに走り越える活動を行った。このことから、本単元では、一定周期で振れる振り子の動きに関連させて学ばせたい。

#### 【研究テーマとのつながり】

- ・校内研究では、研究テーマを「ともにつながり、ひびき合う学習をめざして～始めと終わりのつながりをデザインする～」と設定している。言語活動を充実させ、既習事項とつなげ、「またやりたい」「もっと知りたい」と思える、次の学びにつながる授業になるように工夫することで子どもたちがわかる・できる喜びを味わうような授業をめざしている。
- そこで、論理的に思考し、自分の思い、考えを表現する力を育てることで言語活動の充実を図ることができるのではないかと考えアーギュメントの理論を用いた活動内容にした。

### 10. 本単元の学習の関連と発展(単元の系統について)

校種	学年	エネルギー	
		エネルギーの捉え方	
小学校	第3学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・風とゴムの力の働き</li> <li>・風の力の働き</li> <li>・ゴムの力の働き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・光と音の性質</li> <li>・光の反射・屈折</li> <li>・光の当て方と明るさや暖かさ</li> <li>・音の伝わり方と大小</li> </ul>
	第4学年		
	第5学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・振り子の運動</li> <li>・振り子の運動</li> </ul>	

### 【既習事項とのつながり】

- ・「植物の発芽と成長」の学習を通して、日当たりなどの条件を制御しながら調べた。このことから、本単元では、振り子の実験の条件（振れ幅・おもりの重さ・振り子の長さ）を適切に制御しながら調べられるようにしていく。
- ・「風とゴムの力の働き」「光と音の性質」の学習では、実験において主体的、計画的に機器を操作したり、条件を制御したりするなどして追究することにより、対象の性質や働き、規則性などについての考えを構築してきた。このことから、本単元では、おもりの重さや振り子の長さなどの条件を制御しながら、振り子の運動の規則性を調べていく。

### 【他教科とのつながり】

- ・算数科「平均」では、平均の意味について理解したり、概括的に捉えることに着目し、測定した結果を平均する方法について考察したりする活動を行った。本単元で、振り子の一往復する時間の平均時間を適切に計算する際に役立った。
- ・算数「比例」では、伴って関わる二つの数量を見出して、それらの関係に着目し、表や式を用いて変化や対応の特徴を考察する活動を行った。本単元では、振り子が一往復する時間と振れ幅・おもりの重さ・振り子の長さの2つの数量の関係に着目し、表や式を用いて変化や対応の特徴を考察した。

本研究授業を通して、児童が「またやりたい」「もっと知りたい」と思える授業を行うにはどうすればよいかを理解できた。また、「次につながる授業づくり」「これまでの学びとつながる授業づくり」の大切さを実感することができた。



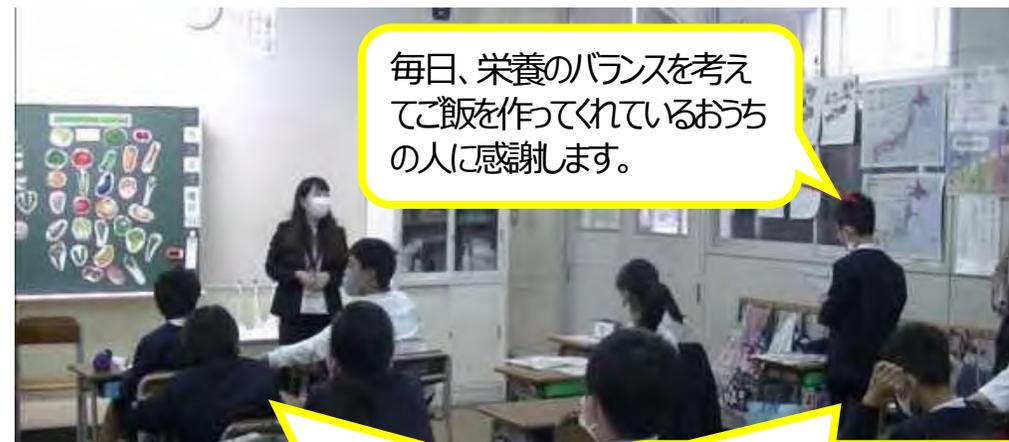
振り子が10往復する時間を計るんだね。

算数で学習した平均を使って、1往復する時間を求めるんだね。

# 3. 成果と今後について

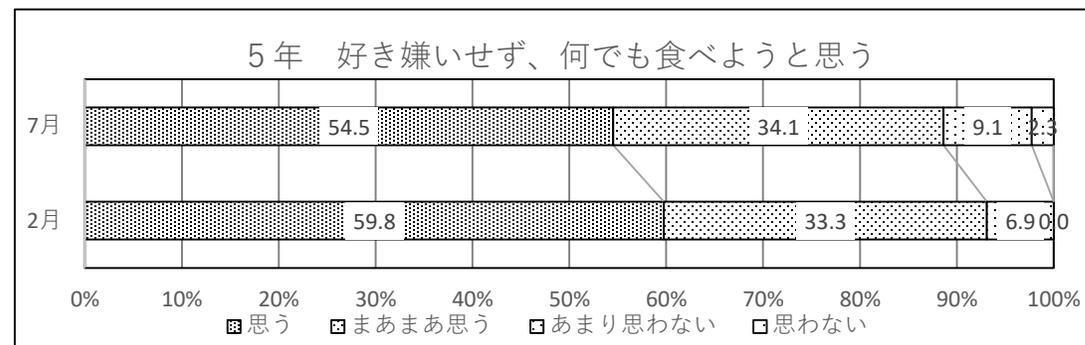
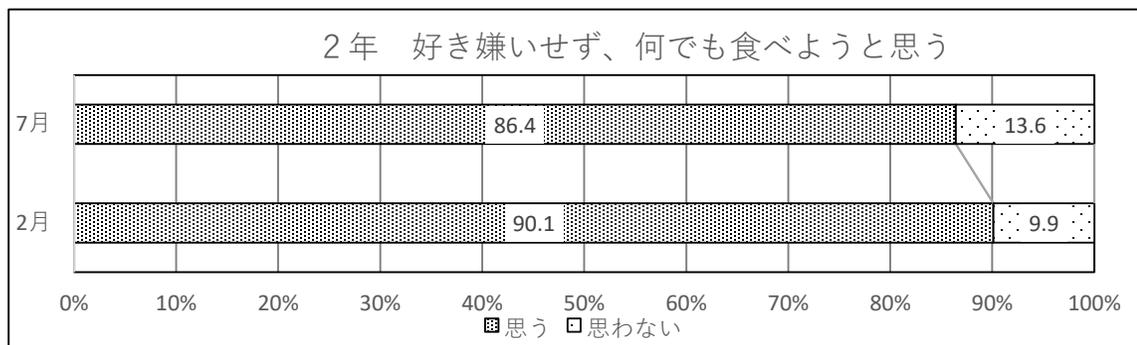
## (1) 児童の変容

- ・児童の「食」に対する意識が高まり、「食」を通して人とつながったり、今までの学びや日常生活等と結びつけて考えたりする姿が見られるようになった。
- ・アンケート結果「好き嫌いせず、何でも食べようと思う」について6学年中5学年の肯定的回答の割合が向上した。
- ・地域の方とのつながりができ、登下校中のあいさつが増えた。
- ・自分の食生活をふり返り、家の人への感謝の気持ちを持ったり、給食の献立を五大栄養素に分類しようとしていたりしている姿が見られた。(5年)



お弁当の時、毎日、ビタミンに赤、黄、緑色全てそろっていておうち人はすごいと思っています。また、五大栄養素もそろっています。これからも、五大栄養素をとってきたいです。

日常を振り返ってみると、無機質をあまり、体内に含んでいないことに気がつきました。なので、学習を通して、自ら無機質をとったり、ほかにも五大栄養素に関わる食材をできる限りバランスよく食べていきたいと改めて実感しました。



## (2) 教職員の変容

全教職員でカリマネ表を作成し、教育計画を「見える化」したことで、教職員一人ひとりが他教科や他学年との「つながり」をさらに意識することができた。このように教職員が「つながり」を意識することで、学習指導においては、発達段階に応じた指導や他教科との関わりを念頭に入れた上で児童の学びが深まるような取組みを行えるようになったことが成果であると考える。

- ・「食に関する指導」と各教科とのつながりを意識して授業改善に取り組むようになった。
- ・教員同士が「食に関する指導」を通してつながり、学校全体で成果や課題を共有し、改善につなげられるようになった。
- ・各教科においても、系統性や教科横断的な視点をもって指導計画を作成するようになった。
- ・教員同士がカリマネ表の作成や修正等を通じて積極的にコミュニケーションを図るようになり、教員同士のつながりが深くなった。

令和2年度 熊取町立西小学校 6年 カリマネ表（食育に係る教科・指導・単元について）  
学校教育目標 自ら学び、心豊かにたくましく生きる子どもの育成～一人ひとりが輝く学校

学年担任同士のコミュニケーションが増え、指導内容、方法の確認ができる。

各学期末に進捗状況を確認できる。

はじめて担任する学年でも見通しができる。

## 【教職員の感想】

その教科だけではなく、他の教科とのつながりを考えて指導することができると思う。カリマネ表を作ることで、今までよりも意識するようになった。今後は、教科のつながりなどを考えてより効果的な順番などを考えていければと思う。

学年の内容を食育でつないでみると今まで意識していなかったところの各教科・単元のつながりを知りました。子どもたちと学習する際、自分が意識していることで発問や声かけに生かせると思いました。

「カリマネ表 つながりが『見える化』作戦」を実行するために常に見えるようにしておく必要があると思います。もちろん表だけでなく、人的、物的な体制を明確にして。誰もがいつでも確認できるようにしたいです。

めざす子ども像が具体化して明確になるので、そのためにつけたい力とその力とそのつながりがわかりやすく、指導に生かせると感じた。



他教科とのつながりを意識した計画をする上で、実践例が示されていてわかりやすかった。授業、単元における始めと終わりのつながりや教科をこえたつながりを考えて授業を計画していきたい。課題（めあて）の確認やまとめの確認にも生かせるかと思います。

同じ学年内の内容で、何の学習と何の学習が関連しているかが整理はつきりされているのがすごくよい（関連図）。片方をしっかり指導していれば、もう片方が発展的課題解決的に考えることができるという利点もある。支援の方でも、自立活動の分野で社会的側面、理科的側面など、様々な視点を入れ考えていきたい。

### (3) 成果・課題と今後に向けて

本調査研究事業を推進し、「食に関する指導」を通じてカリキュラム・マネジメントに取り組んできた。これまで課題であった、それぞれの取組みが独立したものになりがちであった面が、ジグソーパズルのように教科横断的な視点で取組みをつなげて考えられるようになってきたと評価できる。これは、各学年が単元配列表カリキュラム・マネジメントの視点をもって、「見える化」したことの成果であると考えられる。また、全学年のカリマネ表を縦のつながりで意識することによってブロックを組み立てるかのようにより学年を縦断した教科縦断的な視点で考えることができた。

また、本調査研究事業を推進し、改めて本校の課題を教職員全体で共有することによって、究極の目標は学校教育目標を実現することにあるという教職員一人ひとりの意識が高まった。これは、これまで各学年が実践してきた取組みを踏襲するものの、その取組みの意義や目的、さらには実施時期を意識することによって、内容を精査したり、学年の実態に沿った内容に変えたりすることができるようになったところから評価している。

今後は、すべての児童が「ものごとをつなげて考えることができた。」「仲間と協力して、課題を解決することができた。」と実感できるよう、学校の取組みのねらいが児童に届いているのかを継続的に見取る必要がある。

また、全教職員でカリマネ表を作成し、教育計画を「見える化」したことを今後も教職員全体で取り組んでいく。

大きな大根がとれたよ！  
みんなに食べてもらいたいなあ。



葉っぱもついていて立派だね。  
それに、安い！



お買い上げありがとうございます！  
新聞にまくから少し待ってね。

# 子どもたちの資質能力の育成をめざして つながり、深める“チーム北池田”の取組み

和泉市立北池田小学校



## Why

### なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 国語科では、児童の「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する力」に課題が見られた。
- 児童の資質能力を育成するために、学校全体の授業改善を進める必要があった。



## How

### どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 学習指導要領に示されている「国語で正確に理解し、適切に表現する資質能力の育成」「言語活動を通して」に着目し、「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えを持ち、表現する」資質能力の育成のために校内研究のテーマを【単元全体を通した言語活動】と設定した。
- P D C Aサイクルの確立を通して、校内研究体制の充実を図った。
- 校内の人的資源を活用し、研究授業の時だけでなく日々の授業においても授業改善の視点に基づいた単元づくりを実施した。
- 本校の国語科の研究を活かし、他の教科でも国語科で付けた力を活かすような学習を計画した。



## Change

### どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 教員が校内研究の意義を理解し、子どもたちの姿を通して効果を実感することで、すべての学級で授業改善の視点に基づいた授業を積み重ねることができた。
- 大阪府力だめしプリントの記述問題の正答率が上がり、無解答率が下がった。
- 子どもたちの中に、国語科で付けた力を肯定的にとらえる姿が見られた。

# 子どもたちの資質能力の育成をめざしてつながり、深める“チーム北池田”の取組み

和泉市立北池田小学校

## 1. 令和元年度の取組み

- (1) 研究テーマ「『単元全体を通した言語活動』を通して、『目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えを持ち、表現する』資質能力の育成」
- (2) 取組み内容 【校内研究体制の充実（P D C Aサイクルの確立）】
- (3) 取組み内容 【校内の人的資源の活用】
- (4) 令和元年度の調査研究の結果明らかとなった成果と課題
- (5) 令和2年度に向けて

## 2. 令和2年度の取組み

- (1) 研究テーマ 「進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、豊かに表現する子どもの育成」
- (2) 取組み内容【国語科を要とした教科横断的な単元・授業の提案】
- (3) 2年間の調査研究の結果明らかとなった成果と課題
- (4) 今後の見通し

# 1. 令和元年度の取組み

(1) 研究テーマ『単元全体を通した言語活動』を通して、  
『目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えを持ち、表現する』資質能力の育成

＜研究テーマ設定までの経緯＞

学校教育目標「対話する子」に向かって、これまで様々な研究テーマのもと取組みを進めてきた。

取組みの成果もあり、定量的な評価（児童アンケート）において、「めあて・ふり返り」や「ペア・グループ交流」に関する項目において、肯定的な評価が95%以上となり、日々の授業においても定着（北池スタンダード）が見られた。

しかし、全国学力・学習状況調査を基にした定量的な評価においては、国語科、特に「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する力」に課題が見られた。交流はできるが、対話の質が高められていないという本校の課題とつながる結果となった。

## これまでの研究を生かす北池スタンダード

北池スタンダード		子どもの姿					
		反応あいうえお					
		1年	2年	3年	4年	5年	6年
話す 聞く		<p>ききかた上手のあいうえお</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>進んで話したり聞いたりしようとする</li> <li>行動したことや経験したことに基づいて、事柄の順序を考えながら話す</li> <li>話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように聞き、話の内容を捉えて感想をもつ</li> <li>互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて語をつなぐ</li> </ul>	<p>はなしかた上手のかきくけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるように話す</li> <li>必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや聞きたいことの内容を捉え、自分の考えをもつ</li> <li>目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、共通点や相違点に着目して、考えをまとめる</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど構成を考え、話す【資料を活用するなど、自分の考えが伝わるよう表現を工夫する】</li> <li>話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、考えを比較しながら聞き、自分の考えをまとめる</li> <li>互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたり深めたりする</li> </ul>	
ペア・ グループ		<p>ペア</p> <p>ペア対話を使って、進んで話したり 意見を述べたり、相談したりできる。 (話し方上手・反応あいうえおなど、基本を身につける)</p>	<p>ペア</p> <p>ペア対話を通して自分の考えを確かめ、自信を持つことができる。</p>	<p>ペア・グループ</p> <p>ペア対話やグループ対話を使って、考えの共通点や相違点に着目し、考えを広げたり、深めたりすることができる。</p>	<p>ペア・グループ</p> <p>ペア対話やグループ対話を使って、考えの共通点や相違点に着目し、考えを広げたり、まとめたりすることができる。</p>	<p>ペア・グループ</p> <p>ペア・グループ対話を使って、考えを出し合い、考えを深めたり、課題を解決したり、新しい考えを創り出すことができる。</p>	<p>ペア・グループ</p> <p>あらゆる場面で、自分の目的や意図に応じて、ペア対話やグループ対話を使って、主体的に学ぶことができる。</p>
授業形態							
ふり返り		<ul style="list-style-type: none"> <li>記号の色ぬり</li> <li>時間を見て</li> <li>気持ち記号</li> <li>付けたし文</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章表記のふりかえり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章表記のふりかえり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章表記のふりかえり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章表記のふりかえり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章表記のふりかえり</li> </ul>

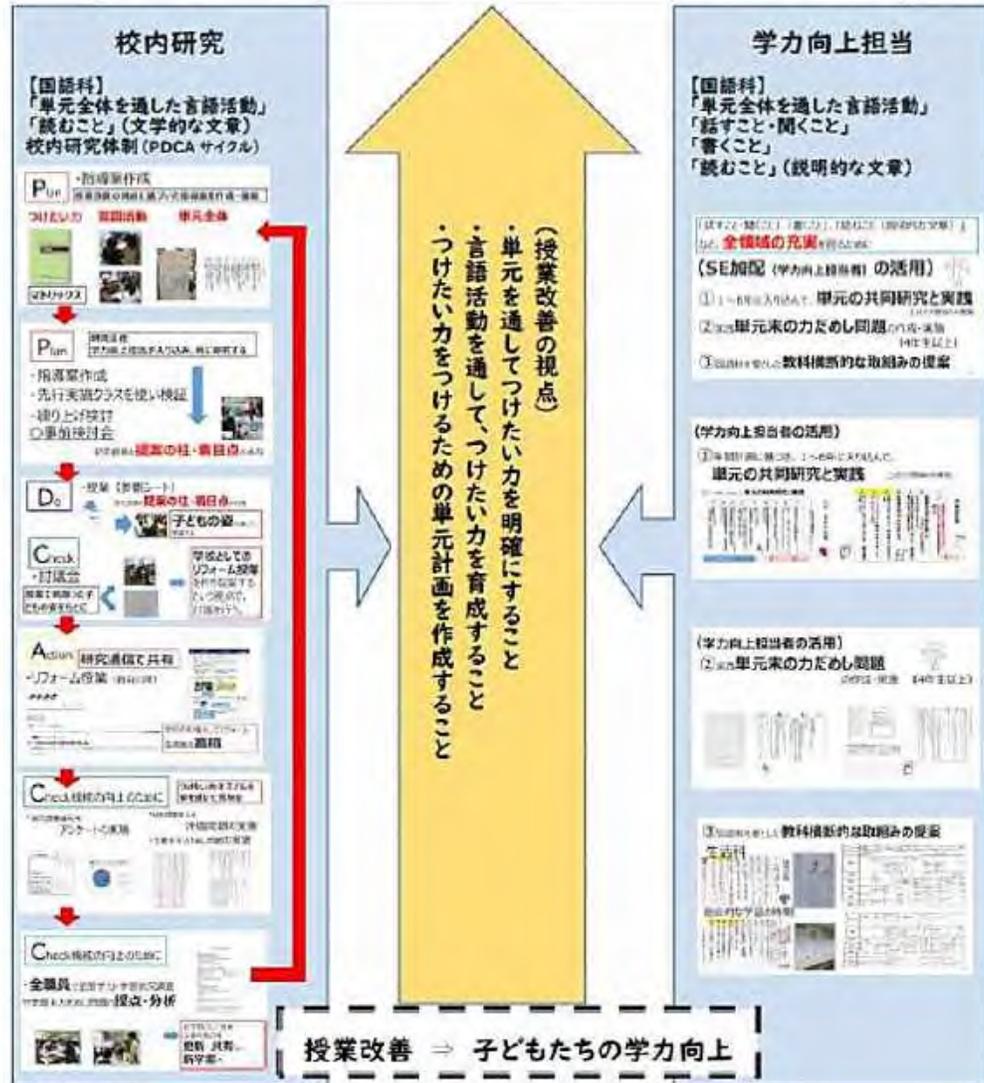
- ホワイトボードの活用
- ペア・グループの活用
- 国語辞典の活用

・めあてを明確にし先出し「なぜ(そのタイミングで、その時間で、その内容で)」  
・当該単元のゴールの姿を明確にする。子どもたちに共有する。

・困りて自由な発言を促す。「誰か助けて、一つは聞けるまでです。」  
・子どもたちの発言を聞き、適切な反応を返す。

学校教育目標 「対話する子」

「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する資質・能力」の育成



これらの結果や学習指導要領国語科の目標で示されている「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成」、「言語活動を通して」に着目し、令和元年度の本研究テーマを【単元全体を通した言語活動を通して、「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する資質・能力」の育成】と設定した。

研究テーマに向かって、本校として、国語科の授業改善の視点として

- ① 単元を通してつきたい力を明確にすること
- ② 言語活動を通して、つきたい力を育成すること
- ③ つきたい力を付けるための単元計画を作成すること

の3つを全教員で共有し、学校全体で授業改善を進めるために、

- ・校内研究体制の充実 (PDCAサイクルの確立)
- ・校内の人的資源の活用

を、取組みの柱とした。

## （２） 取組み内容 【校内研究体制の充実（PDCAサイクルの確立）】

子どもたちにめざす資質・能力を育成するために、校内研究体制の充実を図った。

特に、研究授業（全学年実施）の取組みを通して、指導案検討・事前検討・研究授業（提案授業）・研究討議・リフォーム授業というPDCAサイクルの中で、検討・検証していく体制を確立し、教員一人ひとりの授業力を高め、児童の資質能力を高めることをめざした。

Plan

### ・指導案作成

授業改善の視点に基づいた指導案を作成・提案

つきたい力

言語活動

単元全体



マトリックス



★	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	↓
1	1	1	1	1	1	1	1	1	五年 学習計画
2	2	2	2	2	2	2	2	2	1
3	3	3	3	3	3	3	3	3	2
4	4	4	4	4	4	4	4	4	3
5	5	5	5	5	5	5	5	5	4
6	6	6	6	6	6	6	6	6	5
7	7	7	7	7	7	7	7	7	6
8	8	8	8	8	8	8	8	8	7
9	9	9	9	9	9	9	9	9	8
10	10	10	10	10	10	10	10	10	9

### 【Plan】

#### ○指導案作成

P.4の3つの授業改善の視点に基づいて、指導案を作成した。とくに、つきたい力を設定する際には、新学習指導要領を根拠として、1年間を俯瞰して適切なつきたい力を設定することを大切にした。

（マトリックスシートを活用）

また、授業改善の視点の定着を図るために、研究を学年任せにせず、指導案の作成、先行実施クラスによる検証、指導案の練り上げの全てに研究主任と学力向上担当者が入り込み、学年と共に研究を進めた。

# Plan

研究主任  
学力向上担当が入り込み、共に研究する

- ・指導案作成
- ・先行実施クラスを使い検証
- ・練り上げ検討
- 事前検討会



研究授業の**提案の柱・着目点**の共有

## 【Plan】

### ○事前検討会

教員一人ひとりが指導案を読み、事前検討会に臨むようにした。検討会で、お互いに質問を重ねることにより、単元全体のつながりや本時のねらいについて共通理解を深めることができ、明確な着目点やめあてをもち、研究授業を参観することができた。

# Do

・授業（参観シート）  
研究授業の**提案の柱・着目点**の共有

参観者様コメントカード

	先生が先生の授業について、 児童の反応や授業を挙げて褒めてくれた 点に感銘	授業について
	先生が先生に授業のねらいを 伝えてくれたことに感銘	コメント

→  **子どもの姿**を通して、  
検証する

## 【Do】

### ○研究授業

参観シートを活用することにより、研究授業の提案の柱や着目点を、全教員で共有し、同じ視点で子どもの姿を見取ることができた。



## 【Check】

### ○研究討議会

討議会が、全教員にとって自分事となるように、ゴールを「北池田小学校として、よりよいリフォーム授業を作ること」とし、全教員で見取った子どもの姿を基に討議してリフォーム授業案を作成した。

### ○Check機能充実のために

- ・研究授業単元末児童アンケート、評価問題の作成・実施。(4年生以上)
- ・全教員で全国学力・学習状況調査や学期末力だめし問題(4年生以上)の採点、分析。

を行った。上記の取組みにより、定性的・定量的な評価から、子どもたちの姿を通して取組みを即座にふり返し、全教員が学期ごとに授業改善の視点を更新・共有した。

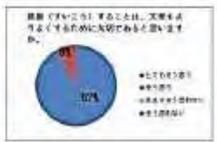
## Check機能の向上のために

## つきたい力を子どもの姿を通して見取る

・研究授業単元末  
アンケートの作成・実施

・研究授業単元末  
評価問題の作成・実施

・市作成力だめし問題の実施



# Action

## 研究通信で共有

### ・リフォーム授業（自由公開）

研修通信

2年生から

3組（リフォーム授業）

・センテンスカードを使った。黒板のセンテンスカードはながった方がよかった。自分の言葉で語る事ができていた。

⇒ つきたい力とのつながりを常に考える。

・時間配分についてはセンテンスカードを個人で並ぶようにしたので、ふりかえりを書く事ができた。



## 【Action】

### ○リフォーム授業の実施

リフォーム授業案を使って授業公開を行い、自由に参観できるようにした。リフォーム授業について、研究通信で成果と課題を発信し、全教員で共有するとともに、リフォームした単元指導案は、データとして蓄積、活用できるようにしている。

以上のような流れで、PDCAサイクルを短い期間で回し続けるように取り組んだ。

○ P(plan)の段階で、子どもたちにつきたい力、そのための手立て等をじっくり話し合えたので、単元に関わる教員がお互いに共通理解することができた。そのため、先行クラスの授業を同じ視点で見て、次の手立てを考えることができた。

○ 研究討議会では、その視点をもとに、他の先生方からの意見をもらったので、見方・考え方が広がり、リフォーム授業につなげることができた。

○ 自分にはない教材研究や教材の読み方を他の先生にあたえてもらったことや、研究討議会の際に「自分ならこうする」というリフォームの視点で他の先生が話してくれたことが良かったです。子どもたち自身が「教科書を学ぶ」より「教科書で学ぶ」ことをわかっていると感じた。

○ 単元末問題やアンケートで成果や課題が把握できた。

○ リフォーム授業を考え、実践することで子どもたちへの課題設定の難易度もふり返られるようになった。そのため、どの授業においても難しすぎたり簡単すぎるようなことが減ってきたように思う。

○ 授業で意欲的に取り組む児童の姿をよくみられるようになった。

（教員対象 校内研修のふりかえりより）

### (3) 取組み内容【校内の人的資源の活用】

取組みを進めるにあたって、校内研究時だけでなく日々の授業においても、授業改善の3つの視点（P.4）に基づいた単元づくりができるようにすることが大切であると考え、学力向上担当者が中心となり、次のような取組みを進めた。

## (学力向上担当者の活用)

① 年間計画に基づき、1～6年に入り込んで、校内研究で扱う「読むこと（文学的な文章）」以外の3領域のみ実施



### ○単元の共同研究と実践

4月に作成した年間計画に基づき、学力向上担当者がすべての学年に入り込み、それぞれの学年教員と単元の共同研究、授業公開を行った。

1学期は、学力向上担当者がT1として、授業改善の視点を取り入れた授業を提案・公開し、2学期からは、担任がT1、学力向上担当者がT2となる機会も取り入れながら、授業改善を進めた。

#### ① 1～6年に入り込んで、単元の共同研究と実践

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	テーマ 「めざせ！討論の達人！」 「読むこと」以外の3領域を単元で実践する。
「読むこと」以外の3領域の単元を「めざせ！討論の達人」									

#### 六年 学習の計画



「話すこと・聞くこと」

⑥	⑤	④	③	②	①	テーマ 「来年度の五年生のために、 「書くこと」「読むこと」
「書くこと」の単元を「来年度の五年生のために」	「書くこと」の単元を「来年度の五年生のために」	「書くこと」の単元を「来年度の五年生のために」	「書くこと」の単元を「来年度の五年生のために」	「書くこと」の単元を「来年度の五年生のために」	「書くこと」の単元を「来年度の五年生のために」	

#### 学習の計画



「書くこと」

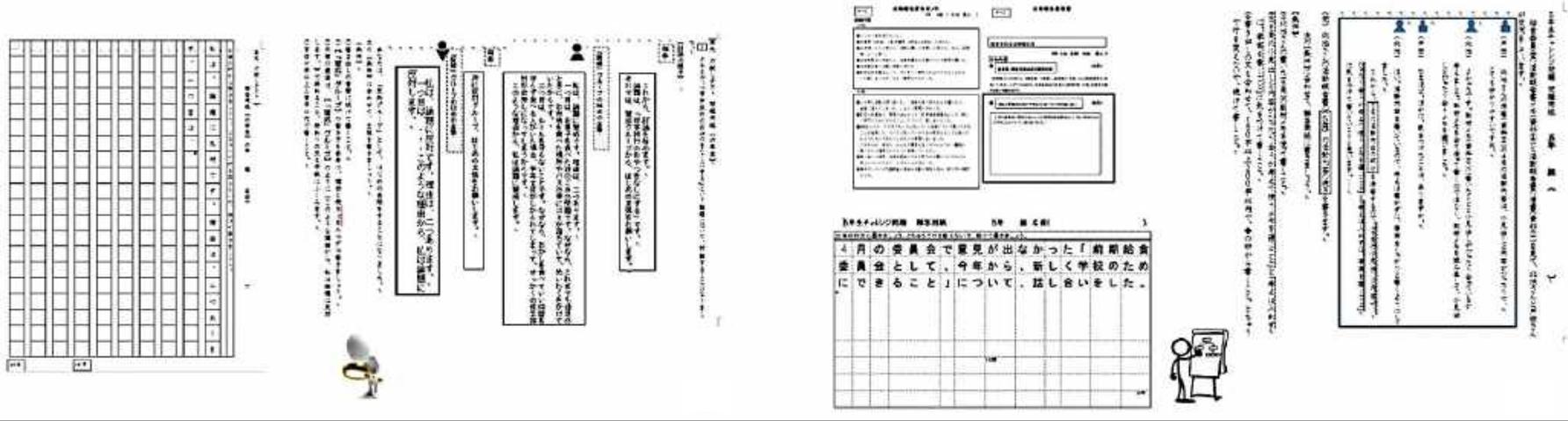
# (学力向上担当者の活用)



## ②実践 単元末の力だめし問題・アンケート の作成・実施 (4年生以上)

### ○単元末力だめし問題・アンケート実施

短い期間で、効果を定量的・定性的に見取り検証する経験を積み、教員一人ひとりの子どもたちの姿を見取る力の向上をめざし、共同研究した単元（4年生以上）で、学力向上担当者が学年教員と協力して単元末力だめし問題・アンケートを作成し実施した。



4年生アンケート



6年生アンケート



5年生問題用紙



5年生解答用紙

# ○国語科を要とした教科横断的な取組みの提案

国語科を要とした教科横断的な視点を広げられるよう、単元を提案・公開した。また、グランドデザインの作成、見直しを図った。

## ③国語科を要とした教科横断的な取組みの提案

### 生活科

**学習の計画**

テーマ「かんまつ色人に なろう！」  
おうちの人が、ほろこくどうし。

- かんまつ色人になろう！

「おうちの人が、ほろこくどうし。」



### 総合的な学習の時間

**学習の計画**

テーマ「1年生の「かんまつ色人」になろう！」  
1年生は、かんまつ色人になろう！

- かんまつ色人になろう！

「1年生」 「かんまつ色人」



行事(特活)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
総合	環境学習	運動学習							
外国語	英語学習								
国語	国語学習								
算数	算数学習								
社会	社会学習								
理科	理科学習								

行事(特活)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
総合	総合学習								
外国語	英語学習								
国語	国語学習								
算数	算数学習								
社会	社会学習								
理科	理科学習								

＜グランドデザインの作成・見直しを通して＞

・グランドデザインを作ることとは一年間の見通しだけでなく、教科と教科のつながりを“もっと見る”ために大切だと思います。

・振り返ってみて、もっと単元をつなげられたと思うところがたくさん見つけられました。4月はとても忙しいですが、カリマネの引継ぎの時間もしっかりと取るように心がけたいです。



## (4) 令和元年度の調査研究の結果明らかとなった成果と課題

### 【成果】

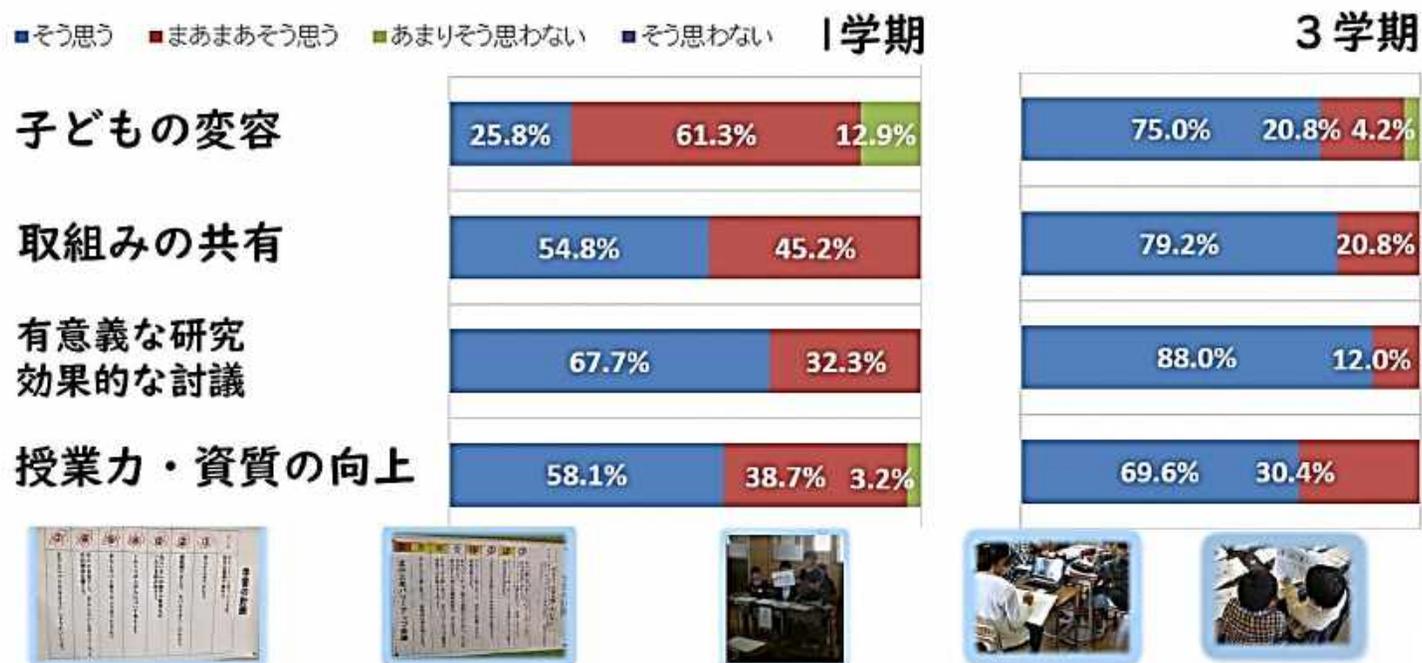
○【校内研究体制の充実】という一つの柱ではなく、【校内の人的資源の活用】も合わせた2つの柱で取組みを進めた結果、校内に広く速く授業改善の視点が浸透した。全教員が同じベクトルで取組み、日々の授業を積み重ねることで、子どもたちの資質・能力の向上が見られた。

#### 「大阪府力だめしプリント 記述問題（学校平均）」

	H30		H31
正答率	30%	⇒	39.7%
無解答率	17.3%	⇒	5.1%

○右図のとおり、教員が校内研究の意義を理解し、子どもたちの姿を通して効果を実感することで、すべての学級で授業改善の視点に基づいた授業を積み重ねることができ、子どもたちの資質・能力の向上につなげることができた。

### 教員アンケート どの学年でも、どのクラスでも



## 【課題】

●「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えをもち、表現する力」の向上は見られたが、日々の子どもたちの姿や定量的な評価（全国学力・学習状況調査等）から、「話すこと・聞くこと」の領域に課題が見られたり、「知識・技能」に課題が見られた。

●児童アンケートの肯定的回答が、

・「国語の授業でついた力が、自分の考えを持つことやうまく伝えるために役立っている」（87%）

・「国語は好きですか」（55%）

という結果から、子どもたちの中に、国語科で付けた力を肯定的にとらえる姿がある一方で、国語科に対して主体的に取り組む姿に課題が見られた。

●令和元年度の実践事例は、データベースに保管し、学校としての財産となっている。

今後、さらに活用しやすいようにするために、保管の仕方や更新の仕方など、より使いやすい形を検討する必要がある。

## (5) 令和2年度に向けて

令和元年度の研究をふり返し、次年度に繋げていくために以下の点について取組みを行った。

### ○次年度の指導案モデルの検討・作成

質の高い言語活動を実現するために、令和元年度後半から指導案に、次のような項目を記載した。  
(次ページに続く)

#### ・並行読書材について

どのような視点で並行読書材を選定したのか、並行読書材の特徴などを明記する。

#### ・言語活動モデル

単元の言語活動をより具体的にイメージしやすいように、授業で児童に提示する言語活動モデルを指導案にも記載する。



言語活動の内容が伝わるように具体的に示す。

(例)

- ・どこで、どのようなことを表現させているのか
- ・どこで、どんな力を見取るのか など

### 並行読書材について

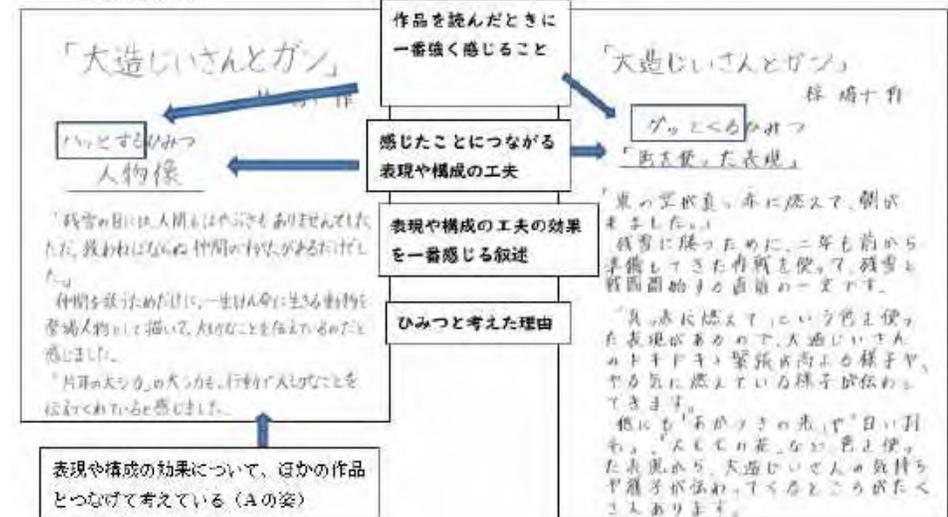
選書の着目ポイントや言語活動に関わる重点を示している。

○並行読書材

題名	読んだときに感じるこ	作品の特徴や児童が捉えそうな表現や構成の工夫
バンドのボンボン 青空バーベキュー	ウキウキ、わくわく	言葉のリズムが良く 楽しい雰囲気が伝わる
バンドのボンボン 夜空のスターチャウダー	ウキウキ、わくわく	
車夫	元気になる、すっきり	短編集、構成の工夫(結末)
なんにもしない一日	ほっこり、ほのぼの	2人の登場人物の日常の出来事を描いた作品 人物の関係の描かれ方がほのぼのする

### 言語活動モデル

○言語活動モデル





## ○次年度の教科横断的な取組みに向けてグランドデザインのふり返り・見直し

令和元年度最後の職員研修の際にグランドデザインのふり返りを以下の2つの視点で行った。

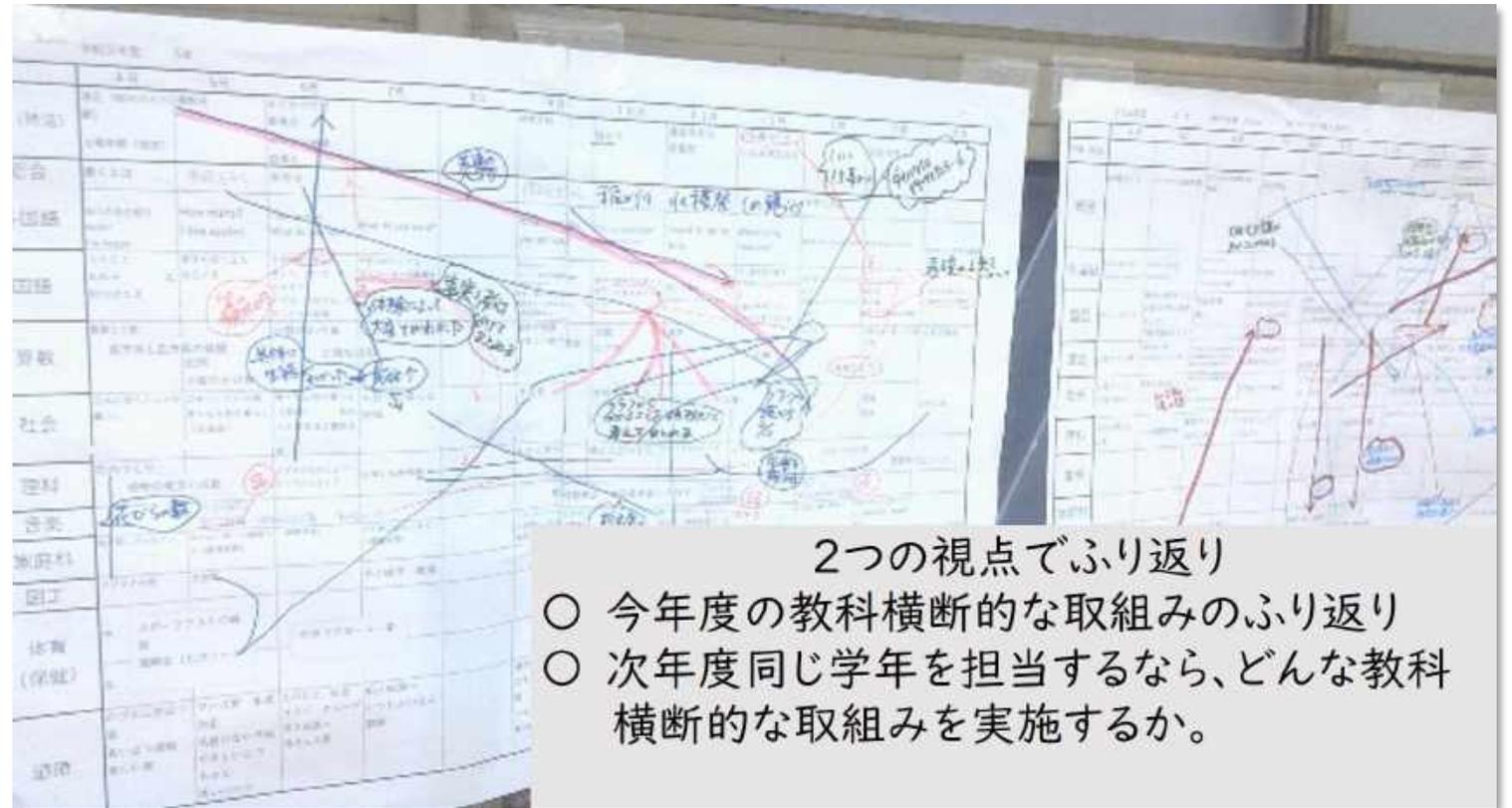
### ・今年度の教科横断的な取組みのふり返り

### ・次年度も同じ学年を担当するとしたらどのような教科横断的な取組みを実施するか

この視点でグランドデザインを見直し、次年度に引き継ぐために職員室内に掲示した。

その際、グランドデザインの見直しを行った各学年の教員の名前を模造紙に明記しておくことで、新年度に、昨年度その学年を担当した教員に取組み内容を質問しやすくなるように工夫した。

これらの取組みを令和元年度のうちにしておくことで、令和2年度の校内研究を見通すことができた。



### 2つの視点でふり返り

- 今年度の教科横断的な取組みのふり返り
- 次年度同じ学年を担当するなら、どんな教科横断的な取組みを実施するか。

## ○教科横断的な学習の指導案モデルの検討・作成

令和2年度は本校の国語科の研究を活かし、他の教科でも国語科で付けた力を活かすような教科横断的な学習の提案ができるように、令和元年度のうちに指導案のモデルを検討・作成した。

学習指導案(例)

和泉市立北池田小学校  
指導者 ○○ ○○

○教科 ○○科

○【単元名】「教材名」【 】「○○」

○単元目標

- ～【学びに向かう力等】
- ～【思・判・表】
- ～【知・技】

○国語科とのつながり

国語科ではなく、その教科の目標

国語科ではなく、その教科の評価基準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
～【○○】	～【○○】	～【○○】

国語科を要とした教科横断的な学習の指導案モデルを作成

○本時 2次 第3時 (5/11) 単元の中で、一番おすすめの時間

～する学習

○本時の目標  
～【 】

○本時の評価基準  
～【 】

時間	主な学習活動	指導上の留意点	【観点】評価規準 (評価方法)
5	単元のゴールと今日のめあてを確認する。 自分の選んだ作品の○○のひみつを紹介しよう	・何のための一時間なのか、本日のゴールのつながりを意識させよう。 単元のゴールでは何をしますか？	
5		めあて	
10			
15			
10			

○成果

○課題

・成果と課題は、実施した学期末の全体研で報告予定。  
・復習のふり返し(成果や課題の根拠となる子どもの姿(ふり返しや成果物など)があれば、添付をお願いします)  
・指導案の保存先に、ワークシートなど一緒に保存していたけるとありがたいです。

## 2. 令和2年度の取組み

### (1) 研究テーマ「進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、豊かに表現する子どもの育成」

#### 研究テーマ設定の経緯

前述のとおり、令和元年度の校内研究のP D C Aサイクルの充実や校内の人的資源の活用により「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えを持ち、表現する資質・能力」の育成には一定の成果が見られた。

その一方で「知識・技能」の定着や豊かに表現する力（表現の質）については課題が見られたことから、令和2年度の研究テーマを上記のように定めた。また、昨年度の取組みを振り返る中で、国語科で付けた力を活かし、広げる機会を設定することにより、児童に国語科の力を定着させることが大切であるという課題も見えてきた。

そこで、今年度は、

- ① 校内研究授業のP D C Aサイクルの充実による授業改善
- ② 国語を要とした教科横断的な取組み・単元の提案

という2本の柱を取組みの中心とし、研究テーマ「進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、豊かに表現する子どもの育成」の実現をめざすこととした。（次頁参照）

# 令和2年度 校内研究テーマ

## 【国語科】

進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、  
豊かに表現する子ども  
の育成をめざして

今年度は、この両輪で挑戦！！

### （国語科）「単元全体を通した言語活動」

○つけたいカを見極めよう

○ねらいを実現するための言語活動を工夫しよう

○「大好き」「心に響く」などの意識（主体的な姿）を重視して、  
子どもたちが目的をもって取り組む学習過程を工夫しよう

### カリマネ（国語科を要とした教科横断的な取組み）

①国語科でつけた力を他の学習（や生活）で活用することで、【言葉の力】がより深く、汎用的に定着する（だろう。）

②国語科でつけた力を活用することで、言語活動の充実につながり、それぞれの教科特有の力のよりよい育成につながる（だろう）  
これまで先生方が自然に行っていたことを見える化

これまでの北池田の積み重ね

### どの学年でも、どのクラスでも



## ①校内研究授業のPDCAサイクルの充実による授業改善

1つめの柱の「校内研究授業のPDCAサイクルの充実による授業改善」に関しては、昨年度に引き続き、国語科の単元全体を通した言語活動を意識した授業の提案を行った。具体的には、昨年度の研究の課題も踏まえ、

- ・子どもたちの主体的な姿を重視して、子どもたちが目的を持って取り組む学習過程の工夫
- ・「知識・技能」の定着 ・対話の質の向上 に重点を置いた単元（授業）の提案を各学年で行うこととした。

また、昨年度に効果的であった、学年の担任団・学力向上担当者の共同研究体制や子どもたちの姿を見取り、授業改善の視点を共有するための全国学力・学習状況調査や学期末力だめし問題（4年生以上）の全教員による採点分析も継続して実施した。

## ②国語を要とした教科横断的な取組み・単元の提案

2つめの柱の「教科横断的な学習の提案」に関しては、国語科を要とした教科横断的な学習（単元）の提案の際に

- ・国語科で付けた力を活用する場を設定することで、付けた力の定着をはかる
- ・国語科で付けた力を活用することにより、他教科でつきたい力をより効果的に付ける

ことをねらいとして、各学年ごとに単元計画を立てることとした。



全国学力・学習状況調査の採点・分析を全職員で行いました。

## (2) 取組み内容【国語科を要とした教科横断的な単元・授業の提案】

### ○教職員研修

令和2年度に入り、教職員も新たなメンバーでスタートした。昨年度の取組みをさらに深めるためにも全教職員でカリキュラム・マネジメントの意義をもう一度確認し、取組みを進めていく必要があると考えた。そこで、大阪教育大学教職大学院の田村知子先生をお招きし、カリキュラム・マネジメント研修を実施した。

研修ではカリキュラム・マネジメントの概要、意義に加えて教科横断的な学習の実践事例を紹介していただいた。また、4月当初に新たに作成した今年度の各学年のグランドデザインを元に、つけたい力（資質能力）に着目して単元間のつながりを見直す機会にもなった。研修を通して、教科間のつながりを再確認し、それをもとに各学年で教科横断的な学習に取り組んでいる。



## ○3年生の取組み〈社会科 + 国語科 の学習の提案〉

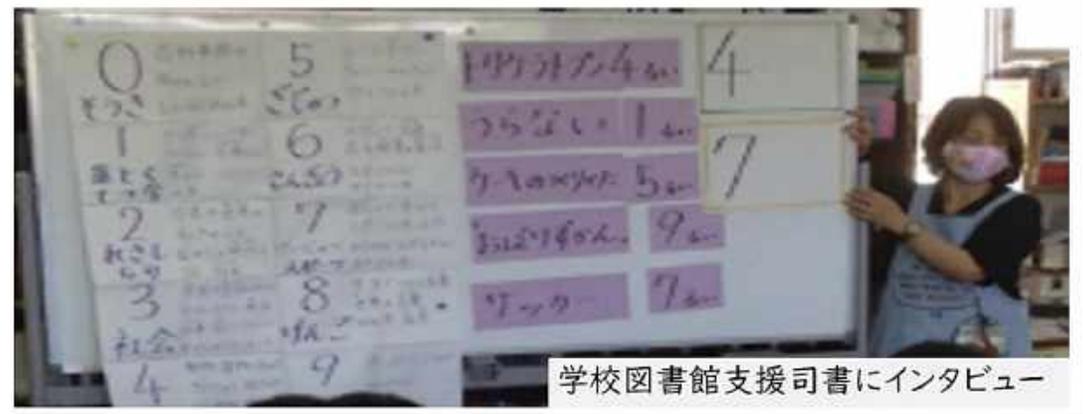
3年生では市内めぐりなど総合的な学習の時間も含めて、聞き取ったり調べたりしたことをメモし、考えたことをレポートの形式でまとめて報告する機会が多い。

そこで国語科の「図書館へ行こう」「メモをとりながら聞こう」「調べて書こう、わたしのレポート」の3つの単元を別々に行うのではなく、3つの単元をつなげて「インタビュー名人になって、一年生にわかりやすい図書だよりを書こう」という単元計画に再構成し「聞き取り→書く体験」という流れで学習することとした。（詳細は次ページ参照）



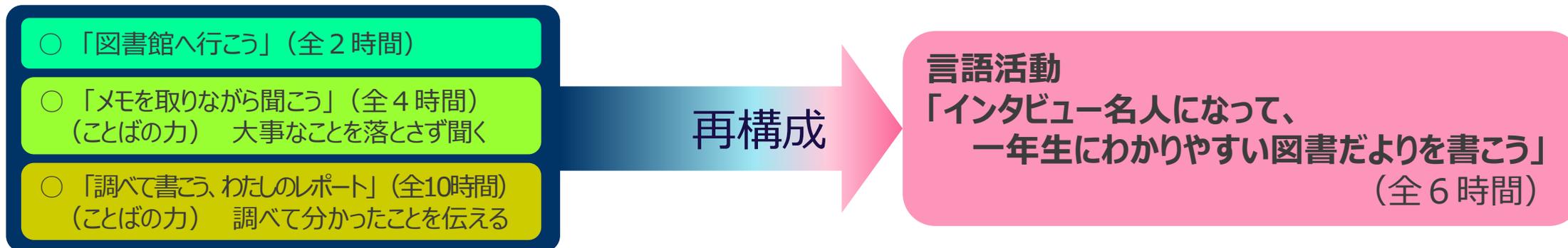
3年生の取組み  
国語科でインタビューメモ名人をめざして学習しました。

ゴール	⑤	④	③	②	①	テーマ	学習けいかく
「一年生に くばろう」 図書館だよりを	学習して みについた ふりかえろう 力を	④ 一年生に わかりやすい 図書館だよりを かんせい させよう	③ 一年生に わかりやすい 図書館だよりを 書こう	② インタビューメモ名人に なろう	① 池田先生お助け大作せんや インタビューメモ名人について 知ろう	「インタビューメモ名人になって、 一年生にわかりやすい図書館だよりを 書こう」	「一年生に わかりやすい 図書館だよりを 書こう」



学校図書館支援司書にインタビュー

## 国語科の3つの単元の再構成について



### 【再構成のねらい】

#### ①教科横断的に取り組むことで生まれる他教科の充実や国語科の定着・深化

⇒「（目的をもった）聞き取り」から「書く（まとめる）」の一連の思考の流れを体験出来るようにした。

国語科でつけたインタビューメモの力・メモから自分の考えをまとめる力を活用して他教科（社会や総合）の活動のスムーズ化・充実を図る。

#### ②人的資源の活用による国語科の言語活動の魅力の向上

⇒国語科において、つきたい力をつけるために言語活動の魅力は重要な要素の一つであり、特に言語活動における相手意識や目的意識が重要であるため、本単元では

【相手】・・・図書館を利用したことがない1年生に 【目的】・・・図書だよりを書いて、図書館のきまりを伝えること。

と設定することで、子どもたちが主体的に学びに向かう姿につながった。また、学校図書館支援司書や栄養教諭など様々な先生方に協力してもらい、校外に出ることなく国語科の単元の中で実際にインタビューをすることで、子どもたちのイメージや定着がより深まった。インタビューの練習もCDではなく栄養教諭など様々な先生方に協力してもらうことで、子どもたちが主体的に学びに向かう姿につながった。

#### ③3つの単元をつないで行うことで時間を生み出す

⇒3つの単元を別々に行うのではなく、つないで単元を構成することで、題材の設定や情報収集の時間をスリム化することができ、時間の精選を図ることができた。

学習の中で、子どもたちは明確な視点を持ち、必要なことを記録したり、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを中心をとらえて自分の考えを持つことができるようになってきた。また、コロナ禍において校外に出てインタビューをすることが厳しい時期ではあったが、栄養教諭や学校図書館支援司書という校内の人的資源を活用することで、校外に出ることなく校内でインタビューや聞き取りメモを書いたりすることができ、子どもたちのイメージや、力の定着が深まった。



上記のような国語科で付けた力を活用する場面として、2学期の社会科の小単元「店で働く人々の仕事」でお店の人にインタビューし、メモする力を使う場面を設定した。このように、国語科で付けた力を生かすことで社会科の学習を効果的に行えるように単元計画を立て、学習を進めている。



国語科で付けた「インタビューメモ」を取る力を使って地域のスーパーで聞き取り活動をしました。

## ○ 5年生の取組み〈総合的な学習の時間 + 国語科 の学習の提案〉

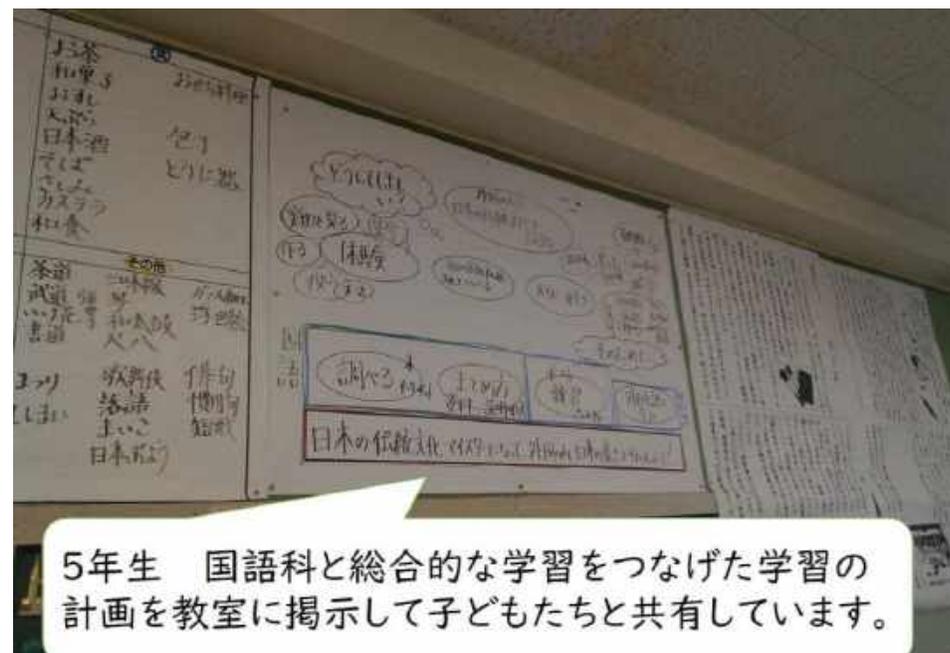
5年生では総合的な学習「日本の伝統文化マイスターになって、外国の人に日本の良さを伝えよう！」という単元を計画し、国語科の学習と結び付けて学習を進めてきた。

総合的な学習の時間では、日本の伝統文化の良さを知り、近隣の大学の留学生に、日本の良さを伝えるという目的を持って学習を進めた。総合的な学習に取り組む中で、子どもたちが、日本の良さを伝えるために自分が伝えたいことを詳しく調べたり、伝えたいことをより伝わるように書いたりする方法を学ぶ必要があることに気付いた。

そこで国語科の単元「和の文化について調べよう」の学習も同時並行で進め、「和の文化について調べよう」の単元で子どもたちが身に付ける「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」や「目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりする」力を、総合的な学習の時間での情報収集やリーフレット作りに生かした。

今回の学習では、総合的な学習の時間において、児童は自分が調べた日本の伝統文化を伝える相手は外国からの留学生という相手意識を持っている。そのため、日本語でわかりやすいリーフレットを作成した後に、外国語を使って表現する必要性を感じていたので、国語科・総合的な学習の時間での取組みを踏まえ、外国語科と連携し、外国語の学習の充実を図った。

教科横断的な学習の単元計画作成においては、学力向上担当者が、要となる国語の授業作りの視点から学年の教員と共同で研究を行ったり、学校図書館支援司書や栄養教諭と連携したり、専科教科の担当者が学年の担任団とともに研究をするなど、教職員間のつながりを感じながら取組みを進めてきた。



### (3) 2年間の調査研究の結果明らかとなった成果と課題

#### 【成果】

##### ○教員の意識の高まり

全教員が校内研究の意義を理解し、子どもたちの姿から効果を実感したことにより、全教員が校内研究の取組みを自分事と捉えることができた結果、子どもたちの資質・能力の向上や意識の変容に結びついた。

##### ○児童の資質・能力の向上

PDCAサイクルを回し、校内研究体制の充実を図った結果、子どもたちの資質・能力が向上した。

##### ○児童の意識の変容

全教員で国語科の授業改善の視点を大切にしながら校内研究を進めていく中で、子どもたちの国語科に対して主体的に取り組む姿にも変容が見られた。

##### ●教員アンケートの肯定的回答の割合の変化

「対話を通して考え、豊かに学ぶ子」をめざし、授業改善を進め、子どもの変容が見られた

	R1.6月	R1.3月	R2.3月
肯定的回答	87.1%	⇒ 95.8%	⇒ 100%

##### ●「大阪府力だめしプリント 記述問題（学校平均）」の正答率の変化

	H30 (取組み前)	R1 (取組み1年め)	R2 (取組み2年め)
正答率	30%	⇒ 39.7%	= 54.3%

##### ●児童アンケートの肯定的回答の割合の変化

	R1.6月	R1.3月	R2.3月
「国語は好きですか」	54%	⇒ 55%	⇒ 65%
「授業で、うまく伝わるように工夫して自分の考えを書いたり、話したりしている。」	78%	⇒ 68%	⇒ 83%

## 【課題】

### ○国語科を要とした教科等横断的な学習のさらなる充実

令和元年度の実践を振り返る中で、国語科で付けた力を活かす機会を設定することにより、児童に国語科の力を定着させる必要性を感じたため、令和2年度は次の2点をねらいとして、国語科を要とした教科等横断的な学習の提案を各学年から行った。

- ① 国語科で付けた力を活用する場を設定することで、付けた力の定着をはかる。
- ② 国語科で付けた力を活用することにより、他教科で付けた力をより効果的に付ける。

取組みの結果、

- 児童アンケート「国語の授業でつけた力が、自分の考えをもつことやうまく伝えるために役立っている。」の肯定的回答が  
R2年度1学期末 80% ➡ R2年度3学期末 83%  
と増加したことから、取組みに子どもの実感を伴っていることがわかり、①については一定の効果が見られたといえる。

しかし、国語科で付けた力を他教科で活用させるような授業作りの提案をするという第1歩は踏み出せたが、②については検証が不十分であった。今後は、PDCAサイクルを回しながら、国語科を要とした教科横断的な学習の提案を続け、さらに取組みを充実させていく。

## (4) 今後の見通し

### ○校内研究のPDCAサイクルの充実による授業改善の取組みについて

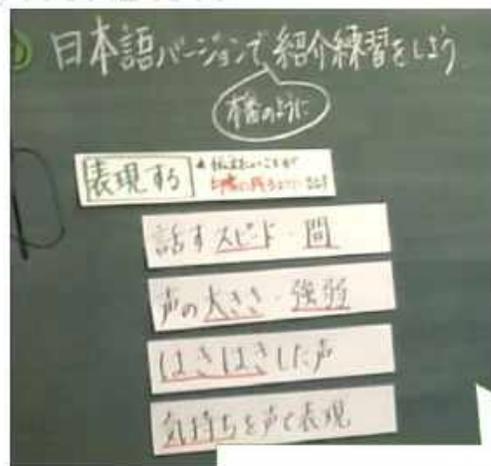
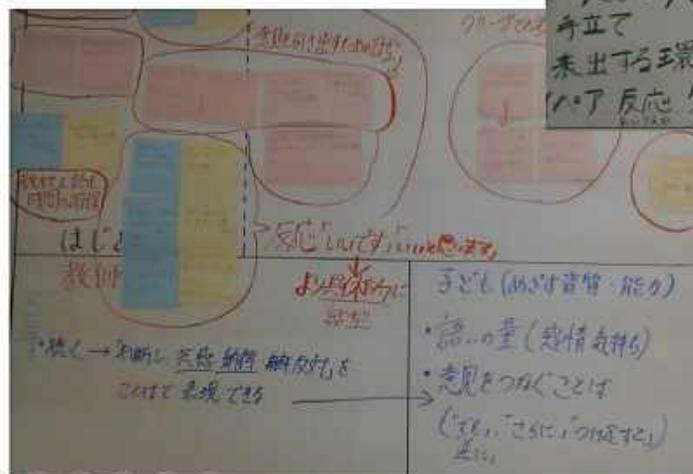
今年度の校内研究テーマに向けて、研究授業の準備を進めているが、コロナ禍において研究授業の参観の仕方を検討し、研究授業を記録した動画を少人数の学年グループに分かれて視聴することにした。初めての試みだが、動画で授業をみることによって、子どもたちの対話の様子を正確にとらえることが出来るという利点を生かし、記録した子どもの対話を分析することにより、子どもの対話の質を高めていきたい。

### ○教科等横断的な学習の提案に関する取組みについて

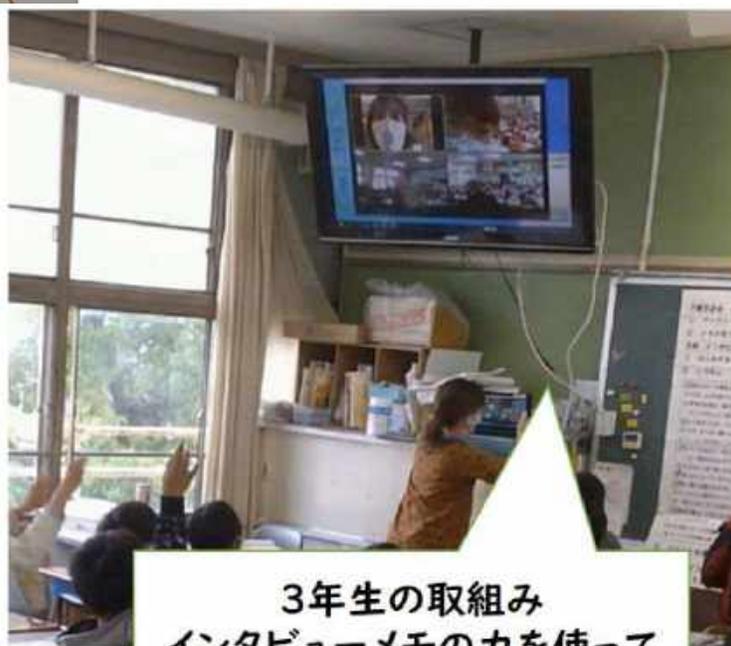
前ページの②の点に関して「何を、どのように見取るのか」という視点を明らかにし、資質・能力を育成していくことと同時に、子どもたちも教員も「やってみたい」「挑戦してみよう」という主体的な姿が生み出せるような授業づくりに挑戦していきたい。今後も、各学期に実施する児童アンケートや、国語科力だめしテストの結果から、教科等横断的な学習の効果を検証していく。

対話の質の向上をめざして

子どもたちの対話の姿を見取り  
これからの取組みを検討



5年生の取組み  
国語科でつけた力を生かした  
総合的な学習



3年生の取組み  
インタビューメモの力を使って  
実際にZoomインタビュー

教科横断的な学習の提案を各学年で

# 聴き合い、学び合うことをベースに、 資質・能力を育む

和泉市立信太小学校



## Why なぜ取り組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 児童の語彙が少なく、思考を適切に伝え合うなどの表現力に課題があった。
- 学校全体で、学び合いに焦点を当てて研修を進めてきたが、客観的な根拠が少なかった。

## How どのように取り組みを進めたか（取り組みの概要）

- 「聴き合う・学び合う」関係性を授業でつくることをめざし、児童が「聴きたい」「考えたい」と思える課題設定を工夫した。
- 学習指導要領に基づき、既習事項を俯瞰しながら、単元全体を通してつきたい力を設定した。
- 評価テスト・アンケートを実施し、根拠に基づく成果と課題の把握に努めた。

## Change どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- ペア・グループで友だちの話を聴き、自分の考えを形成する姿が見られた。
- 図や表現するための言葉を用いて、自分の考えを表現する児童が増えてきた。
- 既習事項や他の単元とのつながりを考え、つきたい力に立ち戻りながら教材を研究するようになった。
- 保護者から、「児童の対話で授業をつくる良さ」「自分の考えを表現することの大切さ」に関する肯定的な声を聞くようになった。



# 聴き合い、学び合うことをベースに、資質・能力を育む

和泉市立信太小学校

## 1. 研究授業を行う際のPDCAサイクルの構築 令和元年度の実践

- (1) PDCAサイクル(Plan)
- (2) PDCAサイクル(Do)
- (3) PDCAサイクル (Check)
- (4) PDCAサイクル (Action)

## 2. 研究授業を行う際のPDCAサイクルの構築 令和2年度の実践

- (1) PDCAサイクル(Plan)
- (2) PDCAサイクル(Do)
- (3) 単元のPDCAサイクル (6年生 分数のかけ算・わり算)
- (4) まとめ・今後の見通し

# 1. 研究授業を行う際のPDCAサイクルの構築 令和元年度の取組み

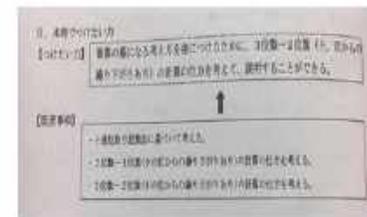
## (1) PDCAサイクル(Plan)

本校では、子ども一人ひとりの学びを保障するために、「だれも孤立させない」「だれも見捨てない」を理念としている。全教員が、ペアやグループで聴き合い、学び合う、対話的な学びを基盤とする、わからないことを自分からたずねたり、わからないことに教員も児童も温かく寄り添ったりする授業づくりを行っている。子どもたちが夢中になって聴き合い、学び合うための「課題設定の工夫」にもこだわり、子どもたちが自分事として切実感を持って取り組める課題とはどのようなものなのかということについて研修を重ねてきた。

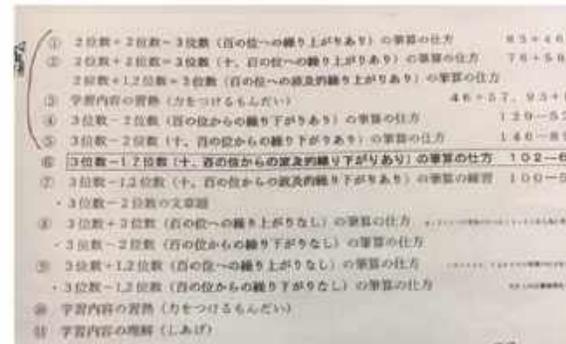
令和元年度は、学習の基盤となる資質・能力を「聴き合う力」ととらえ、相手の思いを受けとめる「聴く」力、自分の思いを語ることのできる「伝える」力を備えたコミュニケーション力を育成するため、研究主題を「聴き合い！響き合い！育ち合い！～豊かに学び合う教室をめざして～」と設定した。「子どもたちに学びをもたらす授業」を実現するために、日々の授業を相互に参観するとともに、

年間6回の研究授業（大研）と一人1回の公開授業（小研）を行い、外部講師の助言も得ながら、PDCAサイクルを機能させることにより、授業の改善を図ることとした。

### Plan 指導案の作成



学習指導要領を根拠に「つきたい力」を明確にする



単元を通して「つきたい力」を付けていくための系統性



既習事項とのつながりを意識する。

Planとして、

事前に指導案を授業者、学年、研修主任が参加し、検討することとした。その際、新学習指導要領を根拠に、単元を通して子どもにつけたい力をつけていくための系統立てを行うとともに、単元を通して子どもにつけたい力を身につけさせるために、毎時間子どもに「つけたい力」を明確にし、既習事項とのつながりを意識しながら、教材研究、教材解釈を行うこととした。

子どもたちが主体的に聴き合えるような課題を設定するとともに、どの場面で子どもが聴き合い、学び合う機会を作るか、また、課題を通して子どもに学ばせたいことを明確にするようにした。

## Plan 豊かに学び合う教室を目ざして

- ・ 子どもたちが主体的に聴き合えるような課題の設定

わからなさ

困り感

探求的な課題の設定

- ・ どこで子どもが聴き合い、学び合う機会をつくるか

ペア・グループ活動

- ・ 課題を通して、子どもに学ばせたいことを明確にする

つけたい力の明確化

## (2) PDCAサイクル(Do)

全教員が参加して事前研を実施した。事前研で、本時の課題を全教員で実際に取り組むことにより、単元の内容、子どもにつけたい力、子どもにつけたい力をつけるための手だてとともに、授業を視る視点を全教員で共有することができた。また、実際に取り組むことにより、教材の魅力を教員で共有することもでき、この学年を担当したときは、この課題を試してみたいという教員も現れた。

### Do 全職員による事前研の実施

ねらい

- ・ 単元の内容を共有する。
- ・ 「つけたい力」を共有する。
- ・ 「つけたい力」を付けるための手だてを共有する。



「教材の魅力」や「授業を視る視点」の共有

## Do

「学びのフレーム作り」  
主体的に学ぶ子の育成をめざし、どのように学ぶのか「学び方」の共有を図った。

### 信太っ子が授業で大事にする7つのこと

- 1、丁寧にいきます  
(時間を守る、準備する、丁寧に書く、声の大きさ、言葉遣い、～しながら聞かない、最後までやりぬける)
- 2、となりの仲間をほっておきません(友だちの悩んでいることを考えられる、一緒に考える)
- 3、今まで学んだことを活かして考えます
- 4、自分からわからないことをたずねます(わかるまで聞きます)
- 5、誰のどんな話もしっかりと考えながら聞きます
- 6、自分の思いや考えを伝えます(自分の考えを持つとします)
- 7、「なんで?」「～だから」と考えます



「子どもをみる力」を高めていくために、研究授業では、必ず参観する教員が、予め決まったグループを中心に授業を参観し、授業の中で子どもたちがどのように学んでいたのか、ペアやグループで学び合うことができていたか、座席表に見取ったことを記入するようにした。

ペア・グループで聴き合い、学び合う学習を実施する中で、自分から友だちにわからないことを尋ねることができ、わからないということに、教員も子どもも温かく寄り添うことができる授業をめざした。そのために、どのように学ぶのか、「学び方」や「対話の仕方」（尋ね方や反応の仕方）を具体的に子どもたちに示した。対話のイメージを子どもと共有するために、ビデオで撮影したものを学級全員で見て、良いところや気づいたことを交流した。交流することによって、子どもたちは声かけの仕方、適切な声の大きさ、自分から尋ねるための声かけなど具体的に関わり方が理解できた。

## Do 全教職員が担当グループを見て、子どもの学びを見取る。

- ① 1人の子どもをみる
- ② 子どもと子どもの関わりをみる（孤立していないか）
- ③ 子どもを考えをみる
- ④ 子どもを学ぶをみる

一人ひとりの学びの過程を見取ることで、手立ても明確になり、子どもへの伝え方も具体的になる。

教員みんなで、子どもの学びと育ちを共有し、子どもたちがどこでつまづいているのか、どんなことを学び合ったのかを見取る力を高める。



画像で具体的な姿を子どもと共有した

思考しながら主体的に「聴く」ための手立てとして「聴き方の達人」を職員で共有した。「聴いたあと、感想や意見が言える」「聴いたあと、話について質問する」など8つの項目を作り、聴くことを体系的に捉え、視覚化した。(右図)

思考するときや、思考したことを表現するとき、思考を伝えるツールとして、テープ図や数直線に表したり、具体物を操作しながら説明させたりするなど、表現力を育むための指導法を全教員で共有した。子どもからも、自分の考えを他の子に示しやすくなったという声が出てきた。(下図)

## 図や表で思考・表現する子どもたち



図や表を使って  
思考します。  
そして、根拠を  
示しながら自分  
の考えを表現し  
ていきます。



「思考の見える化」  
子どもたちがツールとして  
使いこなせるように教室に  
掲示します。



話の聞き方の達人をめざそう！！

### ①話している人の方を向く

⇒相手を見て、いい姿勢で、うなずきながら、笑顔で、終わりまで聴く。

### ②聴きながら、心の中で「おしゃべり」する 「考えながら聴く」

⇒「どこでそう考えたのだろう」「自分の考えとどこが同じ(ちがう)かな」「〇〇ってどういうこと」と心の中でおしゃべりする。

### ③聴きながら、「わからない」ことを発見する

⇒わかったつもりになっていないか。聞き流してしまった言葉がないか。わからないことがあった時は、「〇〇ってどういう意味?」「よくわからないからもう1回言ってみて」と伝え手に言う。

### ④聴いたあと、話の内容を人に伝える 「リボイス」

⇒本当にわかったというのは、聴いた話の内容を人に話すことができること。

### ⑤聴いたあと、感想や意見が言える 「自分の言葉に置きかえて受け止める」

⇒相手が言ったことに対して、感じたことや考えたことを自分の言葉にする。毎日、すべての授業で意識させる。

### ⑥聴いたあと、話について質問する 「訊ねる、確認、問い返し」

⇒わからないから質問するのではなく、もっとわかるために質問をする。「もっと知りたいことは?」「くわしく知りたいことは?」「〇〇さんはどう思う?」「〇〇やんな?」

### ⑦仲間の話のつづきを想像する

⇒相手が伝えたいこと、困っていることを想像する。一方的に教える関係性ではなく、相手軸をもった対話的なコミュニケーションとなる。

### ⑧仲間の言葉を引き出す 「寄り添って訊く」

⇒「どう?」「いける?」「ここまでわかった?」「これってどういう意味?」「〇〇ってわかる?」「〇〇の公式を覚えている?」

聴くことを体系的に捉え、視覚化

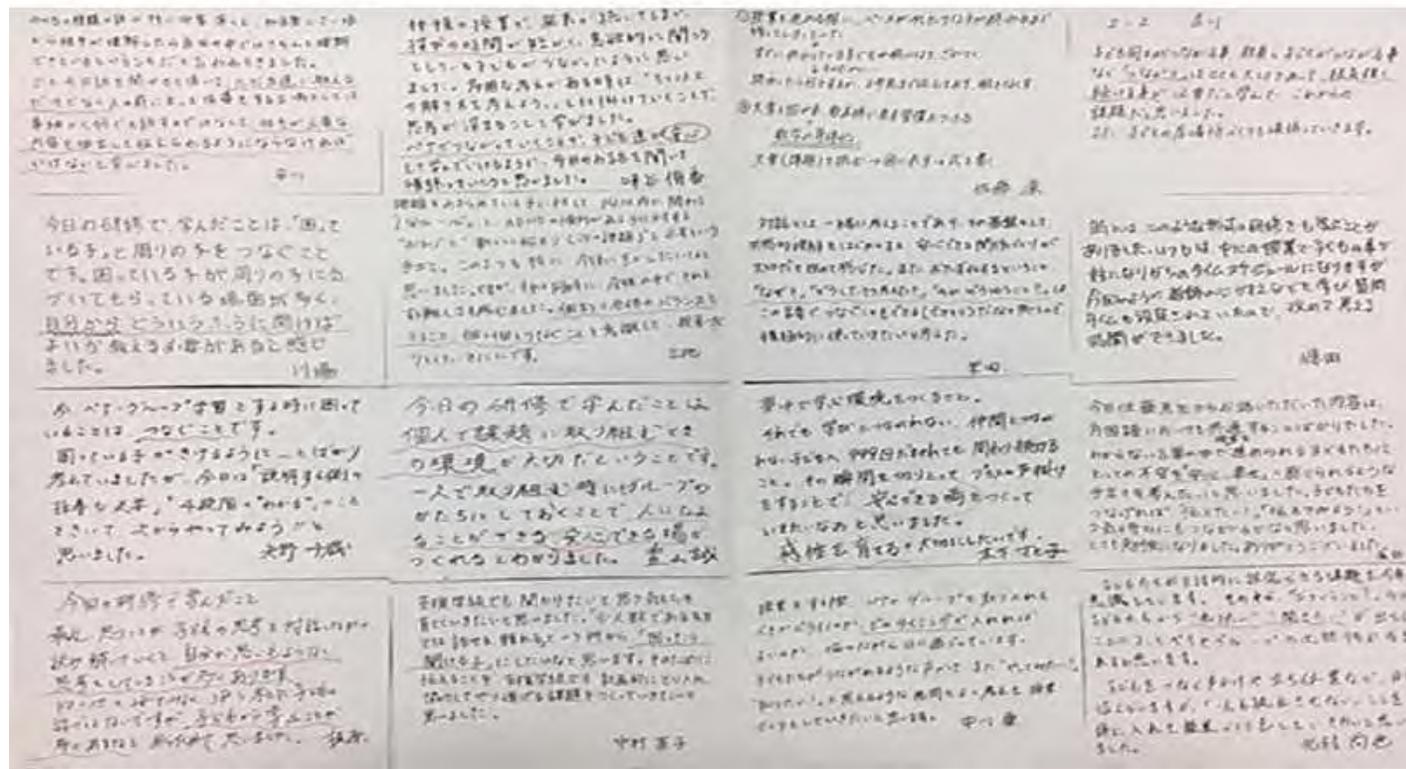
### (3) PDCAサイクル(Check)

研究授業後、子どもの学びと育ちを語る会（討議会）を行い、めざす姿の共有化を図るとともに、つきたい力がついていないか、子どもの姿を通して交流した。意見を活発に出しやすくすることを目的に、少人数のグループで意見を交流した後、全体交流を行った。

討議会をする中で、研究主題の「聴き合い！響き合い！育ちあい！～豊かに学び合う教室をめざして～」といっても、子どものどのような姿が「豊かに学んでいる」といえるのか、全教員のイメージが一人ひとり違っていることがわかったので、どのような子どもの姿が良かったのかを『**授業デザイン→子どもをみる→めざす子ども像の共有化**』という一連の流れの中で、教員同士の共有化を図った。

そして、「めざす子ども像」や「困り感のある子どもへの手立て」をより具体化し、日々の授業に返せるような場とした。

## 研究授業の振り返り⇒授業改善へ



# 全国学力・学習状況調査の分析

全国学力・学習状況調査の分析を実施した。全国学力・学習状況調査終了後、児童解答用紙をコピーし、自校採点を行い、全教員で、採点した児童解答用紙を基に分析を行った。

また、各学期末に社会性測定用尺度や児童アンケートを実施し、子ども集団の意識の変化を分析した。これらの分析を通して「筋道を立てて思考し、表現する力」が課題であるということがわかったので、課題を全教員で共有するとともに視覚化し、教員が常にその課題を意識して取組みを進めることができるようにした。

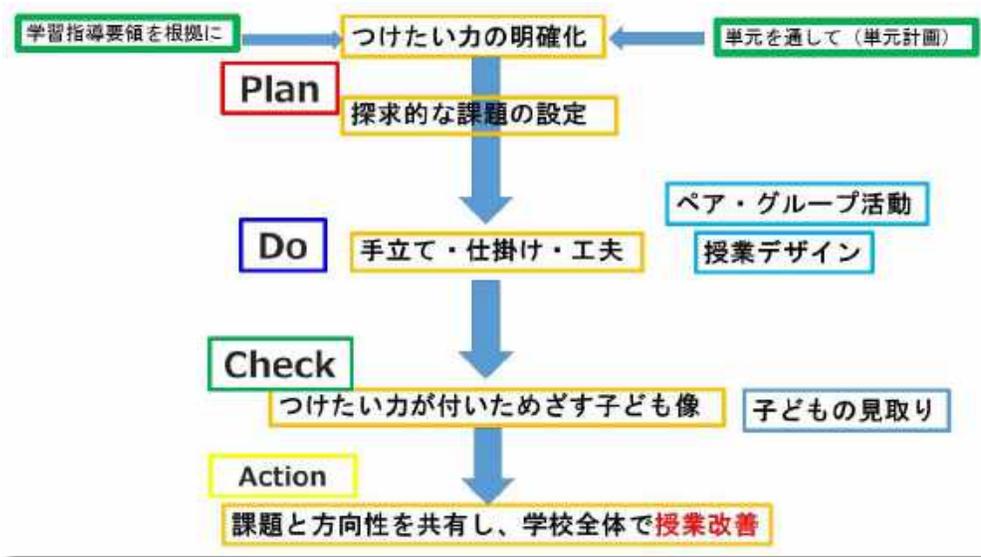


# (4) PDCAサイクル(Action)

学習指導部において、研究授業で明らかになった成果や課題、今後の方向性を話し合い、研究通信を発行し、研究通信を通して、全教員で今後の方向性を共有するとともに、研究授業で明らかになった課題に正対した取組みの紹介をした。

授業改善の視点を見取った課題を踏まえ、学校全体で次の①～③のように揃えた。

- ① 図解化や具体物の操作で思考する ⇒ 表現する
- ② ペアの確立
- ③ 子どもの声を聴く。子どもの疑問から出発する。根気よく声かけ。



研修後の振り返りを紙に書いて可視化することで、各自の授業改善に生かした



## へウレ〜カ!



令和2年8月5日  
文責・辻川 第2.2号

### 表現するための武器 ～視覚的にはっきり示す～

子どもの言葉には、数学的な見方・考え方が見え隠れするものが多くあります。見え隠れするからこそ、その言葉を取り上げ、価値づけを行う必要があると考えています。また、授業内で価値づけを行うだけに留まらず、教室に掲示し、視覚的にはっきり示すことが大事です。数学的な見方・考え方が働いた表現を継続的に価値づけ、使えるようにしていくためです。

以下に挙げるものは、実際に授業やノートに子どもから出てきた言葉です。教師が一方向的に提示している語型ではありません。形式的に言葉を教え込むのではなく、子どもが感覚的に紡ぎ出した言葉を取り上げ、価値づけ、意図的に使えるようにしていきたいです。

4年2組  
成語の事項と結びつける統合的な考え方が働いている表現。

4年3組  
・「まず〜」は、順序良く整理しながらの表現。  
・「くわしく言うと〜」は、より明確な表現。  
・「〜は必ずなのに」「だとすると」「もし〜」は、仮定したり、適用範囲を広げる表現。  
・「つまり」は、より簡潔な表現。

6年3組  
・「図で表現」は、視覚を明らかにする論理的な表現。  
・「例えば」は、数字や事例を書き換え、より分かりやすくする表現。

## 2. 研究授業を行う際のPDCAサイクルの構築 令和2年度の取組み

### (1) PDCAサイクル(Plan)

令和元年度、「聴き合い！響き合い！育ち合い！～豊かに学び合う教室をめざして～」というテーマで、ペアやグループ活動を通し、相手の思い・考えを受け入れ、自分の思い・考えも伝える心を育むための「聴き合う」活動を日々の授業の中に取り入れ、学び合う授業を展開した。その結果、児童アンケートの結果からも、ペア・グループでの対話を通じた学び合いは浸透しつつあるとともに、子ども同士のつながりが増え、自ら課題に取り組もうとする主体性についても一定の成果が出始めてきた。しかし、同じく児童アンケート並びに府の力だめしテストの結果から、子ども同士のつながりは増えても、相手にわかりやすく自分の考えを表現することにはまだ課題が残ることがわかった。そのため今年度は、研究テーマを「夢中で学ぶ子～学び合いを通して、自ら表現しようとする子を育む授業づくり～」と設定した。

また、設定した研究主題に向かって、

- 語彙力を育むこと
- 言葉を捉える力を育むこと
- 思考・表現する際に図解化し、思考の視覚化をめざすこと

の3つの視点をもとに、自分の考えを相手に表現するための授業改善を進めることとした。

かずやさんは、平均を求める計算を簡単にするために、7mを二えた部分に着目し、次のように平均を求めました。

【かずやさんの平均の求め方】

7mを二えた部分の平均を求めます。  
 $(52+31+54+20+43) \div 5 = 40$   
7mに、求めた平均の40cmをたします。車が進んだ長さの平均は、7m40cmです。

【かずやさんの平均の求め方】を聞いたはるなさんは、次のように考えました。

はるな 7mのかわりに、7m20cmを二えた部分に着目しても、平均を求めることができます。

(2) 7m20cmを二えた部分に着目した平均の求め方を、言葉や式を使って書きましよう。

かずやさんの計算が7m20cm以上だから平均は求められないよ。  
7m20cmは7m20cmを二えた部分だから、計算は(52+31+54+20+43)÷5=40でいいよ。  
40cmをたす。(72+11+34+0+23)÷5=40になる。  
最終的に20を7m20cmにたして7m40cmにしたのが平均の求め方。

$(52+31+54+20+43) \div 5 = 40$   
7mを計算する式は長くなるし、すべて7mをかる、cmを計算した。  
そして7mをつけた。  
だから平均は、7m40cmになる。

【例】  
7m20cmを二えた部分の平均を求めます。  
 $(32+11+34+0+23) \div 5 = 20$   
7m20cmに、求めた平均の20cmをたします。  
車が進んだ長さの平均は、7m40cmです。

## 大阪府力だめしテストから 課題を把握

## (2) PDCAサイクル(Do)

新型コロナウイルス感染防止に努めながら、1学期に6年生の分数の単元で研究授業を実施した。子どもたちが数直線を使って説明しようとする姿を見ることができたが、研究授業後の研究討議を通して、数直線を使って数量関係を把握し、計算方法を説明する表現力にはまだ課題が見られたので、下の学年からその力を磨いていく必要があるという共通認識が教員の中にでき、早速、今年の5年生の小数のわり算・かけ算の際に、同じように数直線を使って子ども同士が説明することに取り組んだ。

今年度は、つけたい力がついた子どもの姿を全教員が共有し、「何ができるようになったのか」「どんな力がついたのか」を的確に見取るための単元末評価テスト・単元末アンケートを作成・実施することにより、客観的なデータを活用して、成果の見取りを行い、単元ごとにPDCAサイクルを回すことができるよう取り組んでいる。また、つけたい力がついたかどうか評価するための評価規準・判断基準を指導案に明記している。

③ 算数 「分数のわり算」 授業後アンケート  
名前( )

① 算式、言葉などを用いて、なるべく詳しく考えようとしたが、【選】  
とてもそう思う ・ そう思う ・ あまりそう思わない ・ 思わない

② 授業の中で、新しいことに気づいたため、新たな考えを持とうとしたりしましたが、【選】  
とてもそう思う ・ そう思う ・ あまりそう思わない ・ 思わない

③ (分数)÷(分数)の計算の仕方が分かり、計算できるようになりましたが、【知・技】  
とてもそう思う ・ そう思う ・ あまりそう思わない ・ 思わない

④ 今まで習ったこととちがって、分数のわり算の計算の仕方を変えることができましたが、【知・技・表】  
とてもそう思う ・ そう思う ・ あまりそう思わない ・ 思わない

⑤ 算式、言葉などを用いて考え、説明することができましたか。【知・技・表】  
とてもそう思う ・ そう思う ・ あまりそう思わない ・ 思わない

※ 「分数のわり算」の学習をして習ったことや考えたこと、もっと学習したいと思うことを書きましょう。

③ 分数のわり算 単元末評価テスト  
6年 組 番 名 前 \_\_\_\_\_

分数のわり算の計算の仕方について3人が話をしています。話を読んで、問いに答えましょう。

  
あつしさん

$\frac{5}{8} \div \frac{2}{3}$  は、どうやって計算すればいいのかな？

  
ゆかさん

分数のわり算は、逆数をかければいいんだよ。

  
みくさん

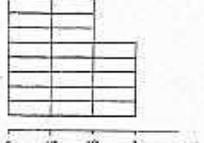
なんでわり算なのに逆数をかけて計算するの？

クラスの友だち3人が次のように考えました。

  
① しょうた君

  
② ひなこさん

  
③ ひろ君

① しょうた君  
底くは面積図で考えました！  


② ひなこさん  
私は数直線図で考えましたよ。  


③ ひろ君  
おれはわり算の性質を使って計算しました。

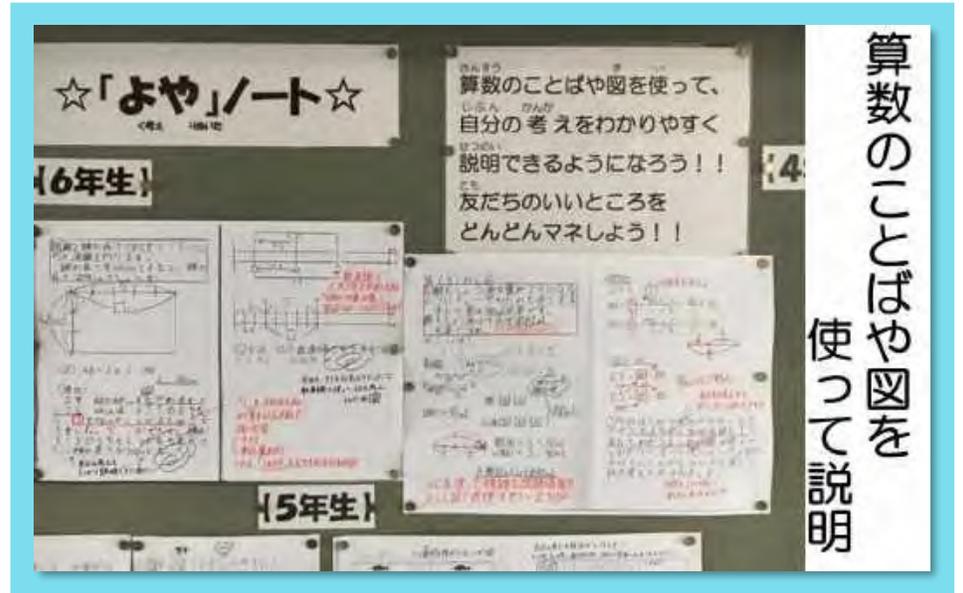
どうしてわり算なのに逆数をかけて計算するのでしょうか。3人の考えから1つ選び、図の中の数直線やどのようなわり算の性質を使ったのかを、言葉や式を用いて説明しましょう。

( ) さんの考えで説明します。

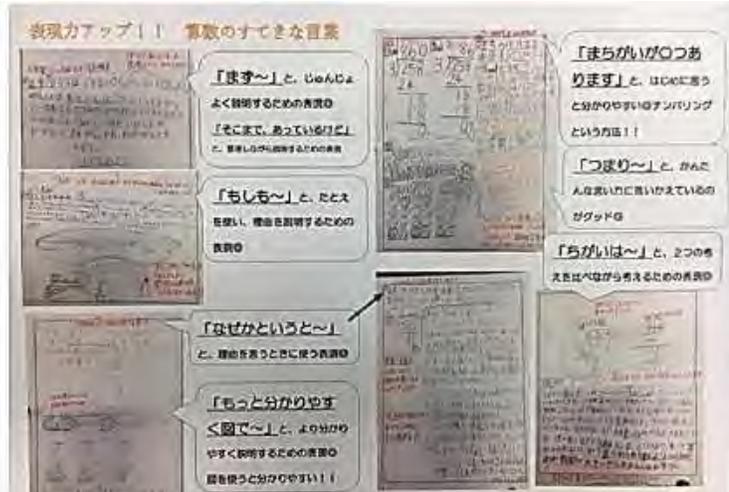
○評価の観点  
思考・判断・表現

また、年度当初に単元配列表の見直しを実施した。昨年度は内容で各教科をつなごうとしたが、今年度は資質・能力でつないでいくことにし、表現力に焦点を絞って構成することができた。子どもの表現力を育むために、子どもが振り返りに記入したコメントを全教室で張り出すことにより、それを見た他の子どももいろいろな表現を使えるようにしている。さらに校内に他学年の振り返りを張り出すスペースを設けることにより、違う学年の子どもの表現も参考にできるようにしている。

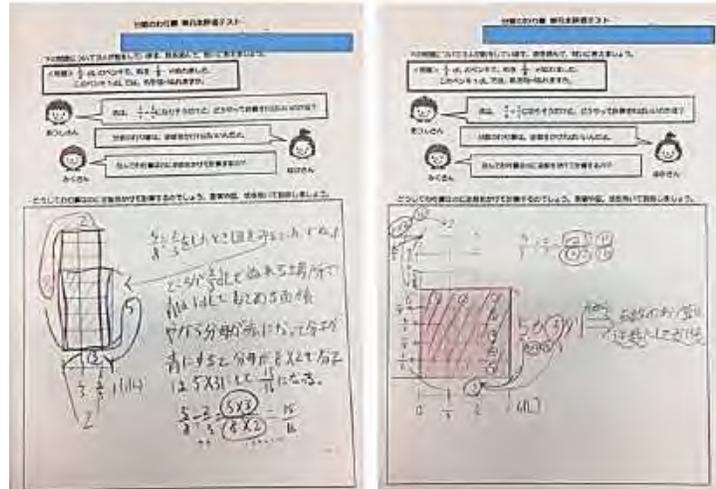
家庭でも同じ声かけをして、同じ視点で子どもたちを見てもらうために、授業づくりやめざす子どもの姿を通信で発行した。



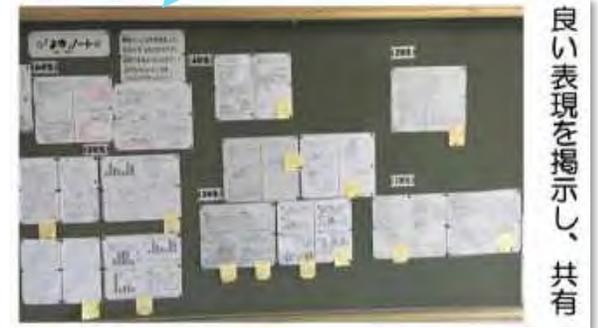
算数のことばや図を使って説明



子どもが紡いだした言葉を価値づける



的確に見取るための評価テスト



良い表現を掲示し、共有

### (3) 単元のPDCAサイクル（6年生 分数のかけ算・わり算）

## Plan

単元を実施する前に、本校の研究テーマ「夢中で学ぶ子～学び合いを通して、自ら表現しようとする子を育む授業づくり～」を、算数科の中で実現していくために、学習指導要領に基づき、既習事項を俯瞰しながら、6年生の教員で話し合った。題意を読み取り、数直線を書くことのできる児童は増えたが、そこから立式することができない児童もいる実態を踏まえ、単元を通して子どもにつけたい力を次のように明確にした。

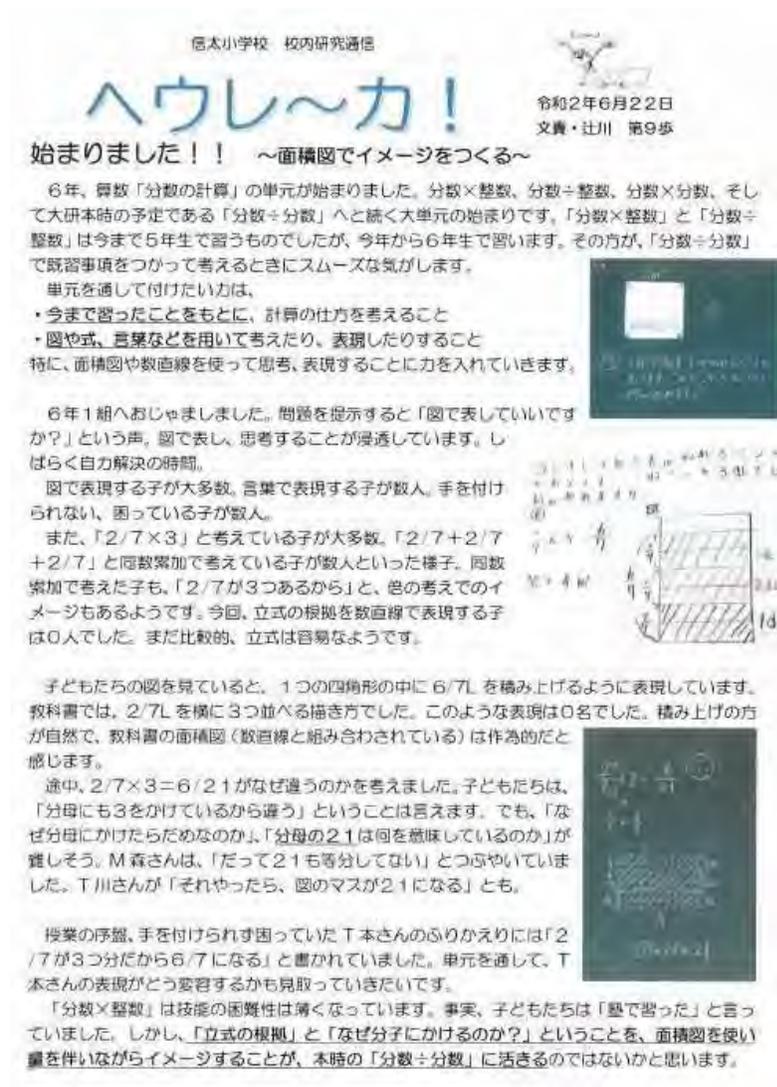
#### <つけたい力>

- ・「今まで習ったことをもとに、計算の仕方を考える力」
- ・「図や式、言葉などを用いて考えたり、表現する力」

その後、つけたい力を身につけた子どもの姿を具体的にイメージするために、各教員がイメージする、つけたい力を身につけた子どもの姿を話し合った結果

- ・問題に粘り強く向き合い、自分の考えだけでは満足せず、友だちの言葉や考えを大事にして、友だちがどう考えているのかを理解しようとする姿
- ・分からなくても、友だちの考えを聞いて、何とか理解しようとする向き合う姿
- ・なんでそうなったのか、疑問を追求できる姿

という姿が、つけたい力を身につけた子どもの姿であるという共通理解を6年生の教員で図ることができた。



# Do

単元を通してつきたい力を子どもたちにつけるために、面積図や数直線を使って、思考、表現することに取り組んだ。その結果、問題を提示すると、子ども達から「図で表していいですか？」と声が出るようになり、お互いに自分の考えをクラスメートに説明するときに、ほとんどの子どもが図を使って表現するようになった。振り返りには、子どもたちが面積図を根拠にしながら、友だちの考えたことをメモし、論理的に自分の考えを記入していた。

信太小学校 校内研究通信

## へウレ〜カ!

令和2年6月23日  
文責・辻川 第10歩

2人の思いがヒカル ~伝えたい、受け止めたい~

6年1組です。分数の第2時。授業の序盤は、前時の続きです。「なぜ $2/7 \times 3 = 6/21$ はちがうのか」を説明したあと、「分子だけをかけたらいいい」と一般化につなげていました。そして、本時の問題提示。

② 2dLで $4/5$ mぬれるペンキがあります。このペンキ1dLでは、何mぬれますか。

提示したあと、 $2/5$ mを区で描いてみてと味谷先生。前時で $2/7$ をイメージできなかった子がいたので、まずは $2/5$ を区画化させたみたいだ。全員が、 $4/5$ mを区画化できました。そのあと、考え方を書いていく子どもたち。やはり、大多数が先ほど描いた面積図で考えています。

他2クラスでは、課題を提示したあと、すぐに考え方を書いていったので、少し多様な考えができました。数直線で考える子が2名すくらしい。式で考えた子が半分くらい。面積図で考えた子も半分くらいでした。中には、先取り学習の影響なのか、「 $4/5 \div 2 = 4/5 \times 1/2 = 4/10 = 2/5$ 」といった逆算をかける式もでてきました。「 $\div 2$ 」と「 $\times 1/2$ 」は同じだから、と説明できる子もいました。しかし、途中式の「 $4/10$ 」を面積図と関連づけて説明することは難しそうです。また1組では数直線は出てきませんが、今後出てきそうな予感。

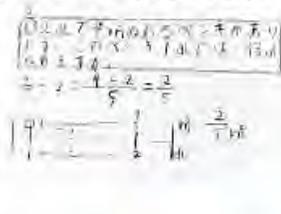
休み時間、KくんがMくんに必死になって伝えていました。「2dLと1dLに注目してみて。なんか気付くことない?」「例えば、6dLと3dL やったらどう? 4dLと2dLでもいけるで! 共通点はなに?」「これが2倍の状態やとするやん?」「0分をするんやん! 漢字で・・・」半分と言わせたい様子。Kくんは全部を教えず、Mくんの反応を確かめながら、言葉を引き出そうとします。

しかし、Mくんは決して分かったふりをしません。このMくんの分かったふりをしないところがいいなと感じました。まだ、Kくんは自分の表現方法を要えざるを得ません。

立式の根拠となる半分になっていることを、「例えば・・・」と他の数値に置き換えながら何とか伝えたいKくん。簡単に分かったふりをしないが、Kくんの思いを必死に受け止めようとするMくん。

数分後、Mくんは面積図を描きながら、 $4/5 \div 2 = 2/5$ を説明しました。まだまだ拙い説明ですが、なんとか自分の考えを述べました。「よかった、よかった!」と、Kくんは満足そうな表情。

Kくんの豊かな表現力とMくんの受け止め力を見るのができました! 図で考え、表現する子どもたち。図が考えを伝える武器になりつつあります。





信太小学校 校内研究通信

## へウレ〜カ!

令和2年6月24日  
文責・辻川 第11歩

前のやり方じゃ、今日のはでけへん。

③ 3dLで $4/5$ mぬれるペンキがあります。このペンキ1dLでは、何mぬれますか。

提示したあと、「この前とおなじ!」と、立式は比較的スムーズにできていました。立式の根拠としては、「昨日の2dLが3dLに変わっただけ」、「数直線で立式の根拠を示す」などが出ました。しかし、「でも、分からない数字がある。」「昨日の問題はあの数字だからできたんだ。」「3じゃ、割り切れへん。」という声も聞こえてきます。

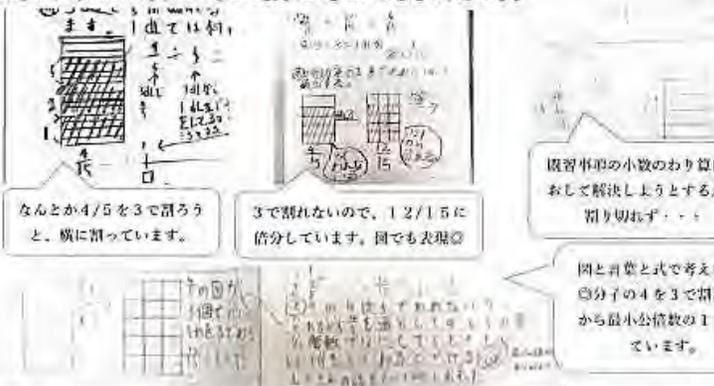
後ろのグループでは、「昨日は分子だけ割ったけど、今日は割り切れへん」「昨日はたまたま数字が良かったんかな。」「昨日は数直線であ〜って分かったけど、今日は数直線じゃ分からん。」という会話をしていました。嬉しいのが、子どもたちが昨日までのノートをめくり、今まで習った方法で解決できないものか考えていることです。「既習事項を使って考える」ことが子どもたちの中に根付いてきています。前時の「分子だけ割る」という方法が、今日ではできない。子どもたちは、「なんとか分子の4を3で割りたい」という思考の様です。

図と言葉と式で考えを表現  
③分子の4を3で割れないから最小公倍数の12にしています。

図で言葉と式で考えを表現  
③分子の4を3で割れないから最小公倍数の12にしています。

図で言葉と式で考えを表現  
③分子の4を3で割れないから最小公倍数の12にしています。

さて、良い授業の定義は人それぞれで、答えは1つではないと思います。でも、授業後、黒板の前集まり「あ〜でもない、こ〜でもない」と議論する姿が見られたら、それは良い授業だったのだと思います。授業では言えなかったこと、まだ納得できていない疑問などを先生や友だちと議論している姿です。これこそ、子どもの内側から生まれた伝えたいことや聞きたいことだと思います。2組のKさんは「分数を割るということは、分母にかけることと同じ」ということを、ホールケーキを例にしながら伝えていました。「 $1/2$ 個のケーキを2で割ると、 $1/4$ 個になる。結局、分母の2に2をかけているのと同じ。」と伝えていました。例えを使い、簡単な絵で表しながら説明するSさんが素敵でした! (^^)




# Check

つきたい力が本当に子どもの身についたのかを見取るために、単元末評価テストと授業終わりアンケートを作成・実施した。単元末評価テストは思考・判断・表現が見取ることができる内容とし、授業終わりアンケートは子どもがイメージできる言葉で設問を作成した。

成果・課題としては、次のようなことが挙げられる。

## <成果>

- ・ノートをめくり、既習事項を生かそうと調べている姿がたくさん見られた。
- ・立式の根拠を説明する時に、既習事項等をもとに表現する姿が見られた。
- ・ペアでの対話で、図を指し示しながら説明する姿が見られた。
- ・「なぜ逆数でかけるの」と、根拠を知りたい気持ちが感じられた。(次ページへ続く)

信太小学校 校内研究通信

# ハウレ〜カ!

令和2年6月26日  
文責・辻川 第12号

思考したこと、聞いたことをノートに表現

6年3組の算数におじゃましました。分数÷整数の最終回番。子どもたちは、 $4/5 \div 3$ の計算を面積図を使ってイメージしたり、分子を割り切れる数にして考えたりと頑張っています。分母に割る数をかけたら答えがでることは分かっているが、なぜそうなるのかを一生懸命考えています。

3組Nさんは、わり算になってから苦戦していたが、この日のふりがえりには、なぜ分母にかけると論理的に書くことができています。「けっきょく」「ということは」がグッド◎

図を根拠にしながら考えています。友だちの考えたこと、自分が考えたことを吹き出しにしてメモしています。その時期の思考がしっかりと読み取れるノートです。

面積図の縦の線が「÷3」を意味していることを説明。説明「÷3」することで分母が15が増えてきていることを図でイメージしています。

Aさんも自分の気持ちや疑問をメモしています。友だちの発言と自分の思考の同じところ・違うところを意識しながら聞いていくことが分かっています。

信太小学校 校内研究通信

# ハウレ〜カ!

令和2年6月30日  
文責・辻川 第13号

立式が難しい!! 分数×分数スタート!!

「うわっ、難しい!」「ややこしいやつや!」問題と出会った後の子どもたちのつぶやきです。6年1組算数、「分数×分数」の導入です。立式の難しさは想定以上でした。

◎1 dLのペンキで、屋根を $4/5$  mぬれました。1/3 dLでは、何mぬれますか。

まずは、式を考えさせる味谷先生。しかし、子どもたちの手が止まります。何らかの式を書けた子は4名ほど。「×整数」「÷整数」と違い、きちんと数量関係を把握することが求められます。Yくんが数直線を描いていることを紹介し、数直線を描きながら式を考える活動に入ります。

正しく数直線を描けている子が半分くらい。その他は、1 dLの右側に1/3 dLが書かれていたり、 $4/5$  mと1/3 dLを同じ直線上に表していたり。全く数直線を描けなかった子は2人いました。Yくんの「1より1/3の方が小さいから(1より右側に1/3があるのは)おかしい!」の声で、正しい数直線を共有しました。

しかし、正しい数直線を描けてからも立式は難しそう。「 $4/5 \div 1/3$ 」が4人。「 $4/5 + 3$ 」が1人。「 $4/5 \times 1/3$ 」が数人。立式できない子も数人。といった様子。

やはり、「小さくなるのだからわり算という誤認識」「かけ算しているのに小さくなっていることへの抵抗」「分数倍への拡張がイメージしづらい」ことが子どもたちの困り感のようでした。

「分数×分数」そして本時の単元である「分数÷分数」は技能に関してはそれほど問題ありません。それよりも「演算の意味」や「分数そのもののイメージ」を新たなものにしていくことのほうが大切だと思います。本時の「分数÷分数」で根拠をもって演算決定できたり、計算の仕方を考えたりできるように、今は「分数×分数」で紐を掛けているところです。

## <成果>

- 単元を通して計画し、どこを大切に押さえていか、単元づくりを共有できた。
- 学校全体で数直線の描き方や説明する時の言葉を共有できた。
- Planで評価テストや単元末アンケートを作成したことで、ゴールが明確になった。
- 具体的に子どもの課題を見取ることができ、教員の指導方法の改善を図ることができた。
- 子ども自身が自分の成果や課題を自認し、次の学習へつなげることができた。

## <課題>

- 言葉で考えを伝えることに課題が見られた。
- 表現力を育むためには、算数だけでなく国語を中心とした計画的な指導が必要。教科の枠を超えて研究を進めていく必要がある。

信太小学校 校内研究通信

# ハウレ〜カ!

令和2年7月2日  
文責・辻川 第14号

『全部いっしょやん!』『なんでもいけるやん!』～統合する～

第13歩でお伝えしたように、6年3組でも「 $4/5 \times 1/3$ 」の立式に苦戦しました。しかし、キラリと輝る算数らしい表現が飛び出し、子どもたちの言葉が繋がる時間となりました。

① 1 dL のペンキで、屋根を  $4/5$  m ぬれました。  $1/3$  dL では、何 m ぬれますか。

「 $4/5 \times 1/3$ 」と立式する子は Y 草さん1人だけ。その他は「 $4/5 \div 3$ 」の立式で理解しています。Y 草さんが数直線を描き示しながら、「1 はなにをかけても、かける数になる。」と説明。すると S 本さんがピンと反応。

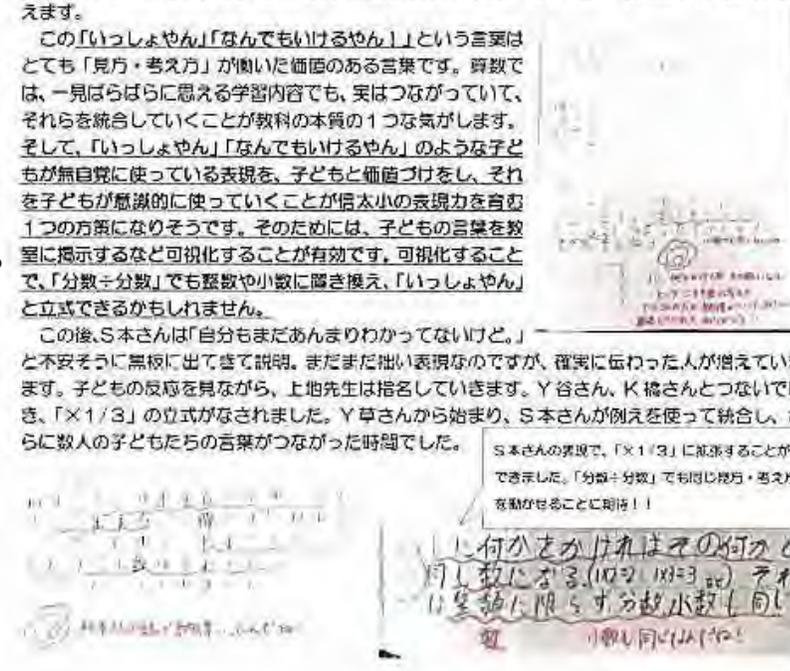
「全部いっしょやん。だって、1 に1 をかけても1 やん。1 に2 かけたら2 やん。だから1 に1/3 かけたら1/3 になるやん!」S 本さんが、既習事項と「 $\times 1/3$ 」を統合的に捉え、分数倍への拡張をした瞬間でした。この後、S 本さんはさらに「なんでもいけるやん!」とつぶやきました。ここで私が「ほんまになんでもいけるの?」と促すと、彼は「 $1 \times 0$ 、2 は  $\dots \cdot 0$ 、2 や! やっぱなんでもいけるやん!」と大発見をした時のような様子。嬉しくなって、隣の A 藤さんに伝えます。

この「いっしょやん」「なんでもいけるやん!」という言葉はとて「見方・考え方」が働いた価値のある言葉です。算数では、一見ばらばらに見える学習内容でも、実はつながっていて、それらを統合していくことが教科の本質の1つな気がします。そして、「いっしょやん」「なんでもいけるやん!」のような子どもが無自覚に使っている表現を、子どもと価値づけをし、それを子どもが感激的に使っていくことが信太小の表現力を育てる1つの方策になりそうです。そのためには、子どもの言葉を教室に掲示するなど可視化することが有効です。可視化することで、「分数÷分数」でも整数や小数に置き換え、「いっしょやん」と立式できるかもしれません。

この後、S 本さんは「自分もまだあんまりわかってないけど。」と不安そうに黒板に出てきて説明。まだまだ拙い表現なのですが、確実に伝わった人が増えていきます。子どもの反応を見ながら、上池先生は指名していきます。Y 谷さん、K 橋さんとつないでいき、「 $\times 1/3$ 」の立式がなされました。Y 草さんから始まり、S 本さんが例えを使って統合し、さらに数人の子どもの言葉が繋がった時間でした。

S 本さんの表現で、「 $\times 1/3$ 」に拡張することができました。「分数÷分数」でも同じ見方・考え方を働かせることに期待!!

何かをかけるはその何かと同じ数になる。(10を10で10÷10) それ以外の整数に限らず分数小数も同じ!



## Action①

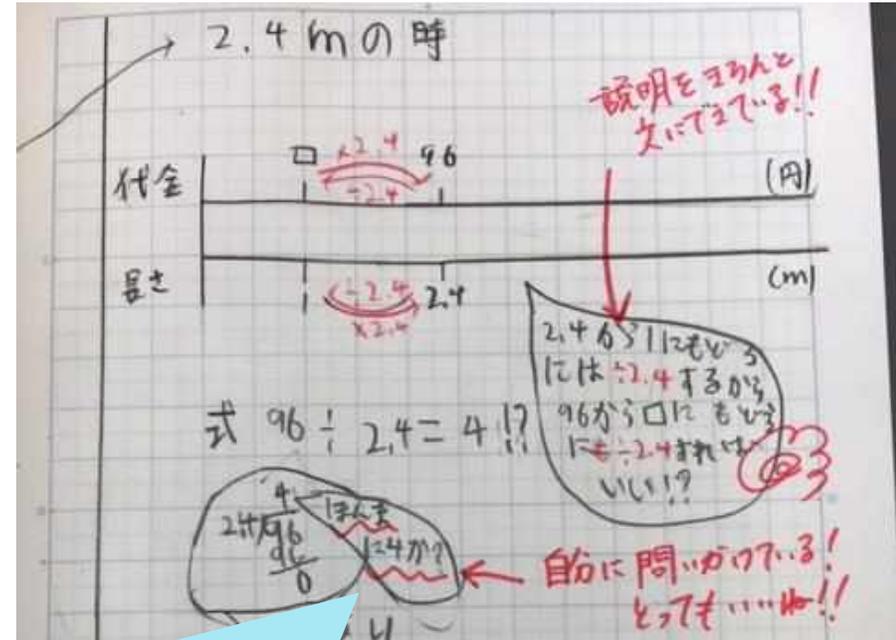
上記の成果と課題を踏まえ、教科の系統性を考えて、今年度に見取った成果と課題を生かせる単元の場合は、下学年の授業改善へとつなげ、下学年は、今年度ですでに実施済みの単元の場合は、来年度の改善プランを作成し、保存している。

例えば、6年生の分数のかけ算・わり算の単元での成果と課題を受けて、下学年の授業改善に次のように取り組んだ。

## 5年生「小数のかけ算・わり算」

5年生では、分数のかけ算・わり算につながる小数のかけ算・わり算の単元において、計算の仕方を、図や式、ことばなどで考え、説明する力を育てるために、言葉や図で自分の考えを伝える活動を取り入れた。その結果、次のように、子どもたちが自分の考えを図や言葉を使って説明する様子が見られるようになった。

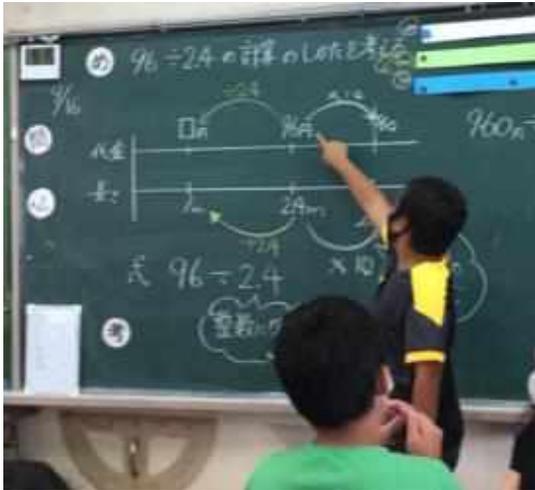
<子どものアンケート結果>	肯定的回答
図や式、言葉を用いて、ねばり強く考えようしましたか。	90.7%
図や式、言葉を用いて考え、説明（表現）することができましたか。	80.0%



主体的に学びに向き合い、考えを気軽に表現するためにモクモクカと称した「ふきだし」を活用させた。疑問や気づきをふきだしに書くことで、振り返りを書くときのヒントにもなった。

『2.4から1にもどるには÷2.4するから』と、わり算になる理由を言語化している。

6年【分数のわり算】でつまずきのあった、数直線から演算決定し、説明する力を5年生で高めた。



演算決定の理由を数直線を指で押さえながら説明できるようになってきた。根拠を示しながら表現する力をつけた。

子どもたちが、図や言葉を使って自分の考えを表現できるようになってきたが、いつまでも「いくつ分」の考えから抜け出せず、「小数倍」への拡張に時間がかかり、「80円の2つ分」は言えても、「80円の2.3こ分」と言えずに困っている子どももいた。

倍の概念をもとに「何倍」を意識して立式することが難しい子どももいたので、倍の概念が登場する2年生からの系統的な指導が必要だと考えた。

5年生 「小数のかけ算」 単元末評価テスト  
5年 組 番 名 前

① 1mのねだんが80円のリボンを2.3m買います。代金は何円ですか。

上の問題について2人が話をしています。話を読んで、問いに答えましょう。

りんさん: 式は $80 \times 2.3$ になります。なぜなら、長さが1mから2.3mに2.3倍しているから、代金も比例して2.3倍するからです。

たかのりさん: 数直線に表すと、こうなります。たしかに、2.3倍になります。

① たかのりさんが表した数直線のアとイの口当てはまる数字を書きましょう。ア:  イ:

続いて、 $80 \times 2.3$ の計算のしかたについて3人が話をしています。

まことさん: 式は $80 \times 2.3$ だと分かったけど、どうやって計算したらいいのが困ってしまいました。

【かおるさんの説明】  
小数を整数におおして考えました。  
 $80 \times 2.3 = 184$   
 $1 \times 10 \quad 1 \div 10$   
 **$80 \times 23 = 1840$**   
はじめに $\times 10$ をしたので、積を10でわって184になります。

【あつしさんの説明】  
小数を整数におおして考えました。  
 $80 \times 2.3 =$   
 $1 \div 10 \quad 1 \times 10$   
 $8 \times 23 = 184$   
かけられる数を $\div 10$ して、かける数を $\times 10$ したので、積は184のままになります。

② かおるさんの考え方にある『 $80 \times 23 = 1840$ 』は何m分の代金を求めている式と言えますか。あ〜えから選び、記号で答えましょう。

あ: 2.3m分の代金  
い: 1m分の代金  
う: 23m分の代金  
え: 10m分の代金

答え:

③ 「 $80 \times 2.4$ 」について、【かおるさんの説明】・【あつしさんの説明】のどちらかを使い、計算のしかたを説明しましょう。

次に、まことさんは1mのねだんが80円のリボンを0.6m買いにいきました。そして、代金を求めるために「 $80 \times 0.6$ 」と式を立てました。しかし、りんさんが「80円より安くなるのに、かけ算なの?」と言いました。

④ 0.6m分の代金は、「 $80 \times 0.6$ 」の式で求めることができます。「80円より安くなるのに、かけ算になる」理由を、数直線や言葉・式を用いて説明しましょう。

② 答えが $230 \times 2.3$ の式で求められる問題を、下の①から④までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。また、選んだ問題の場面を数直線で表しましょう。

- ① リボンを2.3m買って、230円はらいました。このリボン1mの代金はいくらでしょう。
- ② 230mのリボンを2.3mずつ切ります。何本分のリボンを切れるでしょう。
- ③ リボンを1m買って、230円はらいました。このリボン2.3mの代金はいくらでしょう。
- ④ 赤いテープの長さは230cmです。赤いテープの長さは白いテープの長さの2.3倍です。白いテープの長さは何cmでしょう。

番号:

数直線:

# Action②

## 2年生「かけ算」

5年生での取組みの成果と課題を踏まえ、数のまとまりに着目し、そのまとまりがいくつ分あるのかを図や式、言葉で表現する力を育成するために、2年生のかけ算の単元において、5年生につながっていくように、問題場面を図に表し、かけ算の意味を丁寧に確認した。

事前に、学年団で単元構成を話し合い、実際の授業につなげた。

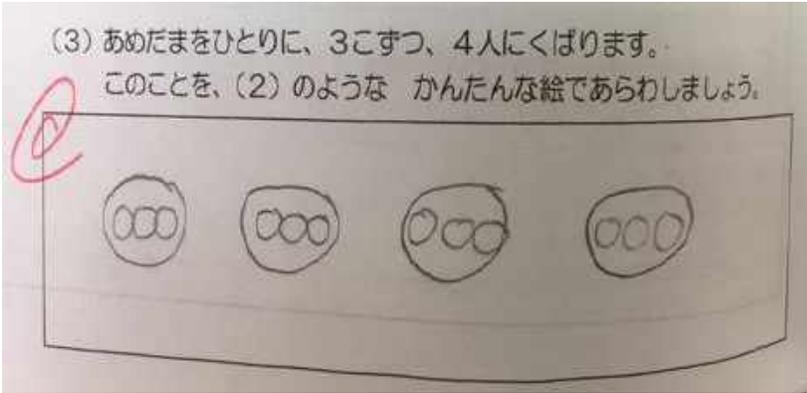
### 【事前の学年団での話し合いの際に出た意見】

- ・「2とび」で数える子どもが多い。
- ・数のまとまりに着目はしているが、数えるときは「2とび」や「1ずつ」で数える。
- ・人数を確定したあと、「数え方」に着目させたい。  
ただし、発問が難しい・・・「どうやって数えた?」「どう数えたら便利?」「他の数え方は?」などの意見が出た。



### 【話し合った結果取り組んだ、改善点】

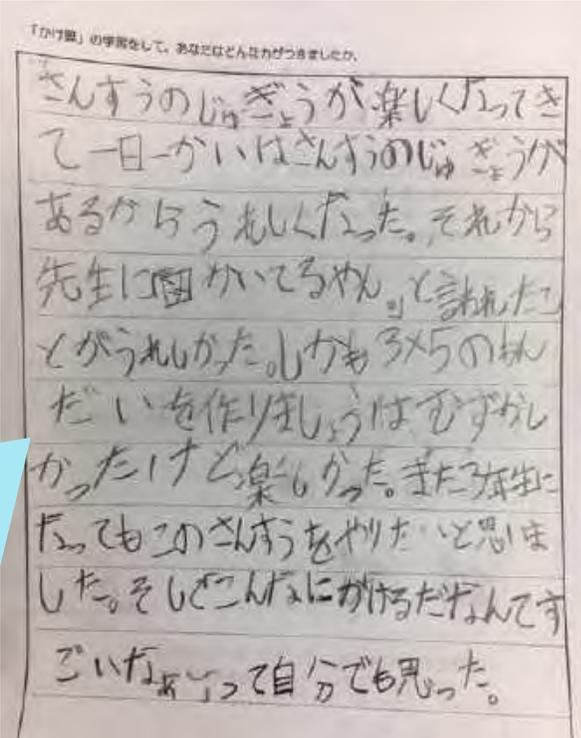
- ・まとまりを意識させるために、まとまりを囲む活動を取り入れた。
- ・まとまりに着目したあと、「○人ずつが△台分」のような表現を子どもたちができるように声かけをした。



**子どもたちのふり返り より**

さんすうのじゅぎょうが楽しくなってきたー日ーかいはさんすうのじゅぎょうがあるからうれしくなった。それから先生に「図かいてるやん。」と言われたことがうれしかった。

しかも3×5のもんだいを作りましょうは、むずかしかったけど楽しかった。また3年生になってもこのさんすうをやりたいと思いました。そして「こんなにかけるだなんてすごいなあ〜」って自分でも思った。





## (4) まとめ・今後の見通し

学校全体で取組みを進めた結果、〈教員アンケート〉について、右表の項目で高い割合で肯定的回答を得た。

〈教員アンケート結果〉	肯定的回答
校内研究の必要性の理解や課題・学力向上の方策について同僚と共有し取組みにあたってきたと思う。	100%
自校の研究主題を意識して授業づくりを行ったと思う。	90.9%

学校全体で年間カリキュラム・単元計画シートを作成し取組みを進めたことで、教員が見通しを持つことができ、学習したことが他の学年とどのように関係するのか（各学年でのかけ算、わり算、割合、図の描かせ方）等の話し合いが増え、縦の系統性を意識するようになった。その結果、次の単元や他教科との関連も意識しながら授業を進めることができた。また、表現力に焦点を当てたことで、思考力や判断力を見取りやすくなり、教員にとっても、子どもについての力がわかりやすくなった。

また、下記のような子どもの姿を見ることが増えた。

- ・ノートを振り返りながら、既習事項をもとに考える力がついてきた。
- ・順序立てて説明したり、事例を挙げたりしながら説明する力、文末表現を意識して書いたりする力がついてきた。
- ・図や式、ことばを使い、根拠を示しながら、考えを説明（表現）する力がついてきた。
- ・図解化するからこそ、出てきた数字の意味を捉えられるようになってきた。
- ・「ふりかえりに自分の考えを書ける」「○○な力がついた」と自覚する子どもが増えた。

その結果、学校教育自己診断の「学校は子どもの学力が定着するよう工夫している」という質問項目において

昨年度74.0% ⇒ 今年度86.4%

というように数値が上昇し、保護者にも学校の取組みについての理解が進んだと考えられる。



## 今後の見通し

- ・見方・考え方を系統立てて、「〇年でもそう考えたから、いけるはずだ」と統合的に思考することで、内容面での統合だけでなく、思考面での統合が期待されるため、見方・考え方が働いた場面で子どもたちから出てきた言葉を教室に掲示した。それにより、子どもたちの思考・表現のきっかけにすることができたので、取組みを続けていくとともに、来年度は、各学年・各単元で働かせたい見方・考え方を整理し、見方・考え方をベースにした評価規準や課題の作成に取り組む。
- ・子どもたちの思考が停滞したり、表面的な理解に留まっている時に、見方・考え方を引き出しつつ、思考を促し、対話のポイントをつくるための、問い返し発問の研究を進めていく。
- ・子どもたちが感覚的に紡ぎだす「見方・考え方」が働いた言葉をピックアップして価値づけ、算数で培う表現力を更に高めていきたい。
- ・全教科を通じて、子どもにつけたい力を育成していくために、教科横断的な取組みをさらに進めるとともに、評価方法の充実を図る。

# ひと・まち・つながる教育

岬町立深日小学校

## Why

### なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 都市近郊の自然豊かな町であるにもかかわらず、人口減少、少子高齢化の傾向が顕著であった。
- 地区人口の減少以上に児童数の減少が著しく、学校運営や子どもの学びにも影響があった。
- 学校を地域、大学、行政、企業など様々な人が集い交流するターミナルとして位置付け、学校の活性化を地域の活性化につなげることが地域に根差した学校づくりであると考えた。

## How

### どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 健康・体づくり教育の充実を図るため生活習慣調査と体育の授業改善や運動の工夫など、学校全体で楽しみながらできる取組みを実施した。
- 健康・体づくり教育を推進するにあたって、地域の特徴を活かした食育を推進した。
- 地域の方々と教職員が楽しみながらつながった。

## Change

### どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 地域の人たちとの交流を通して、相手が喜ぶことが自分の喜びに変わり、自分たちの自己肯定感や新たな気付きへとつながった。
- 保健室来室数が減少した（けが・心理的要因のどちらも減少した）。
- 学校の教育活動により一層、関心が高まり、学校行事や児童が参加する地域の交流の場への参加者が増えた。



## 1. 「ひと・まち・つながる」教育を通じた学びの実践

- (1) 「ひと・まち・つながる」教育について
- (2) 「ひと・まち・つながる」体づくり
- (3) 「ひと・まち・つながる」健康教育
- (4) 「ひと・まち・つながる」食育
- (5) 「ひと・まち・つながる」教育のひろがり

## 2. 取組みの成果について

- (1) 子どもたちの変容について
- (2) まとめ

# 1. 「ひと・まち・つながる」教育を通じた学びの実践

## (1) 「ひと・まち・つながる」教育について

岬町は、大阪府南部に位置し、都市近郊の自然豊かな町であるが、人口減少、少子高齢化の傾向が顕著であった。地区人口の減少以上に児童数の減少が著しく、学校運営や子どもの学びにも影響があった。

そこで、学校を地域、大学、行政、企業など様々な人が集い交流するターミナルとして位置付け、学校の活性化を地域の活性化につなげることが地域に根差した学校づくりであると考えた。

これまでも、地域との連携は進めてきていたが、様々な取り組みを教科等横断的な視点でどう組み立てていくのかを意識したカリキュラム・マネジメントを推進するにあたっては、地域の人的・物的資源をどのように捉え、地域の方の願いや思いを把握し、つながっていくことがカギになると考えた。

子どもたちが地域の方々と出会い、自然・文化・環境等にふれ合いながら、主体的に学びを深められるよう、右上囲みに示した「ひと・まち・つながる」教育の目的を設定した。

### <「ひと・まち・つながる」教育の目的>

○ 年間を通して全学年が教科を横断しながら自然豊かな岬町の特徴を活かしつつ、地域の「少子高齢化」に対し、子どもが主体的に試行錯誤しながら、地域の活性化に関わっていけるようにする。

○ 子どもが学校・地域・大学・行政・企業等と多様なかわりを持ち、学びを広げ、深めることで郷土や地域に誇りや感謝の気持ちをもてるようにする。



「体づくり」・「健康教育」・「食育」を中心に据えて、子どもたちにつけたい資質・能力を意識しながら、目的の達成をめざした。



## (2) 「ひと・まち・つながる」体づくり

平成27年度の全国体力・運動能力・生活習慣等調査において、深日小学校の児童の体力面での課題が顕在化することとなった。その課題解決に向けて、大阪府の子ども体力づくりサポート事業の対象校となり、岬町教育委員会と和歌山大学教育学部保健体育専攻の教授から指導・助言を得られることとなった（下記事例参照）。これをきっかけとして、子どもたちの体づくりだけでなく、教員の指導力の向上に向けた取組みが行われることとなった。その結果、平成30年度と同調査結果において、深日小学校の取組みがスポーツ庁のホームページでモデルケースとして紹介されることとなった。



例えば、委員会活動等で、教員、和歌山大学教育学部保健体育専攻のボランティア学生と児童が一緒になって、「体づくりキャンペーン」と銘打って、昼休みに「全校あそび」やあそびの要素を取り入れた体づくりのトレーニングの「場」の設定を考え、その内容を給食の時間に児童と一緒に校内放送をするなどして、楽しさを全面的に打ち出した。

その中で、児童・学生・教員が関わる時間を増やし、お互いに協力しながら共通の目標に向かって、楽しみながら学校を活性化させていく取組みとした。

児童や学生たちの主体的な活動に刺激を受け、併設されている保育所と合同で全校でラジオ体操を実施するなど、学校としての新たな取組みも始まった。そのなかで、最も象徴的であったのは、運動会を体育専攻の学生ボランティアと一緒に準備・練習段階から企画し児童や地域と一緒に創り上げていったことである。

プログラムの中には学生が主催し、体育専攻の学生と50メートル走を競う種目「和大学生と走ろう」や地域の人や参加者を借りてくる「借り人競争」、児童の種目への学生チームの参加など、毎年種目を変えながら企画してきた。現在では、多くの人に参加し運動会を通して、児童のがんばりと身体を動かすことの楽しさや人とのつながりが感じられる場となっている。

このように、「体づくり」を軸にした大学や地域との連携を進めていくことで、体力測定の数値に改善がみられたのではないかと推察できる。

こうした取組みを進めるにあたって大切なことは、

- ① 体づくりが継続的な活動となるために、児童が楽しみながら主体的に取り組めるようにすること
- ② 児童と一緒に楽しんで取り組むメンバーを増やすこと

の2点が挙げられる。

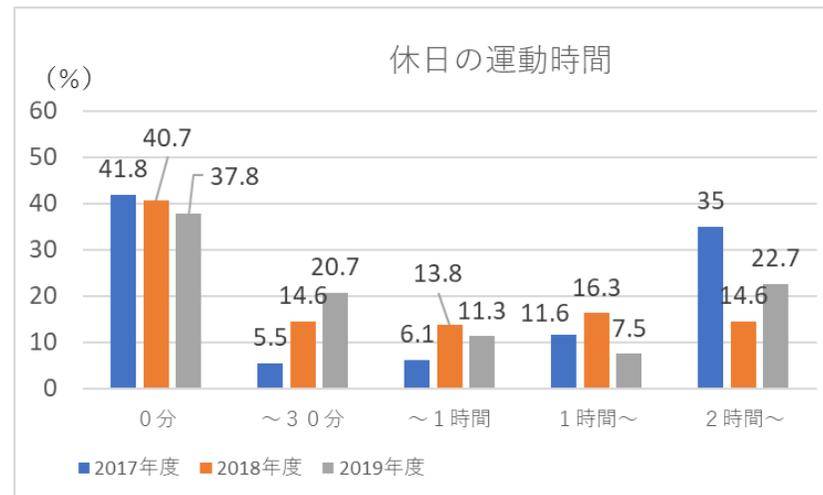
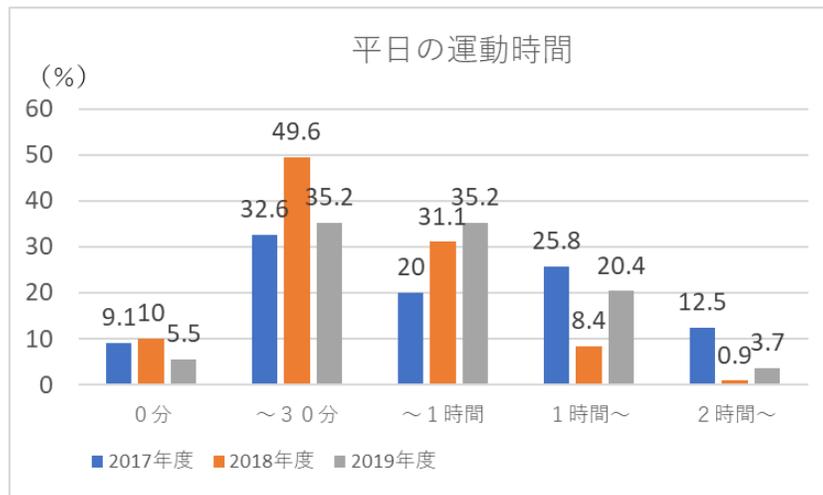


「ひと・まち・つながる」体づくりの取組みを進めると同時に、児童の運動時間に関する実態を把握するために調査を行った。下図は、平日と休日の運動時間の変化を示している。運動時間は体育の授業は含まないが、放課後や休み時間に外遊びをすること、運動系の習い事は運動時間に含めている。特徴的なことは、休日の運動時間において「0分」が圧倒的に多いことである。

これらのデータを基に、職員間で客観的に児童の運動時間が把握できたことで、体育委員会などの委員会活動を通じて、児童にこうした課題をどのように解決していくことができるのかを問いかける材料となり、体育の授業改善や休み時間の使い方の改善のための指標となった。



外遊びの工夫



### (3) 「ひと・まち・つながる」健康教育



これまで、健康教育の充実を養護教諭を中心に行ってきた。

年間2回実施している生活習慣調査は、子どもたちが自分自身の生活習慣の課題を見つけやすいように、時間軸利用の研究手法をもとに、テレビやスマホ等、自分たちが使った時間を数直線上に記入していくように工夫し、生活習慣を「見える化」した（右図参照）。

単純に決めた時間を守るということよりも、自分自身がどのように1日の時間を使っているのかをふり返って自身を客観視することを主目的とした。これは本人だけでなく、保護者や教員にとっても「朝起きてからすぐにスマホを触っているからやめておこう」といった具体的なアドバイスにつながり、児童にとってもわかりやすくなり生活習慣の改善につながった。

自分の生活を記録しよう！

1. 自分の生活の目標を決めよう。(例) 10時までに寝るぞ! 毎日少しでも運動する。

目標 少しでも運動をした!!

2. 今日の朝起きた時間と、昨日の夜寝た時間に○をしましょう。  
3. スマホ・テレビ・ゲームの時間に線を引きましょう。(例)

6月18日(月)～6月24日(日)

日	朝	昼	夜	スマホ・テレビ・ゲームの時間合計	4. ごはんを食べた		5. 体を動かす運動、遊びをした					1日の運動時間の合計を書きましょう
					朝ごはん	夜ごはん	大休	休	休	休	休	
月	7:30	12:00	21:00	30分	○	△	○	○	X	X	0	30分
火	7:00	12:00	21:00	30分	○	○	○	○	X	X	0	30分
水	7:00	12:00	21:00	30分	○	○	X	X	X	X	0	0
木	7:00	12:00	21:00	30分	○	○	X	X	X	X	0	0
金	7:00	12:00	21:00	30分	○	○	○	○	X	○	0	10分
土	7:00	12:00	21:00	30分	○	X	X	X	X	X	0	0
日	7:00	12:00	21:00	30分	○	○	X	X	X	X	0	20分

目標達成は  できた  できていた  あまりできなかった  できなかった

6. 自分の生活を振り返って、より元気に生活するために次はどうしたらいいか書きましょう!

もう少し運動する時間と、楽しい運動の人はたくさん集まる。

テレビ! 早く寝た方がいいかも

生活習慣調査用紙

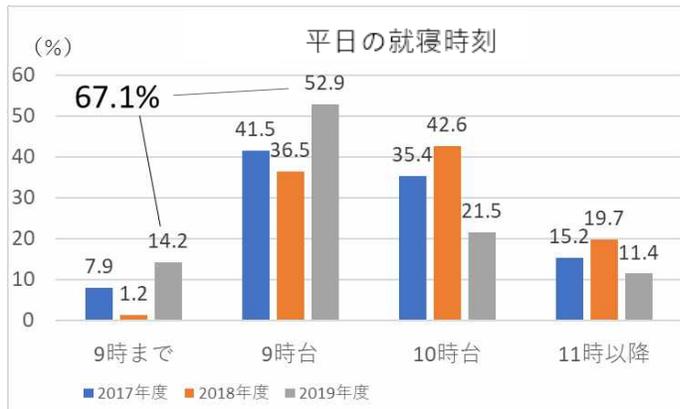
和歌山大学附属小学校と連携し、健康教育を積極的に取り組んでいる養護教諭による出前授業を実施した。内容としては、歯磨き指導や自分の体を守ること、また、生活習慣の改善について、児童が学び合いながら主体的に考える授業を実施した。

下図は生活習慣調査における平日と休日の就寝時刻の変化を示している。令和元年度には平日午後9時台までに67.1%の児童が就寝することができるようになった。生活習慣の乱れやすくなりがちな休日の就寝時刻も午後9時台までの就寝時刻が54.6%に増加していることがわかる。

委員会活動を積極的に活用し、全校集会で劇をしたり、隣接する保育所へも出前授業をするなど児童の活動の場を広げ、健康教育に日常からかかわる意識を持てるように工夫した。他者との交流を楽しみつつ、客観的な分析を用いることで、児童自身が生活習慣を改善し、維持するきっかけとして機能していると推察できる。



和歌山大学附属小の養護教諭による出前授業



保育所・小学校連携

## (4) 「ひと・まち・つながる」食育

これまでも食育を実践してきたが、学習内容の整理をし、地域の人的・物的資源を生かした系統立てた学習に改編することにした。そのポイントは、

- ①地域の自然環境や文化を活かし、児童が生産から消費までをできるだけ実感できる食育学習にすること
- ②地域の人材を積極的に活用し、生産者の顔が見えることで食育が地域の人とのつながりによって支えられていることを実感すること
- ③学校側だけでなく、参加した誰もがWIN－WINの関係を作れるようにすること

の3つである。

これまで、地域の協力で栗拾いやひらめの稚魚放流等の体験学習は行っていたが、それらを1・2年生は生活科、3～6年生は総合的な学習の時間を中心に、6年間の中で系統立てて学習する食育や地域学習として位置づけた。次頁の図6は、行事と対応する教科をまとめたカリキュラム・マネジメントの計画表である。

ひらめの稚魚 体験学習



栗拾い



図6. ひと・まち・つながる教育におけるカリキュラム・マネジメント年間計画

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	地域
4月	給食指導(生活)		岬のええとこ 発見だ	見つめよう 私たちの暮らし	自分たちの食に ついて見つめ、 できることを考 えよう	ひと・まち・ つなげよう	
5月	梅採り(生活・国語)	潮干狩り(生活・国語)	梅採り(総合・理科・国語)				地域の方(梅園管理者)
	生活習慣調査(生活)	体力測定・生活習慣調査(保健・体育)					体力測定 (ボランティア・和大使)
6月	田植え(生活)		田植え(総合・理科)		田植え(社会・総合)	田植え(総合・理科)	地域の方(水田管理者)
	梅干しづくり(生活・国語)	梅干し・梅ジュースづくり(総合・理科・国語)					地域の方(梅園管理者)
7月			稚魚放流(理科・総合)				
8月	折り鶴作成・平和登校日						
9月	稲刈り(生活)		稲刈り(総合・理科)		稲刈り(社会・総合)	稲刈り(総合・理科)	地域の方(水田管理者)
	栗拾い(生活・図工・ 国語)		ふれあい喫茶(音楽・総合)		ふれあい喫茶(音楽・総合)		
10月	運動会(体育)						
	手まり寿司づくり(生活・国語)		手まり寿司づくり(総合・国語)		手まり寿司づくり(総合・家庭科)		手まり寿司づくり 学校ボランティア
11月	ふれあい喫茶(音楽・生活・道徳)		ふれあい喫茶(音楽・総合)		深日漁協見学(社会・総合)		
12月	深日交流発表会(ひと・まち・つながる教育)						
	音楽発表		みさきめぐり (社会・総合・外国語)	見つめよう私たちの暮らし (社会・総合・理科)	食の安全 (社会・総合)	逆言葉 (総合・国語・社会)	町長・町議会議員 岬町教育委員会 保護者 地域の方
1月	保幼小交流(生活)		昔の暮らし(社会・総合)				
2月	生活習慣調査(生活)	生活習慣調査(保健)					ふれあい喫茶(国語・総合)
3月							

深日小の年間行事と各学年の学習内容をもとに岡田作成

計画表では、

- ① 体づくり
- ② 健康教育、生活習慣調査、運動会
- ③ 食育・地域学習領域の食育領域  
(栗拾い、潮干狩り、ひらめの稚魚放流、  
ひょうたんづくり、米作り、稲刈り、  
手まり寿司づくり、梅採り、梅干しづくり、  
梅シロップづくりなど)の3つに大別した。

これらの学習を教科等横断的な視点からカリキュラム編成した。栗拾いやひらめの稚魚放流などの単年度で完結する取り組みもあれば、田植え、稲刈り、梅採りなどのように経験の蓄積を学習の軸に据えて6年間、体験し続けるものもある。



# <「ひと・まち・つながる」食育の主な取組みのつながり>

学年単位で実施  
する取組み

1年生  
栗拾い



3年生  
ひらめの稚魚放流 体験学習



6年間学び続ける取組み



梅採り・梅干し  
梅シロップづくり  
体験

縦割りで異学年交流を  
しながら活動できること  
もメリットになる



米作り  
稲刈り体験

①地域の自然環境や文化を活かし、児童が  
生産から消費までをできるだけ実感できる  
食育学習にすること

②地域の人材を積極的に活用し、生産者の顔  
が見えることで食育が地域の人とのつながり  
によって支えられていることを実感すること

③学校側だけでなく、参加した誰もが  
WIN-WINの関係を作れるようにすること

過去の体験から学びをつなぐ



5年生 深日漁協見学

収穫したものを全児童が  
地域の方と一緒に味わう



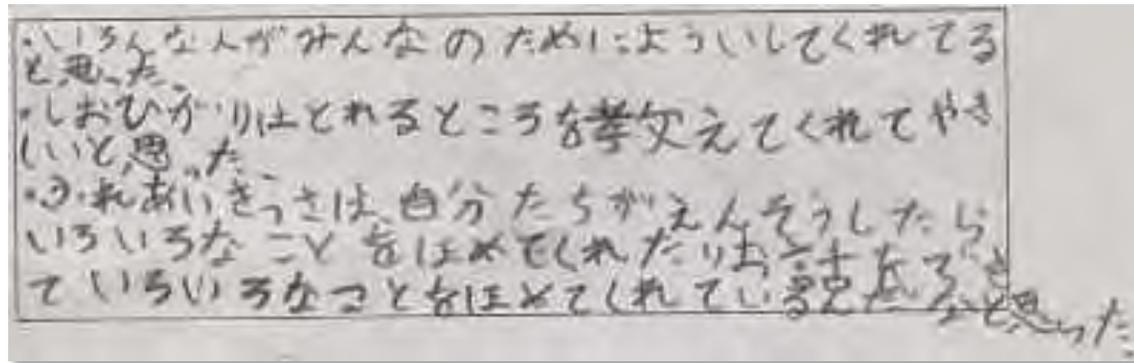
手まり寿司  
づくり

「ひと・まち・つながる」学習の  
まとめ&発表

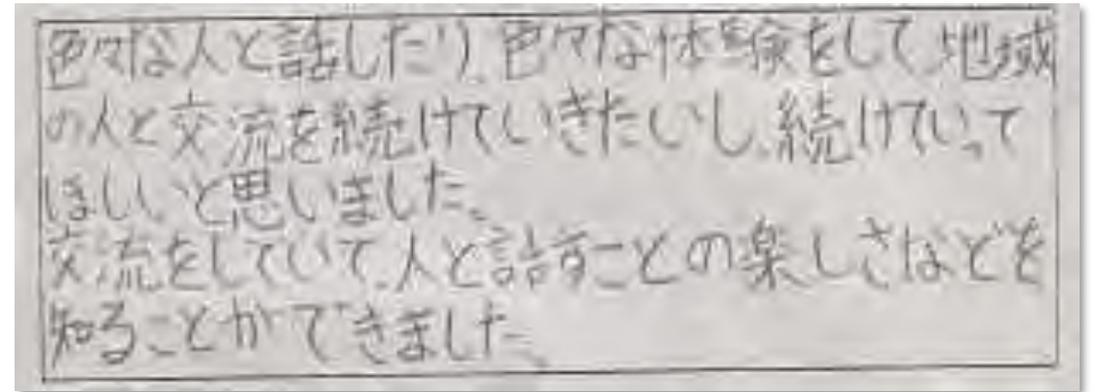
前ページで図示したように、地域の人的・物的資源を生かした系統立てた学習を進めるために、①～③の3つのポイントを常に意識しながら、学校全体の食育に関する取組みのつながりを整理することができた。

この2年間の研究において、カリキュラム・マネジメントを意識した計画の見直しをする際に、教員が学年間の学びのつながりを意識することができるようになった。また、地域の方との連携を進めるにあたって、学校と地域が同じねらいを共有しながら取り組むことができ、従来から取り組んできた様々な取組みの価値を高めることができた。

それは、下記の児童の感想からも、ねらいとしていた①～③の3つのポイントが子どもたちにも浸透したことがうかがえる。地域の特性を生かした交流によって新しい気付きや発見が生まれていることがわかる。



↑「いろいろな人がみんなのためによいしてくれてると思った。しおひがりとはれるところを教えてくれてやさしいと思った。ふれあいきっさは、自分たちがえんそうしたらいろいろなことをほめてくれたり、お話をできていろいろなことをほめてくれるんだなと思った」



自分たちのふだんの生活の中にあり、人口減少・少子高齢社会の影響による自分たちの住む町の社会的な課題を児童と掘り下げること、地域を知り、見つめなおし、社会全体で考えていける取組みとなったのではないかと考えている。

## (5) 「ひと・まち・つながる」教育のひろがり

これまで紹介してきた「ひと・まち・つながる」体づくり、健康教育、食育だけでなく、岬町や深日地区の課題にスポットを当てた学習も実践してきた。

町内を走る南海電鉄多奈川線とコミュニティーバスは高齢者の生活に欠かせないものである一方、利用者の減少は著しい状況にある。これらを3・4年生の児童を中心に子どもたちのアイデアで活性化させるプロジェクト学習を南海電鉄、岬町総務部、ふるさと創造部、岬町教育委員会生涯学習課、プロの歌手、関西大学文学部地理学地域環境学の教授、龍谷大学社会学部の教授らなどと協働して実施した。令和元年3月に深日港駅前でイベントを開き、平日の午前中にもかかわらず100人近くの来場者があった。

また、令和元年度には、深日地区のみに伝わる漁師の方言である「逆ことば（さかことば）」をテーマに学習を深めた。深日独自の方言である「逆ことば」は、大きいものを「小さい」、多いものを「少ない」と表現するなど非常にユニークで特徴的である。そのため、関西のメディアでもたびたび取り上げられてきた。しかし、その使い方や用法の真意には、決して相手を傷つせず、仲間意識を高めあうために使うという背景があることは、ほとんど知られていない。こうした豊かな言語文化も継承者が著しく減っている現状にある。「逆ことば」に詳しい地域の方や、富山大学人文学部の教授らの協力を得て、聞き取り学習をし、「逆ことば」の現状について分析し、その成果を劇として地域で発表するなど、学習の成果を社会還元させる取組みにつなげることができた。



## 深日地区民生委員の方の感想

地域の方からは、「ふれあい喫茶（※）への（ご高齢の方の）増加が見られ、喫茶に活気があふれるようになった。以前はコーヒーをのんで早々に帰られていた人達も長時間の滞在が見られ、生徒とのふれあいを大切に感じます」や、「子供たちがふれあい喫茶で歴史や国際交流についての劇や発表をしているとき、年齢差を越えて同時体験しているような気持ちになる人もいます」（右図参照）とあるように、学習の成果が児童だけでなく、地域の高齢者にも還元されていることから、少子高齢化している地域の活性化につながっているといえる。

深日小の場合、効果的な学習を進めるにあたって、重要な役割を果たしたのが岬町の生涯学習課と岬町社会福祉協議会である。両者とも「生涯学習」というテーマを持つことから、学校とご高齢の方を結ぶ橋渡し役となり、町内外の団体やグループとのパイプ役となってくれた。また、生涯学習課の持つイベント運営力、社会福祉協議会の持つ公益性と地域に根差した活動は学校の持つノウハウとは違ったものであったことから、連携を深めたことで両者がWIN-WINの関係を築くことができた。

ふれあい喫茶への参加者の増加が見られ  
喫茶に活気があふれるようになった。以前は  
コーヒーをのんで早々に帰られていた人達も  
長時間の滞在が見られ  
生徒とのふれあいを大切に感じます

子供たちがふれあい喫茶で歴史や国際交流について  
劇や発表をしているとき、年齢の差を越えて同時体験して  
いるような気持ちになる人もいますと聞いています



※「ふれあい喫茶」とは、社会福祉協議会と地区福祉委員会が運営している子どもから大人まで集える居場所（コミュニティカフェ）のことである。月1回実施され、小学生も参加して、年間通じて世代間交流を行っている。

## 2. 取組みの成果について

### (1) 子どもたちの変容について

右表は「地域の人や大学生との交流はあなたにとって良い経験でしたか」という問いを、3年生以上にアンケート調査した結果である。全体の98.1%が肯定的な回答をしている。その上で、カリキュラム・マネジメントの軸である「ひと・まち・つながる教育」を通して、児童の気付きや学びの深まりについて考察したい。

右及び下に示したのは、3年生と6年生の感想である。平成26年度入学の6年生は学校の変革を体験してきた学年である。

3年生と比較すると、他者との交流を通して、相手が喜ぶことが自分の喜びに変わり、自分たちの自己肯定感や新たな気付きへとつながっていることがわかる。

自分が高齢者にな、たとき、交流があると楽しい人生をおくれると思う。ちょっとの交流だけでも楽しいと思、てくれたらうかしい。

#### <3年生児童の感想>

「くりひろいでは、いのししがくりを食べるとは思わなかったです。ひらめのちぎよほうりゅうは魚のしゅるいはな(ん)百びきもいるとおしえてくれました。」

「くりひろいでは、いのししがくりを食べるとは思わなかったです。ひらめのちぎよほうりゅうは魚のしゅるいはな(ん)百びきもいるとおしえてくれました。」



高齢者にな、れあえるきかいがたぐさんあるので、地域のことをよく知れる。高齢者と話しているで、心がおろつくことができるの。自分が

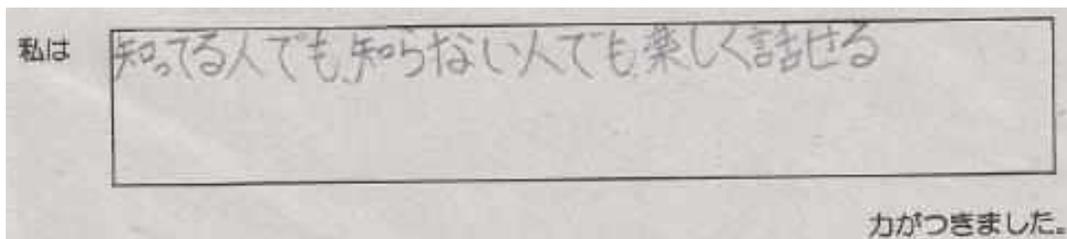
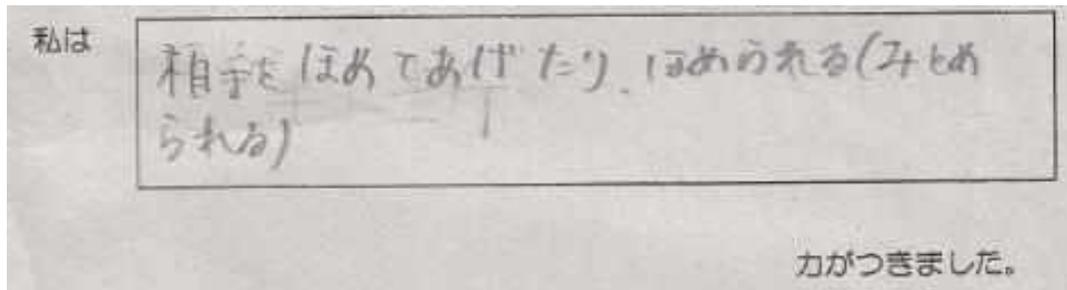
#### <6年生児童の感想>

地域の人や大学生との交流はあなたにとって良い経験でしたか

学年	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
3年	7	4	0	0
4年	15	2	1	0
5年	6	0	0	0
6年	19	0	0	0
計	47	6	1	0
%	87%	11.1%	1.9%	0
	98.1%		1.9%	

児童へのアンケートをもとに岡田作成

「ひと・まち・つながる教育」を通して、自分自身にどのような力がついたのかを子どもたち自身でふり返った結果、人とつながることの楽しさや他者への敬意を自発的にできるようになったことがわかる。地域の人材や資源を有効活用したことで深い学習につながった結果、自尊感情や他者への共感、地域を見つめるまなざしも育成されてきていることがみてとれる。  
(右資料参照)



6年生児童の感想

こうした学習への前向きな気持ちは保健室の来室者数の減少に顕著に表れている。右表は年度別の保健室来室者数を示している。平成27年度と比較すると1423人から447人へと約70%も来室者数が減少したことがわかる。

これは、「ひと・まち・つながる」体づくりや健康教育、食育の取組みによって、子どもたちがケガしにくい体をつくることができたり、健康的な生活習慣が身に付いたりした結果であると考えられる。

保健室来室人数

年度	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
平成27年度	101	136	147	82	204	155	124	139	78	144	113	1423
平成28年度	128	152	116	47	121	86	96	92	60	90	73	1061
平成29年度	93	87	87	34	83	62	56	60	60	76	30	728
平成30年度	50	67	60	23	51	59	54	34	46	61	49	554
令和元年度	57	52	46	28	74	45	31	32	36	46	—	447

※数字は人数

※8月の授業日数が少ないため7月に合算

※令和元年度3月はコロナウイルスによる休校のため集計なし

## (2) まとめ

「ひと・まち・つながる」教育によって、児童や教職員は教室を出て、様々な人との交流や経験を通して知識や技能を身につけ、学校での学習活動の充実へと往還させてきた。効果的な学習にするためには、教職員が地域の人的・物的資源をどのように捉え、把握し、つながるのか、そして、様々なつながりをどのように織りなしていくのかが最大のポイントであった。

学校と地域との連携を進めるにあたっては、日頃から、子どもたちのために学習できる環境はないかとアンテナを張って、積極的に外部とのつながりを求めていくことが大切である。時には、厳しいご意見をいただくこともあったが、真摯に受け止め、前向きに進めていくことで、少しずつ学校の取組みを理解してくれる輪が広がっていった。その土壌づくりをあきらめずにできるかどうかポイントとなる。そうした人と人とのつながりの中で、じっくりと時間をかけて信頼関係を築きながら、「**子どもたちにこんな力をつけたい!**」という思いを共有して、**めざす子ども像を一緒に考えて進めていく**ことで、効果的な連携ができると考えている。

### 最後に…

※こうした学校と地域の取組みの発信が評価され、令和2年3月からスポーツニッポン（株）との共同企画で、「このゆびと～まれ」と題して、本校の活動内容を定期連載で配信することになった。

学校の取組みと変容について地域の方だけでなく、より多くの方々に知っていただく機会として情報発信に努めている。人口減少・少子高齢社会は深日地区のような比較的都市部に近い地域でも深刻な問題であり、深日小の取組みを全国に向けて発信することで、児童数の減少・人口減少・少子高齢社会といった課題を共有する多くの自治体や小学校の活性化のヒントになってほしいと願っている。

このゆびと～まれ

【第23回】地域のご高齢者の方々とのかかわりを通して

[ 2020年8月3日 05:00 ]

いいね! 0 | コメント | ツイートする



深日【ふけ】小では、18年度から「ふれあい喫茶」という集まりに参加させてもらっています。町町社会福祉協議会が中心になり、地区の会館にご高齢の方たちが、ほぼ月1回のペースで集まり交流するイベントです。

各学年が順番に伺わせていただき学習した内容の発表や、聞き取り調査などを行っています。

歌や言談、劇や出しものだけでなく、自分の得意なものなど何を披露してもかまいません。「見てもらおう」という機会が少ない児童たちにとって

参加された方の数を見てください。子どもたちが行くことで30人近く集まって下さるようになりました  
Photo by スポニチ

## 第3章

# カリキュラム・マネジメントの実現のための 参考資料集

第2章「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた実践事例とその工夫について」でご紹介した各校の作成資料を、ジャンルごとに分類してダウンロードできるようにしましたので、ぜひご活用ください。内容の詳細については、第2章の各校の取り組みのページを参照してください。

### <留意点>

- 各資料は、二次元コードよりアクセスし、ダウンロードすることができます。各校の実態に合わせて加工していただいても構いませんが、学校HPに掲載する等、データの再配布はしないでください。
- 各校において、本章に掲載された資料を活用いただく際に、資料を作成した当該校に問い合わせをしたり、使用許諾を求めたりする必要はありません。

## 第3章 カリキュラム・マネジメントの実現のための参考資料集

### 1. 「計画（Plan）」に関する参考資料

- (1) カリマネ表（単元配列表）を作る
- (2) 単元の評価規準等を明確にする

### 2. 「授業」に関する参考資料

- (1) 指導案を改善する
- (2) ワークシートを工夫する

### 3. 「評価（Check）」に関する参考資料

- (1) 教職員が授業について相互評価をする
- (2) 子どもたちの変容を知る

### 4. 「情報共有・発信」に関する参考資料

- (1) 教職員・子どもが意識を共有する
- (2) 校内・校外に向け通信を発行する

# 1. 「計画 (Plan)」に関する参考資料

## (1) カリマネ表 (単元配列表) を作る

令和2年度 熊取町立西小学校 5年 カリマネ表 (食育に係る教科・領域・単元について)

学校教育目標 自ら学び、心豊かにたくましく生きる子どもの育成～一人ひとりが輝く学校づくりを通して～ めざす子ども像 ・すずんでる子 ・なごよする子 ・元気な子

食育でつなげるとこうなるけど 研究教科(理科)ではどうなる?

職員全員で取り組むと職員同士の コミュニケーションが図れる。

熊取町立西小学校 P.7



それぞれの取組みを教科等横断的な視点でつなげ「見える化」し、6年間を通して系統立てながら考えた。

令和2年度 1年 年間目標 「みんなが学び、みんなが成長しよう」

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事(特記)	校外学習(アラインメント)											
総合	環境学習											
外国語												
国語												
算数												
社会												
理科												
音楽												
図工												
体育												
道徳												

和泉市立北池田小学校 P.11



国語科を要とした教科横断的な視点を広げられるよう、単元を提案・公開した。また、グランドデザインの作成、見直しを図った。

図6. ひと・まち・つながる教育におけるカリキュラム・マネジメント年間計画

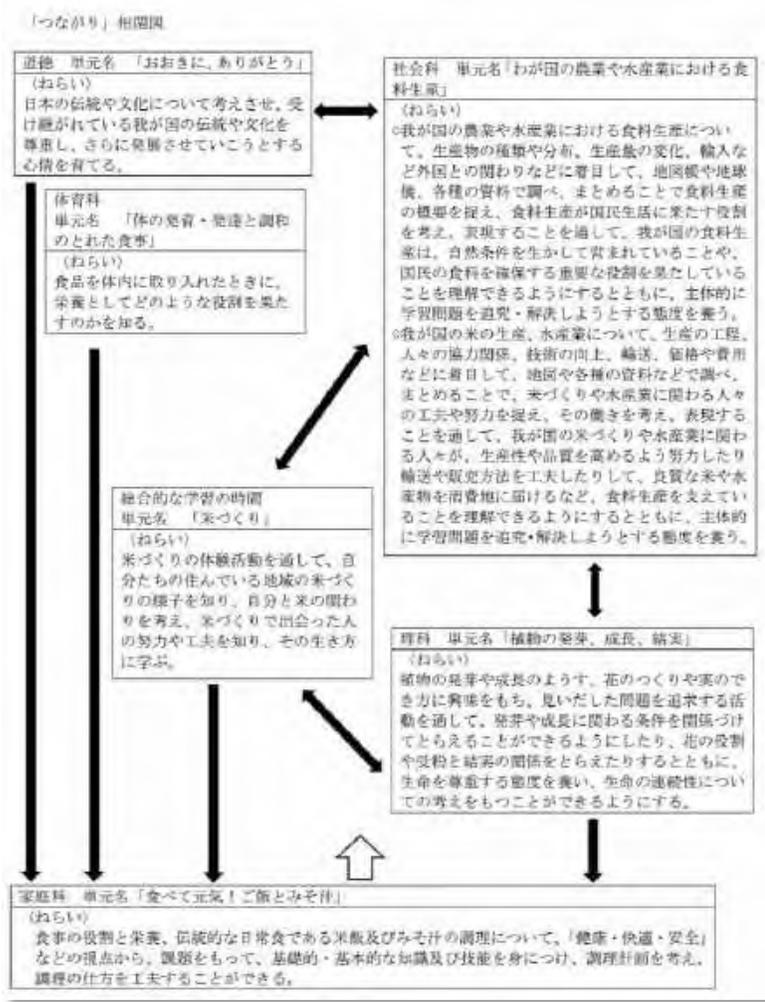
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	地域
4月	給食指導(生活)		神のええとこ発見だ	見つめよう 私たちのくらし	自分たちの食について見つめ、できることを考えよう	ひと・まち・つなげよう	
5月	梅採り(生活・国語)	源干狩り(生活・国語)					地域の方(梅園管理者)
6月	生活習慣調査(生活)		体力測定・生活習慣調査(保健・体育)				体力測定(ボランティア・和大使)
7月	梅干しづくり(生活・国語)		梅干し・梅ジュースづくり(総合・理科・国語)				地域の方(梅園管理者)
8月			椎魚放流(理科・総合)				
9月	稲刈り(生活)		稲刈り(総合・理科)	稲刈り(社会・総合)	稲刈り(総合・理科)		地域の方(水田管理者)
10月	手まり寿司づくり(生活・国語)		手まり寿司づくり(総合・国語)	手まり寿司づくり(総合・家庭科)			手まり寿司づくり学校ボランティア
11月	ふれあい喫茶(音楽・生活・道徳)		ふれあい喫茶(音楽・総合)	深日漁協見学(社会・総合)			
12月	音楽発表		みさきめぐり(社会・総合・外国語)	見つめよう私たちのくらし(社会・総合・理科)	食の安全(社会・総合)	逆さ言葉(総合・国語・社会)	町長・町議会議員 神町教育委員会 保護者 地域の方
1月	保幼小交流(生活)		音のくらし(社会・総合)				
2月	生活習慣調査(生活)			生活習慣調査(保健)		ふれあい喫茶(国語・総合)	
3月							

深日小の年間行事と各学年の学習内容をもとに岡田作成

岬町立深日小学校  
P.10・11



各学年の取組みを、「体づくり」・「健康教育」・「食育」の視点で、教科等横断的な視点からカリキュラム編成した。  
学年単位で実施する取組みと、6年間学び続ける取組みのつながりが明確になった。



熊取町立西小学校  
P.12



年間指導計画を俯瞰的に捉え、さらに学年の教員で「食に関する指導」に係る単元等を線でつなぐことにより、教科間の学習内容・単元の「ねらい」のつながりの相関が「見える化」できた。

### 1. 「計画 (Plan)」に関する参考資料





問題解決的な学習の展開

臓器移植を巡る迷いをもとに生命の尊さについて問題解決的に学習する展開である。中学生の時期は、身近な人の死に接したり、自分の命のありがたさを感ぜたりする経験がまだ少ないと考えられる。臓器移植を通じて自分や身近な人の生命について深く考えさせることで、生命のかけがえのなさを、尊重する態度を深めたい。

学習指導過程 総時数：約5分	導入 展開 終末	実物の臓器提供意思表示カード 臓器移植の手術を受けた人の写真など
	学習活動	
導入 5分	1 臓器移植について知る。 疑問①臓器移植や臓器提供意思表示カードについて知っているか、 臓器提供意思表示カードの具体物を見せる。(教師書)	相違上の留意点【発問の意図】 ○臓器移植に関する知識の共有化を図る。適宜、感傷についてなど情報を補足する。
展開 15分	2 教材「臓器ドナー」を読み、考える。 疑問①【問題をつかもう。】臓器移植を巡っては、どんな迷いや問題があるだろう。 - 生と死について。 - 臓器はほしいが、あげたくない。 疑問②【自分で考えてみよう。】自分の意思を臓器提供意思表示カードに書き込んで、班で意見を交換しよう。 - 自分の大切な臓だから、自分勝手ではないと思う。 - 大切な臓だから、なくっても大切にしたいから。 ★疑問③【問題について考え、議論しよう。】臓器提供の意思表示をしていない家族が脳死した場合、臓器提供することができるか、できないか、また、その理由を書いて、班で交換しよう。 - 班で紙に意見をまとめる。 - 班で意見をまとめた後、他の班の紙を見に行く。	○教材を読んで感じたことを書きながら、以降の発問で自分の経験（自分事）として考えられるようにする。 ○生命に関する判断は重く難しいものであり、だから生命のかけがえのなさについて深く日覚し尊重することが必要であり、正しい答えなどないことに気づかせる。 ○自分の命だけではなく、大切な人の命についてもどう判断するかを考えさせることで、生命尊重に繋がって自分なりの道徳的判断に意欲が向くようにする。 ○班で意見を共有し、互いの考えを理解し合う。
終末 5分	3 今日の学習を振り返る。	○教材中の人物や友達など、生命に対するさまがまな御伽帳に触れたうえで、今の自分の生命に対する思いを振り返らせた。

臓器ドナー

● 生計に意思表示。

● 臓器提供意思  
表示カード

● 臓器移植を巡る迷いや問題

- 生と死について。
- 臓器はほしいが、あげたくない。
- 自分の命とほかの人の命。

16	自他生命の尊さ 臓器ドナー	教科書 96～99ページ
<p>（1、2、3、いずれかの番号を○で囲んでください。）</p> <p>1. 私は、<u>脳死後及び心臓が停止した死後のいずれも</u>、移植のために臓器を提供します。</p> <p>2. 私は、<u>心臓が停止した死後に限り</u>、移植のために臓器を提供します。</p> <p>3. 私は、臓器を提供しません。</p> <p>（1又は2を選んだ方で、提供したくない臓器があれば、×をつけてください。） 【心臓・肺・肝臓・腎臓・膵臓・小腸・眼球】</p> <p>（特記欄： 署名年月日：____年 ____月 ____日 本人署名（自筆）：_____ 家族署名（自筆）：_____</p>		

**考えてみよう** 臓器提供の意思表示をしていない家族が、脳死した場合、臓器提供しますか？

【 はい ・ いいえ 】  
理由

**振り返り** 今日の学習で気づいたことや考えたことをまとめてみよう。

自分への振り返り ○印をつけよう。

今日の授業の内容は	印象に残った		印象に残らなかった
友達の見聞や話し合いから、新しい発見や気づき	あった		なかった
自分の考えを深めることが	できた		できなかった
これから大切にしたいことが	わかった		わからなかった



指導案データ



ワークシート

「表現力」「コミュニケーション力」を教科等横断的に育成していくことをめざし、4人班を基本とした学習形態を推進し、考えたアイデアを書き出すことができるよう、各班に1枚のホワイトボードを活用した授業づくりを進めた。その際の指導案とワークシートである。

○本時の評価基準

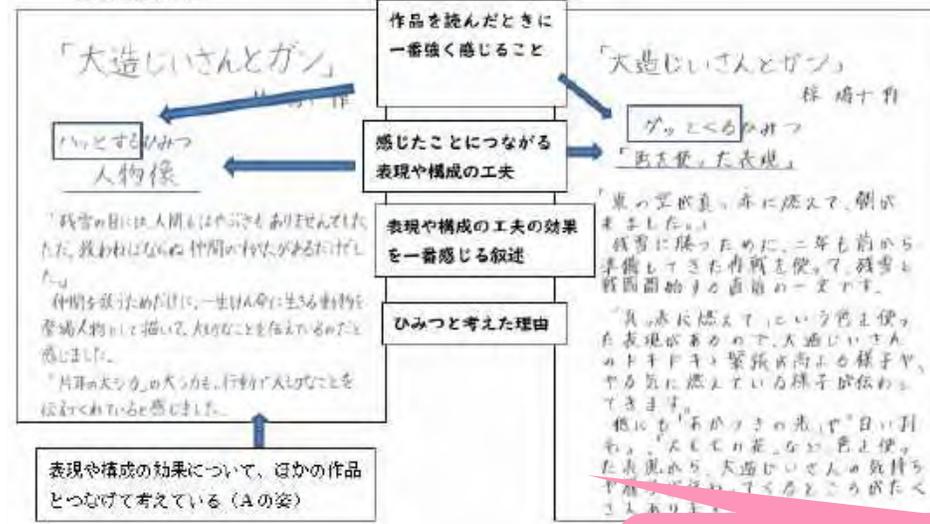
- 自分が選んだ本の人物像や物語の全体像を具体的に想像し、読んだときに感じたことをまとめている。【読むことエ】

具体的な子どもの姿

指導者の発問や声かけ

時間	主な学習活動	指導上の留意点	【観点】評価規準 (評価方法)
5	単元のゴールと今日のめあてを確認する。 自分の選んだ作品の〇〇のひみつを紹介しあう	・何のための一時間なのか、本時とゴールのつながりを意識させる。 単元のゴールでは何をしますか？	
	自分が選んだ作品の疑問や聞きたいことを考えて交流し、自分なりの考えを持とう		
5	自分が紹介したい作品を読んで、疑問や確かめたいことを考え、付箋を貼る。 【付箋を貼る視点】 ・どうして？(疑問) ・これって…(確かめたい)	・同じ作品を中心にグルーピングしておく。 ・疑問や聞きたいことが思い浮かびにくい児童が予想されるので、個人で学習する時間の配分に配慮する。	
10	疑問や聞きたいことが思い浮かばなかったら友達に聞いてみる 【思い浮かんでいない児童】 「どこに線をひいたの？」 「どうして？」 【疑問に対して自分の考えをもつ児童】 「それはこういうことじゃないかな」	・友達に聞いて疑問が生まれたら線を引いて付箋を貼るようになる。 ・交流の中で疑問に対する答えを見つけた場合は、付箋に書いてノートにはらせる。	
15	疑問や確かめてみたいことを交流して、自分なりの考えを持つ ・「どうしてこんなことしたんやろう？」 ・「自分はこう思っているんだけど、どうかな？」 -「〇〇さんは、どう？」	・交流の状態によって、グループ以外の児童と交流させる場面も想定しておく。その際、目的に合わせて交流できるよう、だれがどの本を読んでいるのか、一目でわかるように名簿を掲示しておく。	
10	自分が紹介する作品を読んだときに感じたことをまとめる 「自分が選んだ作品は〇〇のお話です。なぜなら～」	・作品を読んで感じたこととその理由を書くて、次時のひみつを探す活動につなげるようにする。	・自分が選んだ作品の人物像や物語の全体を具体的に想像することができる 【読むこと エ】 (ノート)

○言語活動モデル



言語活動の内容が伝わるように具体的に示す。  
(例)  
・どこで、どのようなことを表現させているのか  
・どこで、どんな力を見取るのか など

和泉市立北池田小学校  
P.14・15

質の高い言語活動を実現するために、年度途中に次年度の指導案モデルを検討し、次のような内容を記載する形にリフォームした。

- ・並行読書材について
- ・言語活動モデル
- ・具体的な子どもの姿 等

リフォーム後の指導案には単元で児童が作成した成果物や単元の振り返り、単元後のアンケートの集計結果なども載せることにした。これを次年度の校内研究の指導案に生かせるように内容を検討し、次年度の指導案モデルの作成を行った。

## (2) ワークシートを工夫する

### 令和2年度 1年生総合学習

( )組( )番 名前( )

#### 1. 予想を立てて、仮説を立てよう!

総合学習では、

- ① 予想を立てる ⇒ なんでかな?こうかな?
- ② 仮説を立てる ⇒ きっとこうしたら解決できる!
- ③ 調べる ⇒ 本当かな?確かめよう!
- ④ 自分の意見を持つ ⇒ こうしたらいいんだ!
- ⑤ 発表する ⇒ こうなんです!!

という、流れて学習を進めます。

**練習** 曲がったキュウリがあるのはなんでだろう?

(予想)キュウリが曲がる理由は

(仮説)きっとこうしたら曲がらない!

#### 2. SDGsのゴール16について知識を深めよう!

YouTube 動画・・・「SDGs目標16平和と公正をすべての人に。優しい気持ちで平和をつくる!」

### 令和2年度 1年生総合学習計画

1. 事前学習  
休校中の学年の課題でSDGsゴール16、技術・家庭科にてSDGs環境面について学習済み
2. 1学期の学習目標
  - ① SDGsについて知る ⇒総合開きて学習済み
  - ② 探究的な学習の方法(特に「課題設定」と「仮説を立てる」ことの大切さ)を理解する
3. 1学期の学習内容
  - ① SDGsの目標16を利用した探究活動 10h ⇒無理なので6h+2学期
  - ② 夏休みを利用して企業訪問 ⇒コロナで無理なので諦める
4. **新**1学期の学習内容
 

① 用意されたゴール16に関する8つの課題設定から選ぶ	1学期中の授業で
② 班でその課題が起きている理由を予想する(道筋をたてる)	
③ 班で課題解決に向けた仮説を立てる	夏休みの課題
④ 調べ学習で探求する	
⑤ 自分の考えを述べる	
⑥ 班で協力してポスターを作る/ワールドカフェ方式で発表	2学期中の授業で
5. 設定する課題を班で1つ選択する
  - ① 違法な武器の取引はなぜ起きる?
  - ② 出生登録を含む法的な身分証明が発行されていない国があるのはなぜ?
  - ③ テロリズムの撲滅に対して日本はどんな対策をしている?
  - ④ 内紛が起きる原因ってなんだろう?



1年間の総合的な学習の時間の計画に基づき、各教科の授業において育成した資質・能力を、どのように総合的な学習の時間につなげることができるのかを意識して、ワークシートを作成した。



学習計画



ワークシート

# 3. 「評価（Check）」に関する参考資料

## (1) 教職員が授業について相互評価をする

**授業参観シート**

日時：( )月( )日( )時間日  
 授業者：( )先生 教科( )  
 参観者：( )

① 11月6日公開授業で1回参観してください。  
 ② 11月2日～11月13日までの期間で1回以上参観してください。

**「中がめざす子どもの姿」** 学校グランドデザイン

- 学んだこと、経験したことを生かして自ら設定した課題を解決している
- 自分の考えや思いを他者と交流することで学びを深めている

① 授業を見る観点を下の表から選んで参観してください。(すべてに記載する必要はありません)

観点	見つけた工夫やアドバイス
生徒が主体的に学習をすすめている工夫	
他者と交流することで学びを深める工夫	
生徒同士がつながりを持つ工夫	
生徒の学びを定着させる工夫	
板書の工夫	
生徒の学びを深める発問の工夫	
課題(プリントや教具)の工夫	
個に向けた指導の工夫	
生徒の学びを見取る工夫	

② 授業者の先生に質問/メッセージを書いてください。

※参観シートは授業者へ原本を、学力向上担当まで写しを渡してください。複写して使用してください。

枚方市立第一中学校 P.11

相互参観授業週間を学期に1回定め、他の教科でどのような取り組みをしているのか実際に目にする機会を作り、教職員が互いに刺激を受けながら、授業を改善していけるように工夫した。



年生 | 評価者： | 記入日： 年 月 日

実践のねらい・この実践を行った理由

↓

つながりマップ

実施時期 | 必要な人・モノ

必要な時間

ここがよかった！こうすりゃよかった！

研修で使用したワークシート

学期ごとに、児童の姿から「つながりを生かした取り組み（カリキュラム）」を振り返り、「ここがよかった」「こうすりゃよかった」と意見を出し合いながら「成果と課題」を明らかにした。

また、前年度の学年担任とともに次学期のカリキュラムの見直しを行い、各単元の学習内容をイメージしたり、前年度の成果を生かしたりできるようにした。

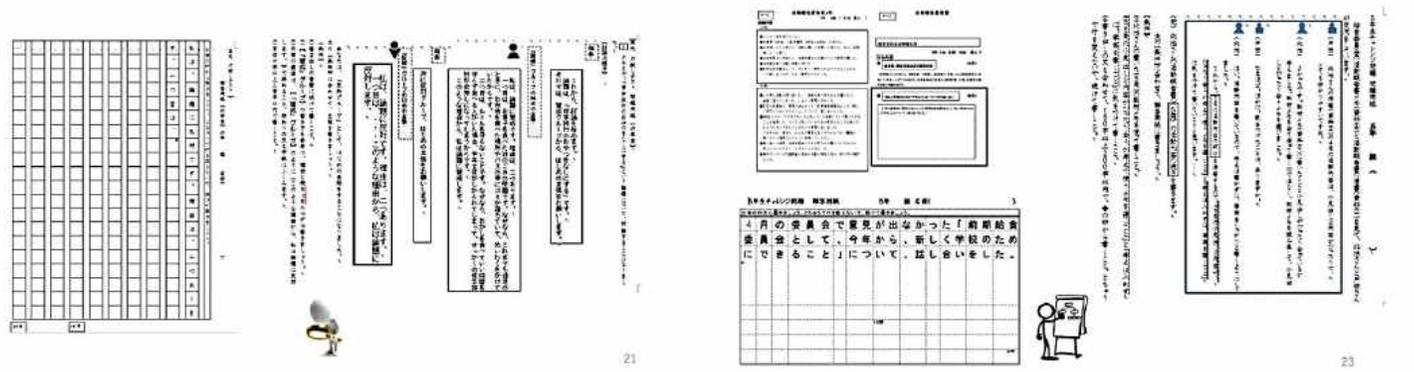


摂津市立摂津小学校  
P.12

## (2) 子どもたちの変容を知る

### (学力向上担当者の活用)

## ②実践 単元末の力だめし問題・アンケート の作成・実施 (4年生以上)



和泉市立北池田小学校 P.10

短い期間で、効果を定量的・定性的に見取り検証する経験を積み、教員一人ひとりの子どもたちの姿を見取る力の向上をめざし、共同研究した単元（4年生以上）で、学力向上担当者が学年教員と協力して単元末力だめし問題・アンケートを作成し実施した。



4年生アンケート



6年生アンケート



5年生問題用紙



5年生解答用紙

授業についてのアンケート 6年 組

学年名: 【一番強く感じた箇所裏面ワールドを隠れて表現しよう】 名前

		しんどいけどいい	しんどい	あまりしんどいわない	しんどいけどいい
1	一番強く感じた箇所裏面ワールドを隠れて表現し、レコーディングする活動を楽しむことができましたか。				
2	友だちと交流することで、新しいことに気づいたり、考えたりするヒントになると感じましたか？				
3	「言葉のひびきで様子を表す言葉」や「ゆめ表現」について理解することができましたか。				
4	自分のリハール相手を聞いて、相手を発音する学習は、相手をよりよくするために役立ちましたか？				
5	自分の考えや思いを相手によりよく伝えるためには、「読み方の工夫」を考えると良い（自分の思いや考えがよりよく伝わる）と感じますか？				

当てはまるところに○をつけてください

★ 相手を学習を通して身につけた自分の感じたことを伝える力は、これからどんな場面でも使えますか？

# 自分の生活を記録しよう！

3年 名前

1. 自分の生活の目標を決めよう。(例) 10時までに寝るぞ! 毎日少しでも運動する。

目標 **少しづつ運動をした!!**

2. 今日の朝起きた時間と、昨日の夜寝た時間に○をしましょう。

3. スマホ・テレビ・ゲームの時間に線を引きましょう。(例)

6月18日(月)～6月24日(日)

記入例	朝 ☀			昼 ☀			夜 ☺			スマホ・テレビ・ゲームの時間合計	4. ごはんを食べた		5. 体を動かす運動、浴びをした ○印で答えましょう。					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9		合計	3時間20分	朝ごはん	昼ごはん	大休	昼休	散歩	習い事
	○	○	○							ゲーム	△	○	○	○	×	×	計	30分

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	合計	3時間20分	○	△	○	○	×	×	計	30分	R	
月	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10時間	○	△	○	○	×	×	計	30分	R
火	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9時間	○	○	○	○	×	×	計	30分	R
水	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10時間	○	○	×	/	×	×	計	0	etc
木	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8時間	○	○	×	×	×	×	計	0	etc
金	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10分	○	○	○	○	×	○	計	10分	etc
土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3時間	○	×	/	/	×	×	計	0	etc
日	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4時間	○	○	/	/	○	×	計	20分	etc

目標達成は...? できた - (したい)できた - あまりできなかった - できなかった

5. 自分の生活を振り返って、より元気に生活するために次はどしたらいいか書きましょう!

もう少し運動する時間をいやす。楽しい運動は大人はたくさん運動する。

もう少し、楽しい運動をする。

生活習慣調査を年間2回実施している。子どもたちが自分自身の生活習慣の課題を見つけやすいように、時間軸利用の研究手法をもとに、テレビやスマホ等、自分たちが使った時間を数直線上に記入していくように工夫し、生活習慣を「見える化」した。



# 4. 「情報共有・発信」に関する参考資料

## (1) 教職員・子どもが意識を共有する

信太っ子が授業で大事にする7つのこと

### 1、丁寧にいきます

(時間を守る、準備する、丁寧に書く、声の大きさ、言葉遣い、  
～しながら聞かない、最後までやりぬける)

### 2、となりの仲間をほっておきません(友だちの悩んでいることを考えられる、一緒に考える)

### 3、今まで学んだことを活かして考えます

### 4、自分からわからないことをたずねます(わかるまで聞きます)

### 5、誰のどんな話もしっくりと考えながら聞きます

### 6、自分の思いや考えを伝えます(自分の考えを持とうとします)

### 7、「なんで?」「～だから」と考えます

「学びのフレームづくり」として、主体的に学ぶ子どもの育成をめざし、学校全体でどのように学ぶのか「学び方」の共有を図った。

また、思考しながら主体的に「聴く」ための手だてとして「聴き方の達人」を職員で共有した。「聴いたあと、感想や意見が言える」「聴いたあと、話について質問する」など8つの項目を作り、聴くことを体系的に捉え、視覚化した。



話の聞き方の達人をめざそう!!

### ①話している人の方を向く

⇒相手を見て、いい姿勢で、うなずきながら、笑顔で、終わりまで聴く。

### ②聴きながら、心の中で「おしゃべり」する 「考えながら聴く」

⇒「どこでそう考えたのだろう」「自分の考えとどこが同じ(ちがう)かな」「〇〇ってどういうこと」と心の中でおしゃべりする。

### ③聴きながら、「わからない」ことを発見する

⇒わかったつもりになっていないか。聞き流してしまった言葉がないか。わからないことがあった時は、「〇〇ってどういう意味?」「よくわからないからもう1回言って」と伝え手に言う。

### ④聴いたあと、話の内容を人に伝える 「リボイス」

⇒本当にわかったというのは、聴いた話の内容を人に話すことができること。

### ⑤聴いたあと、感想や意見が言える 「自分の言葉に置きかえて受け止める」

⇒相手が言ったことに対して、感じたことや考えたことを自分の言葉にする。毎日、すべての授業で意識させる。

### ⑥聴いたあと、話について質問する 「訊ねる、確認、問い返し」

⇒わからないから質問するのではなく、もっとわかるために質問をする。「もっと知りたいことは?」「くわしく知りたいことは?」「〇〇さんはどう思う?」「〇〇やんな?」

### ⑦仲間の話のつづきを想像する

⇒相手が伝えたいこと、困っていることを想像する。一方的に教える関係性ではなく、相手軸をもった対話的なコミュニケーションとなる。

### ⑧仲間の言葉を引き出す 「寄り添って訊く」

⇒「どう?」「いける?」「ここまでわかった?」「これってどういう意味?」「〇〇ってわかる?」「〇〇の公式を覚えている?」

## 聴くことを体系的に捉え、視覚化

和泉市立信太小学校 P.7

## 2学期 「話す・聞く」単元

つきたい力×子どもの実態

# 言語活動の実践

児童の実態が変われば、

言語活動における児童の様子も変わる！

ブロック学年や今後の実践等にご活用ください。

### 2学期

#### 「つきたい力」と「子どもの実態」にぴったりな言語活動の実践について

つきたい力をおさえているか 子どもにとって何を学ぶかが分かりやすいか

研究・研修部

8月20日の校内研修を受けて、2学期に行った「つきたい力と子どもの実態にぴったりな言語活動」について、実践の様子をお聞かせいただき、学校で共有したいと思います。

児童の様子、また、児童の様子から分かる良かった点・改善点などについて、記入してください。

(例) 児童の積極性や参加率、学習に困り感のある児童がどれくらい参加できているか など

【4年】

#### 1. 単元名

だれもが関わり合うために

#### 2. 本単元でつきたい力

目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。

#### 3. 本単元で行う言語活動

「令和」の新時代をともに生きていくために、だれもが関わり合うための、社会の工夫を調べて発表しよう。

#### 4. 児童の様子、児童の様子から分かる良かった点と改善点など

- 自分で調べたいことを選んでの活動だったので、意欲的に取り組んでいた。
- 情報の分類について、児童が自分の基準で分けられれば良いことにしたので、評価がしやすかった。
- 情報を整理すると発表がしやすいことや、必要な情報と必要でない情報があることに気づけた。

△メモの取り方に課題がある児童が少なくなかったので、引き続き他教科でも行う。

△資料の情報が入ってこない児童への支援がまだまだ不十分であった。(声に出して一緒に読むなどの支援を行った。)

夏季校内研修を受けて2学期に実践した「つきたい力と子どもの実態にぴったりな言語活動」について良かった点・改善点をミニ冊子にまとめて配付し、ブロック学年会で意見交流した。



## (2) 校内・校外に向け通信を発行する



熊取町立西小学校 P.9

各学年で取り組んだ、地域の環境や人的資源を活用した「食育」についての体験学習の実践を、栄養教諭が「食育だより」にまとめて発信した。



総合的な学習の時間におけるSDGsに関する取り組みを、ICT活用の視点でとりまとめ、取り組んだことを「見える化」し、市内で情報共有をした。

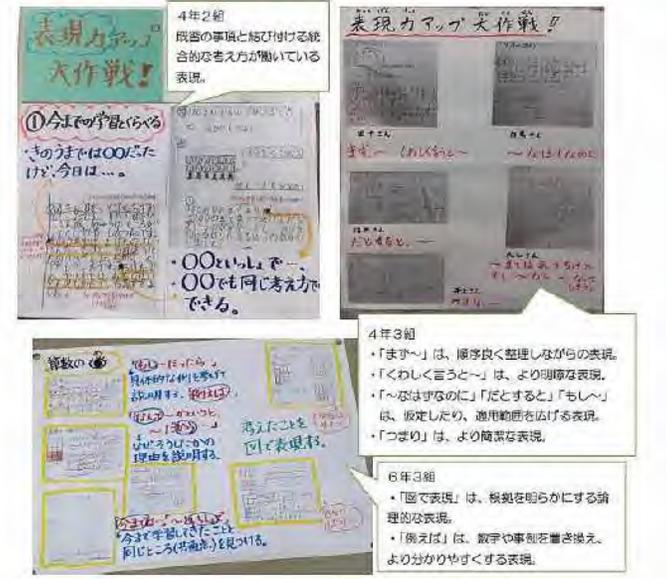


枚方市立第一中学校 P.12

## ハウレ〜カ!

表現するための武器 〜視覚的にはっきり示す〜

子どもの言葉には、数学的な見方・考え方が見え隠れするものがあります。見え隠れするからこそ、その言葉を取り上げ、価値づけを行う必要があると考えています。また、授業内で価値づけを行うだけに留まらず、教室に提示し、視覚的にはっきり示すことが大事です。数学的な見方・考え方が豊かになった表現を継続的に価値づけ、見えるようにしていくためです。以下に挙げるものは、実際に授業やノートに子どもから出てきた言葉です。教師が一方向的に提示している結晶ではありません。形式的に言葉を教え込んでいるのではなく、子どもが密着的に働きかけた言葉を取り上げ、価値づけ、系統的に見えるようにしていきたいです。



和泉市立信太小学校 P.10

研究授業で明らかになった成果や課題、今後の方向性を話し合い、研究通信を発行し、研究通信を通して、全教員で今後の方向性を共有するとともに、研究授業で明らかになった課題に正対した取り組みの紹介をした。

